

80年のあゆみ

＝ 思い出の記 ＝

64 頁に不具合があり、裏表紙の後に追加されています。



長野県上田千曲高等学校

80年のあゆみ編集係・生徒会

80年のあゆみ

＝ 思い出の記 ＝



長野県上田千曲高等学校

80年のあゆみ編集係・生徒会

80年のあゆみ

思い出の記
留りの用紙



80年のあゆみ編集係・生徒会

■■■■■ も く じ ■■■■■

1. 「千曲高校」そこが知りたい Q and A	1 ~ 8
2. 千曲高校へ「80年のあゆみ」	9 ~ 15
3. 当時の思い出	16 ~ 17
4. 修学旅行あれこれ	18 ~ 19
5. 思い出の記（寄せられた原稿）	20 ~ 42
6. 校地の地下水の謎	43
7. 学校の七不思議	44
8. 名物教師	45
9. あのころ	46
10. ハプニングと事件編	47 ~ 72
11. 資料（新聞切り抜き）	73 ~ 85
12. 地学班金字塔	86 ~ 87
13. 青春が駆け抜けた学舎（校舎スケッチ）	88 ~ 89
あとがき	

[表紙 カット]

実科女学校（上）・旧千曲高正門（中）・現校舎正門と管理棟（下）

[扉 カット]

正門近くの校歌碑と制服の生徒

[裏表紙カット]

昭和52年、54年、「定時制軟式野球」全国大会出場
（神宮球場に甲信越代表として参加）



『千曲高校』そこが知りたい

Q and A

Q1 「千曲高校」はいくつかの学校から、出来たと言われていますが？

A. 「上田市立高校」が昭和24年に「県立上田千曲高校」になりました。
それまでの歴史を、校章とともに見てみます。

女子部

上田実家女学校 — 上田市立高女

大正9年

昭和18年



昭和23年

昭和24年

上田市立高校

県立上田千曲高校



市立商工 — 市立上田工業 — 市立商工

昭和17年

昭和20年

昭和21年



男子部

高野豊彦先生



千曲高校・初代校長

つまり、女子部・「市立高女」と、男子部・「市立商工」が昭和23年に一緒になって「上田市立高校」になり、その翌年※「県立」の上田千曲高校になりました。

その経過についてはQ 頁に記しました。

また、「上田工業高校」が一年間だけ存在したことも特記すべきことです。(関読専22頁)

※ 長野県では高校名の前に「県立」と、つげずに 長野県『上田千曲高校』と。

※ 旧校舎は、今の校庭の位置にあった

旧校舎、

自慢のガレージ

新しい自動車が見える。



「正門を入ると料並木
そのみごとなこと
花の時期には市民が見に
来たもの」と、大池先生は語る。

Q. 2 「校章」はどうして『桐』なのか、そのデザインの意味は？

A. 江戸時代の上田城の城主「松平氏」の家紋である『桐』を、ヒントにしました。

昭和23年、職員会議で県立の高校にふさわしいものにと学校全体で考えました。結局、商業科の西沢豊教諭が考え、デザイン化したのです。

“桐”は上田城主の松平氏の家紋からとりました。

その校章のデザインの桐の葉の3枚は、工業科、商業科、※ 家庭科

を表しています。

また、左右から伸びる蝶の触覚は女性の優雅さを、さらに桐の花は、美しさを表しているのです。

※ 当時は「家庭科」であり、昭和38年に「家“政”科」となりました。



五三の桐

松平氏の家紋



校章

【桐の紋について】

桐の紋章を用いたのは、古い中国の思想に基づいている。伝説によると、桐の木は明君の出現を告げる鳥と言われる「鳳凰」が好んで集まる聖樹とされており（花札に「桐と鳳凰がいる」絵があるのはこのため）、王者を祝福する「めでたい木」でもある。

日本では足利氏が朝廷からこの「桐紋」を賜った、また、織田信長、豊臣秀吉も桐紋を用いた。信濃国分寺(八日堂)本堂の扉には桐紋がある。ということは「松平氏」が関係した建物であると分かる。
(『日本の家紋』保育社より)

Q. 3 千曲高校には「桐」の名前を使う「会」がありますが、どうして？

A. 同窓会館の名称が『桐葉館』

昭和27年、将来の校舎の新築工事(昭和48年の工事、現在の校舎)費用などの役にたつようと、全校で校内に「桐の木を1,300本」植えました。この時の桐の子孫が現西門の横に一本だけ残っています。

『桐』は上田千曲高校を表すシンボルマーク(校章も桐のデザイン)でもあり、校庭南西隅にある(電機機械造材)同窓会館を「桐葉(とうよう)館」と、また、建築科のOBの集まりでもある建設業の千曲高校同窓会を「建桐会」と呼んでいる訳です。

事務室と図書室の職員や校用技師の※集まり(親睦仲間)も「桐葉会」であり、生徒会の新聞は「桐」と、つけられています。※ 集まりに学校長も加わると聞いています。

千曲高校生徒会新聞 平成9年6月12日



校章の「桐」については前述した通り(裏表紙参照)

Q. 4 校訓の「質実剛健」はどのように？

A. 初代学校長の学校づくりの考えによるものです。

千曲高校の初代校長高野豊文氏は、まず「校訓」をつくりました。
実科女学校の「勤学を喜び、よき家庭人となるべき」、また、商工校の「要請に応える技術、そして社会に役立つために」と、

質実剛健

社会人としての協調性

職業的特質の伸長

品位ある個人の完成

をたてて、学校づくりに必死だったのです。

高野校長は全校集会にこの「校訓」を熱く述べ、あまりに真剣になり過ぎて長話になってしまい、女性徒はバタバタと倒れたと言われています。



高野校長は熱弁をふるった！

Q. 5 「上田千曲」の校名は、どのようにしてついたのですか？

A. 信州を代表する「千曲川」の、その川の近くにある学校であるからと…。

昭和24年、県立移管になり「校名」をどうするのか、当時としては地名を校名にする(難所があるので「穀」高校、上田城の地、松尾にあることから「上田松尾」高校など)のが一般的でした。当然、「中之条」の名も考えられました。さらに上田城の南にあるからと「南城」との名前も出ました。

また、上田城の旧名「尼ガ淵城」から「尼ガ淵」高校の名も候補に上がりましたが、これらは全国に例がある校名であり、信州および上田を表す名前としてはしっくりしないと悩みました。

結局、PTA会長でもあり、上田市文教委員の島川貞次郎氏が学校の近くを流れる「千曲川」から『千曲』としたいとの提案で、決まりました。

「この名は県下にはなく、かつ『千曲』川は長野県の代表でもある」と自信を持っての校名と言う訳です。

※ この「南城」という高校名は、私立上田西高校が以前は「上田城南」高校であり、やはり上田にこの高校名は使われたのです。



1997、8、7

千曲橋から古舟橋を見る



千曲川でやった!!

Q. 6 「校歌」はどのようにして、また、作詞は誰が？

A. 昭和24年、折口信夫氏が作詞、「信州全体の青年に託された素晴らしい」歌詞です。

校内で歌詞を募集したところ、当時家庭科の1年生だった上羽(暁・塩沢)貞子(現千曲高職員)さんが当選しました(今でも賞状が残っています)。

しかし、もっと格調のあるもの、信州を代表する歌詞にとの願いと希望により専門家に依頼することになりました。

市村丈一(音楽)教諭の恩師でもあります 折口信夫(歌人でもあり・古典、古代史・万葉集研究者)氏が万葉集の研究で信州に来た折りに、高野学校長が作詞を依頼したのです。

こうして出来上がった歌詞は、信州全体の青年に「将来と希望を託されたもの、信時潔氏の作曲とあいまって素晴らしい『校歌』となったのです。

※ 校歌の「歌碑」が正門を入ったロータリーの南端にあります。
「歌碑」は15頁に。



バックに山並みが広がる校門
(え・同校教諭、片桐 昭)

Q. 7 スポーツで活躍した人は？

A. オリンピックに出場した瀧(あわら)純江さん(昭和46年家政科卒)

テニスで昭和24年に東京大会に出場した花岡和儀、安藤功(昭和26卒)、国体に出場のテニスの宮沢ハル(昭和25年)、卓球では春日明(昭和26年)、ボーリング(平成3年、林 剛和)、全国高校選抜スキー大会で由井孝文(大回転)(平成9年)など、頑張った選手は多い。

なんと言っても 瀧(あわら)純江さん が筆頭でしょう。

1976年のモントリオールオリンピックに走り幅跳びで出場。

第35回東京陸上競技選手権大会では女子五種目競技で優勝。

第56回日本京陸上競技選手権大会・ミュンヘンオリンピック代表選考大会では、女子五種目競技で2位。

と、大活躍をしました。

その時の写真、新聞記事や賞状、トロフィーなどが学校に残っています。

※ スポーツの活躍記事は『高校風土記』(銀河書房)にある、瀧さんの関連記事は37頁に。

新聞は84頁に。

陸上の記録は、70~73頁、実科時代のものは68・69頁。



Q. 8 社会で活躍している人は？

A. 非常に大勢おります。

ここでは珍しい仕事、実績の三人を(著作など)。昭和27年機械科卒の小林 侑さんは「警視庁科学調査研究所」に勤務。「文書鑑定」の仕事で「印鑑」のスペシャリストです。

著書に『印鑑・署名の照合技術と窓口係りの実際』(新研社)、※『ニセモノの科学』、※『ハンコ、はんこ、判子』(以上、中央経済社)があります。

小林さんからは、『思い出の記』が寄せられています。(27頁)
※. 55頁のカットにも(電気班で活躍)

滝沢喜和子(昭和35年家庭科卒)さんは「童話作家」として知られています。

※『かくし神様』(信教出版部)、『信州のこわい話』(郷土出版) 信濃毎日新聞夕刊連載『おじいさんのたからもの』 「草笛」を夫婦で吹くことでも知られています。

滝沢さんは本校職員・尾崎先生のお姉さんなのです。



沖田まきみ(昭和14年実科補修科卒)さんは、※『大馬車(ターチ)に乗せて』を自主出版されました。彼女は昭和19年に満州(中国)に渡り、饒河県大和村開拓団に入植したのです。そこは、地獄でした。

「ほうり出されて、北満州の荒野を逃げ歩いていた、『こんな馬鹿な話はない、いつか皆なに真実を知らせなければ』と、『まえがき』に書かれています。中国の荒野を逃げ、さまよった大変な思いを 短歌 にして平和を訴えています。拝読してジーンとききました、ぜひ一読をお勧めします。

三人の本は同窓会事務局にあります。

※ 同窓会事務局に数冊“寄贈”されました。

【ある夏山登山(合宿)】

1年生夏山「合宿」を平成5年までおこなわれていた。「唐松登山」を夏休みに入る前後に1泊2日で実施をしてきた。(登山)

昭和62年は菅平の合宿、2日目に**野岳登山**が予定されていたが、朝からものすごい大雨、結局登山は中止となった。

ところが9時頃になるとその大雨もすっかり上がり、上天気となった。そこで、**武捨茂三郎**登山隊長は決断。

「全員、ホテル前に集合！(散歩の出来る支度で)」と。

つまり、菅平の高原(蘆野やラビの練習場)を9クラス・360人で数珠つなぎになって見学散歩に行こうというわけである。

こうして、とにかく菅平の高原を一周した。 ※ 昔も菅平で夏合宿がおこなわれていた。



Q. 11 『本』に書かれた人(同窓生)がいるそうですが？

A. 岡部千枝子さんの「生き方」が、『恋文』という本になって出版されました。

昭和16年(1941)、上田実科校専攻科を卒業した岡部千枝子さんは切原国民学校に赴任。翌昭和17年陸軍中尉・井出重蔵氏と結婚して満州(中国)へと渡りました。一年後の昭和18年に満州の吉林省で死亡(享年24歳)。

その彼女が昭和16年から結婚までの一年間、婚約者に送った『44通の手紙(恋文)』は戦時下における「時代の証言と愛」として、教え子や同級生に大きな感銘を与えました。

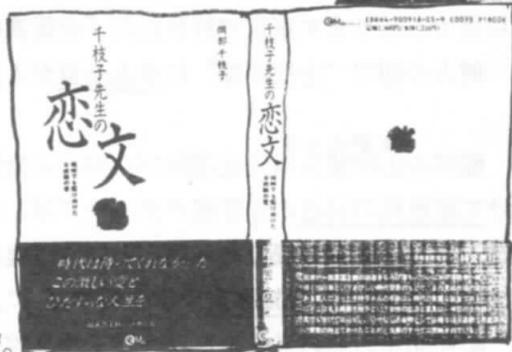
そこで、教え子が「千枝子先生の生き方と足跡」として、その“44通の手紙”をまとめ、

『戦時下を駆けぬけた女教師の愛』《恋文》

と、一冊の本にした(手紙を再現)もので、感動の玉文です。

※ 同志会事務局で数冊預かっております、希望者はどうぞ。

千枝子先生とこの『本』



Q. 12 最近の『千曲祭』はどうですか

A. 今年(第38回)は、例年の10月の開催より早く9月に。しかも運動会はなく、金曜日の午後の校内祭と土曜日、日曜日(一般開放)の3日間。しかし、内容はよく、マスコミに取り上げられました。

最近の千曲祭は千曲デパート、食堂が縮小されています。一方、昭和63年から「クラス(展示)発表」が加わり、製作物や研究発表などよいものがあります。

「校内祭」のステージ発表は、かつての全クラスの出場から希望クラスやクラブとなり、やや寂しい感じですが、しかし、内容はアップしているのです。

全校企画として、平成6年から「空き缶」や「牛乳パック」による大絵画・立体物などが企画・実行されて人目をひいています。

特に今年は、11,000個の空き缶による大絵画(高さ4m、幅25m)は好評でした。また、地元の有線テレビ(UCV)に「カンボジアの取り組み」が取り上げられ「25分番組(千曲がおおいに話されます)」で放映されました。

月曜日の校内祭の一つの「運動会」は、生徒にはあまり人気がなく、今年から中止となり、千曲祭としては一日短くなってしまったわけです。

来校者(お客さん)は、例年3,000人前後(小学生と保護者が多い)

今年(第38回)の様子(編纂)は64頁に。

※ 関連記事は 63, 64 頁
72, 82



「カンボジアに愛をこめて」
それをアキ缶に描いたのです。
📖 は絵本です。

Q. 13 文化班の活動で、目立ったものは？

A. 最近では商業科の「簿記班」が、全国大会で優秀賞。
昭和46年には地学班の研究が『県知事賞』に輝きました。



平成6年、全国商業高校英語スピーチコンテストに出場(大森花子、平成7年商業科卒)。
入学時から毎朝授業前の一時間、「商業簿記」の特訓・猛勉強、平成8年8月にその成果として、また、
目標でもあります東京で行われた「全国高校簿記選手権大会」に県代表として出場。
個人の部で“上位20傑”に6人全員が入賞。団体でみごとに『優秀賞』の栄冠を得たのです。

顧問の山岸猪久馬先生(野科のスペシャリスト)に指導を受けて家政科の13名の地学班のグループは、「塩田平は、かつては湖の底であった」という『塩田平の湖成層の研究』で 県知事賞や学生科学賞に。

昭和36年のこの名誉の記録は『千曲高校60年の記念誌』に記載されています。また、当時は新聞に数回掲載されるなど高校界の ビックニュース でした。

その賞状、※写真、研究論文が今も理科室に残っています。※ 写真13名の名も残っています。 関連記事は 89 頁に

指導された 山岸先生から 当時の新聞記事を提供していただきました。



Q. 14 学校は日曜と休日は、全く休み(校舎が無人化)ですか？

A. 平成8年から第2、4の土曜日が休み。なにより学校が無人化(警備会社の警備システムにより日直、宿直はなく校舎には誰も居ない)となっています。

旧校舎時代は※宿直(2人で宿泊)があり、夜中に校舎内を巡回するのだが「0番教室の廊下は痛んでいて、歩くとギーギーと音がして、自分の足音に怖くて(もっとも男子が力を入れて踏み締めると床が抜け落ちた)」と。 ※ 宿直制度は昭和45年頃廃止、日直(日曜日)にも一人は管理人がいたものでした。 同窓生の日教諭当時の「木造校舎と宿直の思い出」

ところで、新校舎の管理は平成になってから、前述の警報機による警備システムで警備会社が警備。学校は夜と休日はまったくの無人化となったわけです。学校が※学校らしくなくなる(人がいない)こと、その警報機を操作(セットと繋)するわずらわしなど心配しました。機械警備化した数カ月は慣れるのに大変でした。

帰宅する時に、この警報機をON(セット)するのを忘れて(帰宅して気が付き学校へUターンしたことも)、出勤して警報機をOFF(繋)することなく入室してしまい、5分後に警備会社かとんで来たりのハプニングが。

休日にはクラブ活動が体育館やグラウンドで行われていますが、校舎内へは入れないのです。

※ かつてのように日直や管理の職員がいなくなって 休日などは校舎には誰もいない、生徒や卒業生が訪れても無人のときが多い学校となり 寂しい。

千曲高校へ
80年のあゆみ

“県立” になれるか？

千曲高の前身が 廃校の危機

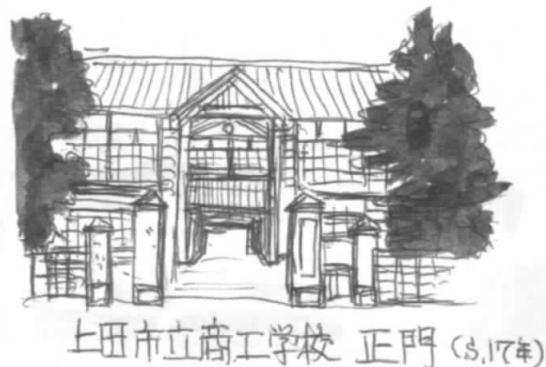
そして、県立高校として

昭和22年当時、上田市には女子の「市立高等女学校」と、上田市の強い要望による実業学校の「市立商工学校」があった。

学制改革に伴い二校を統合して「市立高校」としようとしたが、市では三つの中学校を建設しなければならず財政的に問題が有り、困難であった。新学制準備協議会の最終結論の会議では 廃校 とする意見が多かった。当時市議会文教委員の島川貞次郎(議長)氏が、

「県立 に移管すれば在置(存続)の可能性がある…」
との案を出した。

その案にて、すなわち二校を「合同高校」としての県立に移管するという事(希望)で進められた。



上田市立商工学校 正門 (S.17年)

あ の こ ろ

昭和19年に入学、入学時代は材木町に学校があり、勤労働員で笠原製糸(現笠原工業)へ。そこで木製の飛行機を造り、この飛行機を地上に並べ戦力があることを示した。

都会から多くの転校生があり、彼らは「積極性」があった。クラスでは靴での通学者は1名のみ、他は下駄履であった。米持参の関西修学旅行も全員下駄履で行った。

昭和17年に商工学校へ入学、小県蚕業学校(現上田東高)の蚕室を借りて半年、東小学校に1年、さらに上田市立東国民学校へ移ったが、校舎はまだ新築工事中だった。勉強より戦争のための勤労働員、授業は1週間に一日ぐらいだった。学生服は配給で、クラスに3着ほどで、クジ引きで争った。

食べ物がなく、弁当はコッペパン1コ、農家の同級生は米の弁当だったのがうらやましかった。

佐藤次雄(昭和20年卒、建築科)



千曲高校へ
80年のあゆみ

上田千曲高スタート

3つの学校の1人の校長

昭和23年に「商工」と「市立高女」が合併し「市立高校」となったが校長をどうするかで時間がかかった。

つまり商工の綿林校長（男子部）か、それとも市立高女の一志校長（女子部）か、どちらが新しい校長となるかで難行した。

結局、市立高女筋（一志氏の後輩である）の組合立塩尻高等学校長の高野豊文氏を市立高等学校長とした。その高野・新校長は昭和23年9月18日付で

上田市立高等学校長 兼 上田市立高女学校長 兼 上田市立商工学校長 と3つの学校の校長の辞令があった。

そして、高野校長は、10月18日、上田駅10時13分の列車で到着した。11時に学校正門へ着任した



【建築科と商業科】

80年のあゆみ (1)

S17年

昭和13年4月、市立商工学校本科（3年間）として建築科と商業科を設置した。

生徒数は合わせて300名。

商業科→私立上田大原簿記学校（東京大原学校分校）を使用。

建築科→小県蚕業蚕室（現・上田東高校）を使用していた。



【学校を借りる】

S18年

昭和18年4月には、上田市立東国民学校（材木町）の新築工事中の二階の教室を借りて授業をした。しかし、二階へ行くにはハシゴを使わなくてはならない。その上、教室では大工さんが窓や壁を造っていた。

飛行場跡へ「上田千曲高校」を

千曲高校へ
80年のあゆみ

男子部の移転と格納庫教室

前記のように女子部(商女)が先に移転をし、その後を男子部(商工)が移転した。

『日記』風に見ると

昭和23年9月、綿林商工校長は赴任日から引っ越し準備。

10月13日、14日は本格的引っ越し作業。

15日に完了。

16、17日は教室準備。ただし、10月13日(水)は大格納庫改修工事。

落成式を11時から行っていた。また10月14日には、女子部は一志校長の「送別会」を父兄会と共催で開いた。

10月16日は、女子部で校庭運動会を行っており、一志(元)校長は来賓として出席している。

男子部の教室は **大格納庫** であり、10月20日には全ての移転は **完了** した。



生徒会はこうして

生徒会のスタートは『生徒大会』という、これは生徒集会、そしていよいよ活動開始なのである。

生徒会活動のスタートと活動内容をやや細かく紹介すると、戦前には『生徒会』と称されるものはなく、『校友会』(親睦が主な目的、県下でも定時制などこの名称である)

また、自らの自治ということで「自治会」、これは組織的な意味を持つ。ところが「自治」の名は中高生には不相当ということで『生徒会』に改められた。

昭和23年10月、男子部の移転完了にあたり、10月20日に女子部との「対面式」が行われ、その後「国体派遣選手の壮行会」が「校友会」の名で催された。

その後、生徒会の発足に向かって努力が重ねられ、昭和24年2月17日に『第一回生徒大会』(生徒総会と呼んでいない)が開かれ、会則が審議され、満場一致で可決された。

会長(1名)、副会長(男女各1名)、書記長(1名)、副書記長(1名)

有力候補者が大勢で激戦、接戦となり、またその後の議題もあり、遅くまで白熱の議論が行われた。

ちなみに、24年度の 生徒会の主要行事は、

- 学芸祭(2学期)
- クラスマッチ(5月、10月、2月には男子サッカー、女子バスケット)
- 遠足(6月)
- 校庭大運動会(10月)
- バザーと展覧会(「学芸祭」と同時に行う、これが今日の文化祭・千曲祭の校内祭の前身であろう)
- 弁論大会(10月、※校外弁論大会の予選)
- 音楽会(3月3日)



かつては「弁論大会」や「討論会」もあった……。

この時の 生徒会費 50円

※ 校“外”弁論大会とあり、予選という外部でおこなわれるその大会への校内選考会であろう。

※ 討論会については33頁「あのこと」に。

市立高校は男子部と女子部

千曲高校へ
80年のあゆみ

前記のように10月18日（月）には新校長の着任、歓迎と対面式が行なわれ、4月1日以来、男子部と女子部の職員は初めて一同に会した。

初めは、商工（男子部）と市立高女（女子部）は 対立意識が強く、年間計画も別々、時間割の組み替えもせず、男女両部に分かれて授業がされた。

そこで、11月8日には「商工」と「高女」の親睦をはかるため「野球対抗方式」を計画した。（時間で3イニングで打ち切った）

また、11月11日（水）には 職員懇親会を開き、かつ、全職員で合同の記念写真を撮った。

しかし、両校職員はなじまず、職員会議の席も男子部、女子部と色分けされて座っていた。

3学期の始業式まで別々であった。

結局、2人の教頭（高女の遠藤教頭、商工の池田教頭）がいたのを、上田松尾高校から坂下教頭を迎えて1人とした。



昭和24年以後の〇番教室……

門はこれより
東にあつた。

ミシンの実習に精を出す……



【ベニヤ盗まれる】

80年のあゆみ(2)

S21年

飛行場跡（中之条の現・グラウンドの地）に市立高女の女子部が移転してきた。

その年の12月のこと、講堂のベニヤ12枚、板戸4枚が盗まれ、炊事場にも被害があった。



【高校が廃校の危機】

S21年

市立高等女学校と市立商工学校が統合して市立高校しようとしたが、上田市では新しく3つの中学校の建設案があり財政的に上田市としては高校は無理。

『2つの高校を廃校に!』という意見もあった。



【男子部と女子部】

S23年

最初は商工（男子部）と高女（女子部）は仲が悪く、年間計画も時間割も別々にやった。

職員会議も、先生方の席は男子部と女子部と分かれて座っていた。

男女共学の心配

千曲高校へ
80年のあゆみ

男子部・女子部の並立（行事も教室も異なる）のため男女共学はまだスタートとはいかなかった。
「0番教室（家庭科）前を通るのに道の反対側を歩いた」と男子生徒。
「女子と一緒に、クラブ活動が一緒に出来る、青春そのものだった」との男子生徒の声も、
その男女共学について教師や保護者も心配をして昭和22年7月16日女子部（高女）がクラスアンケートを行なった。

共学に	賛成 ○	生徒 19名	保護者 17名
	反対 ×	生徒 7名	保護者 7名

また、昭和24年5月24日に社会研究班がアンケートを全校で行い
800名の回収者

共学に	賛成 ○	46%
	反対 ×	40%
	保留 △	11%

意外や、反対が多いのにびっくり。



堤防にて（元・1952年1組、由井克哉）50年

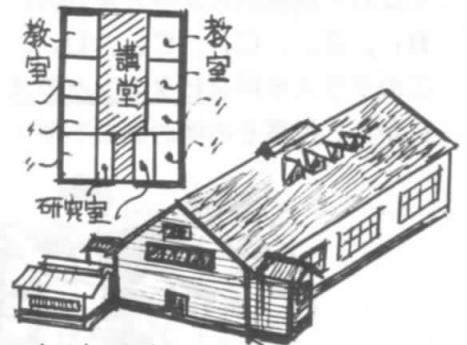
【校地内の埋蔵文化財】

旧校舎撤去にともない、この付近から土器類が出ているとのことで、昭和51年7月18日から8月6日間の発掘調査が行われた。

調査責任者は塩原松美学校長、本校社会科の奥口松巳、小林幸好教諭、さらに猪熊啓司教諭と考古班が加わって、敷地内を11区に分けて発掘した。

その結果、大甕(か)胴部、弥生式土器、土師器の破片が発見されたが、いずれもすでに攪乱(破壊)されていた。

飛行場建設工事とその後の破壊が激しく、文化財の価値はないと結論付けられた。



大格納庫を仕切って
講堂と10教室にした。

【合併なり、まず市立高校】

80年のあゆみ(3)

S23年

昭和23年、県立の高校ならOKということで「高女」と「商工校」の合同校（合併）となり「上田市立高校」となった。

格納庫教室が突然……

中之条の飛行場跡にはまず「高女」（女子部）が移転した。

10月に「商工」（男子部）が移ってきた。



大雪で化員むいた

【校長の決意】

S26年

12月に猛吹雪で大格納庫教室が急に傾いた。

1週間臨時休校。

学校長はこの機会に「校舎が欲しい」と県へ訴え、新築してもらうことになった。

先進性とビタミン組 (男女共学)

千曲高校へ
80年のあゆみ

高野新校長が着任し、千曲高の前身・市立高校は昭和23年11月に校務分掌が発表された。この分掌の職員の名列順が50音順であった。当時は、職員の名列は年功序列型であったから、これは当時としては先進的であった。

教務部 : 部長 高野校長
: 副部長 池田(教頭), 遠藤(教頭)
: 教務係 北沢, 小林ト, 清水タ ……

となっている。

一方、生徒達は実際の授業は男女共学は商業科だけ、他のクラスはクラブと生徒会活動のときのみ男女が一緒であった。

昭和26年度新入生(1年生のみ)から男女混合編成のホームルームを試みた。

すなわち機械科の半分と家庭科の半分を組合せてA₁, A₂とし以下建築科、家庭科2組とでB₁, B₂, C₁, C₂, D₁, D₂のクラス名で呼び共学をスタートしてみた。

このクラス名科をビタミンクラスと呼んだ。

しかし、授業その他の面で不便であり、この試みは1年しか実施されなかった。



実習は作業、学校造りだった



機械科の自動車教習コース

【男女共学】

S23年

昭和23年10月に高野新学校長を迎えた。
商業科のみ男女共学であり、授業は男・女別々であった。

【大格納庫の教室】

S23年

昭和23年、高女(女子部)は兵舎の0番教室(校門を入れてすぐ右)を。商工(男子部)は大格納庫を区切って教室(真ん中を講堂)として使った。

【市立高女も借りていた】

S23年

大正9年にできた上田実科女学校は、昭和18年には上田市立高等女学校となり、上田東小学校に半年、その後、上田一中の校舎を借りていた。昭和23年には商工校と合併となり、追い出されるように中之条飛行場跡(現在の千曲高校の校庭)へと移転した。



普通教科のみ
一緒の授業

県立完全移管祝賀式

「学校開放」それが「千曲祭」へ

昭和28年に、千曲高校の県立完全移管祝賀式が行われたが、それにあわせて「第1回学校開放」が催された。第4回（昭和31年・創立40周年記念として）も盛大に行われたが、毎年の実施はエネルギーをあまりに使うので、今後は「学校開放」と「運動会」を交互に行うことにした。

特に実業高校の特色を生かした「学校開放」は市民、地元の人々に好評で 5000 人の来校者を得た。昭和46年から「千曲祭」（文化祭）として一本化された。

一、志美しき信州の青年の
言ふことぞ潔よき
わが誓ひ山川にかけ言ふ
千曲川汪洋に行くきはみ
この園はふるはは
安くふれ我が父よ

二、信州の青年は学び得て聡明に
ことだての正しきよ
鳥帽子岳の山の誓根延ふ如
然遠きわが文化興しは
うらやまは我が郷土
のどかなれ師の君よ

三、広き胸寛びて青みたり小泉
人心柱にたぐり
よき歴史世々を経てなごやかに
あづかる夢霞段む上田城
信州の青年よ

校歌

折口信夫作詞
信時潔作曲



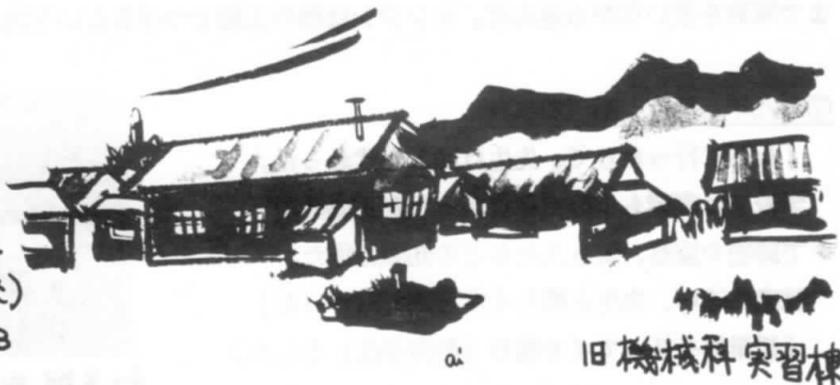
一志 校長
(上田市立高廿)
S. 20 ~ 22



綿林 校長
(上田商工)
S. 22 ~ 23



高野豊文 校長
(上田千曲高校)
S. 23.9 ~ 32.3



旧機械科実習棟

あ の こ ろ

● S38年 久保田 効 (電気科) ●

「電気科の三期生。実業校のウケはよく電気科の教室の壁は求人案内でいっぱいだった。担任の上野郁夫先生（数学）はよく世話をしてくれた」

【当時の思いで】

() は、旧姓。敬称略。
昭和50年毎日新聞「高校風土記」より

①S21年 三井みよし (本科)

「防空壕を掘り、落下傘の糸よりや、須川地区の開墾に当たった。標準服は、モンペ。よそ行きの絹の着物をこわして作った。カスリやシマで柄も色もバラバラなのに桃井春子先生は洗いジワやボタン一つにも注意をして見事なものに仕上げた」

※ 桃井先生の寄稿は 20頁に。



②S21年 中村萬亀男、金井光幸、竹内道直 (上田工業)

「授業は週に一日、他は学徒動員で工場に行き飛行機の部品を造った」
「工場には先生がたまにしか来なかったので千曲川へ水泳に行き中洲で昼寝をした」

③S21年 滝沢 (山城) るり江 (本科)、大塚みわ (本科)

「一志校長は規律に厳しく、上級生をたてるよう礼儀を説いた」

④S21年 四条 (滝沢) 圭 (本科)

「現在の清明小学校の脇から格納庫の校舎に移った。
殺風景なところだった。
S23年には男子部が移転して来た。
珍しそうにジロジロ見た」



⑤S23年 成沢秀敏 (機械科)* ※ 同窓会長です。

「商工を卒業し、新制高 (機械科) をさらに一年。七つボタンのジャバラ服姿の先輩が復学してきた。共学となり、軟派ができた。演劇クラブにも女子が入りコーラスもできた」

⑥S25年 久保山悟 (建築科)

「木枠にベニヤを張り、緑のペンキを塗って飛行機を二か月がかりで二機造った。大八車に乗せ駅まで軍歌を歌いながら運んだ。エンジンは他の工場でつけるという話だった」

⑦S25年 手塚 裕 (機械科)

「兵隊に行ったりで、先生は30人も代わった。
学校では実習も十分でできなかったが工場動員で鋳物や旋盤、焼き入れなどの知識は得た。
就職に迷い、先生と親しくする間もなかった」
「授業料を払ってイモ掘り (勤労奉仕) をした」



生徒は出征兵士の
家で稲刈りの手伝い。

え・片桐 昭 敬諭

⑧S25年 篠原幹夫 (機械科)

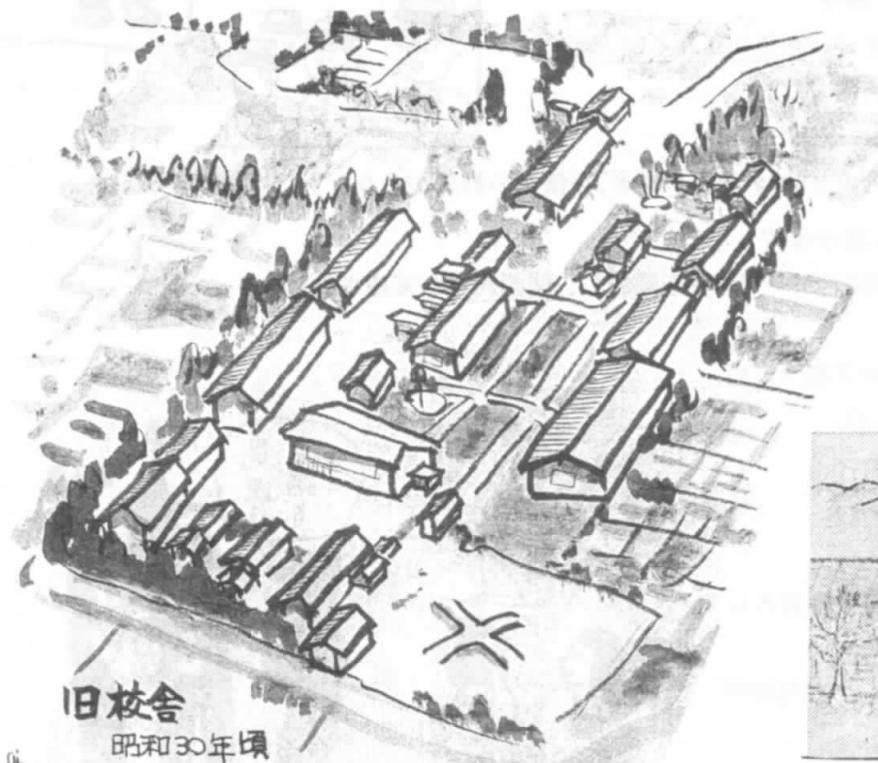
「下駄履き。ポロ服で渡り廊下を傘をさして歩いたほど。長髪禁止なのに卒業間近に長くしてしかられた者もいた」

千曲高校新聞から『桐』へ

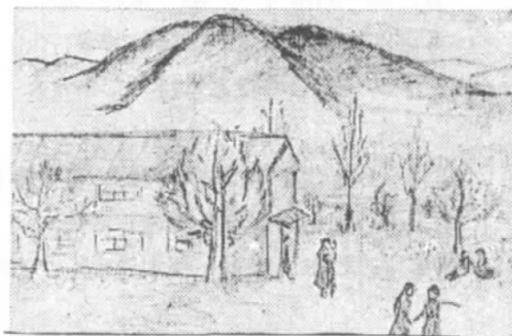
昭和24年3月15日付で新聞班が「校友会報(城南会報)・第一号」が発行された。しかし、この「校友会報」は半月後6月15日に「千曲高校新聞」(第2号)となる。

昭和36年には名称も「桐」となり、小冊子となった。現在もこの「桐」の発行は続き『新任の先生の紹介』『千曲祭と生徒会活動』など、年2回となっている。

なお、「生徒会誌」として『空』が年間の「生徒会活動の総括」と、「卒業生 贈る」などの内容で、卒業時に発行されている。



旧校舎
昭和30年頃



丸・A50. 家政1年 村井弘子、「学舎」

あ の こ ろ

⑩ S28年 岩田(柳沢)きし江(被服科)

「入学時の高野校長の講和『校舎は飛行場跡でボロだが、誇りを持ち、気風を盛り上げて下さい』が心に残っている」と。

⑪ S30年 高井忠史(商業科)

「高野校長(S24年~S31年、社会科)の話は長く、女子は倒れた者もいた」

⑫ S30年 堀内(橋詰)きよみ(家庭科)

「ガツガツ勉強はしなかった。進学したのは一人だけ、自習の時間に小宮山文子先生(体育科)が、千曲川の堤防に連れて行って性の話をしてくれた。キヤーキヤーいいながら聞いたものだ」

⑬ S37年 小池貞介(建築科)

「運動会でクラスが連続優勝した時、それを祝って御所の集会所で、酒を飲んで騒いだ。皆でかばいあい、犠牲者をださなかった。退学ものだった。生徒会長や応援団長も一緒だった。久保先生には、心配をかけた」



【修学旅行あれこれ】

【昭和24年と平成の比較】

昔は、米持参であった

- 昭和15年 文部省通達により修学旅行は「制服」でと。
- 昭和18年 以降は 全面禁止
- 昭和23年 女子部(市立高女)が 県外 へ
6月14日、16日一泊2日で糸魚川、親不知方面
米、味噌、野菜を持参した。
- 昭和24年 6月に夜行出発で 奈良京都 へ



学生帽であった。

交通公社から「特別列車」(600名以上の乗客)を使用の勧誘があり、
上田松尾、染谷、小諸の各校3年生
と『千曲3年生』の600名が一列車分を編成し、関西旅行が実施された。

- 6/23 夜出発
- 6/24 朝9:00奈良着 夜9:00京都へ 泊
- 6/25 石山寺 八瀬 京都 泊
- 6/26 朝 出発、上田6:00着
※ この時も米持参であった



昭和20年代は米を持っての旅行

昭和50年代までは修学旅行の事前学習として、
塩田平の文化財巡りを実施していた。
建築科の松本、相馬、藤木先生らが案内説明した。

修学旅行は九州へ、そして沖縄

【平成の初めまで】

平和教育を目玉とした 広島 を中心にした2学年時の秋(9月~10月)の修学旅行は、関西(京都、大阪、姫路、岡山)瀬戸内海(瀬戸大橋、琴平詣で)などを含めて数年続いた。コースによっては鈴鹿サーキット(三鯉)、明治村に寄ったことも。

ところで、新幹線が博多まで伸び、県内の高校も九州まで足をのぼすようになった。
平成5年には 4泊5日 で長崎を中心にした九州修学旅行を実施した、初日は博多からバスで川上峡泊、2日目はバスで長崎へ。午前中は長崎平和公園、午後は班別行動で市内散策。(9クラス一緒であった)

※ この時は膨大な内容の資料付きの「菜」であった。



あ の こ ろ

機械科1年生の実習の時、旋盤を使って切削加工をしていた。刃を取り付けた台がしっかり固定されていなかったのを知らずに切削始めた瞬間「ビシッ」という音がして刃が工作物に食い込み旋盤の軸を曲げてしまった。修理代は当時で何と30万円。(学校で負担した)

2年になり次期生徒会の役員選出の時、担任から「お前は、会長候補で出ること。学校へ迷惑ばかりかけていたのだから」という陰謀にはまり、会長となった。

いまになって思えばすべて良い思い出だ。千曲高校で良い経験をさせてもらった。

機械

成田 政志 (S60年卒)

平成7年の2年 もやはり「長崎」への4泊5日であった。この年は福岡の「スペースワールド」の体験(?)がもうひとつの目玉となっていて、生徒はもちろん引率職員もこの大遊園地で楽しんだ。(費用は約10万円)

移動に時間がかかり過ぎとの声はあったが、生徒は満足であった。

【そして飛行機】

平成8年にはさらに 飛行機使用が可能 になり、修学旅行もより速く、かつ、新しい内容を求めて沖縄へと変わった。いよいよ、飛行機使用の時代の到来である。

沖縄の 戦跡をメイン に据えた修学旅行が県下一斉に始まり、本校もその先駆けとして「3泊4日」で11月に実施された。費用は11万円。

なお、その年(2年)は千曲祭で「沖縄展」(コーナー)を*学年として取り組み、みごとな展示で成功であった。* 学年で造った「千羽鶴による“ヒメユリの少女”(顔)」は実によかった。



台風の到来の中で

修学旅行ではいろいろなアクシデントが起こるもの。平成4年、広島への修学旅行は出発前から台風の心配があった。(染谷高校のように台風のために中止となった。)さて、台風の到来を心配しながら上田を出発して一路、広島へと向かったが、台風のため(四国山陽地区に上陸)新幹線は岡山止まりとなったのである。

急遽(きょ)どこか宿泊する場所(ホテルか旅館)をとった。旅行業者は大変、緊急の出来事への対応はそれこそ筆舌につくせない苦労があっただろう、先生も生徒も心配、不安であったはず。

幸いどうにか旅館が確保出来た。

やっと食事も間に合ったが、まったく予想だにしない展開となった訳である。

「緊急なので狭い部屋だった、ゴキブリがいたかなー?」

「でも、かえて印象深い修学旅行になった」

「こんな経験はやりたくたって2度と出来ないもの」

と、当時の建築科2年生は懐かしく語る。



あ の こ ろ

● (昭和35年) 鮎沢 亨 (体育科) ● (元本校職員)

^{あひら} 涼淑江(昭和37年卒)は秋田の国体でやり投6位入賞。何でも進んでやった。

初めはやりが地面になかなか刺さらないで泣いたこともあった。

※ 妹の純江(昭和46年度)は、和歌山でのインターハイで五種に3位。走高跳は、対抗者がいなく一年から全国大会に出た。(円盤では、34m50の記録も持っている) ※ 71頁に 関連記事。

● (昭和38年頃) ●

4人(フオア)ハンサムの山浦正孝(体育)、小林 亨(鮎沢になる)、小布施睦夫(体育)、下村和彦などがいた。黒板に先生のアダナや似顔絵を書いたりするのが面白かったと当時の生徒が語った。

小布施先生はオブチャン、藤沢 巖雄(機械科)はアチャコに似ていたからアチャコさん。

思い出の記

「生徒として先生として」

桃井春子（昭和2年、実科高女卒）

実科女学校を昭和2年3月に卒業、学生時代の望みと夢に向かって努力を重ね教員になる勉強をした。務めが始まったが、戦時特別措置のため市内の工場に勤労働員として、生徒達と働きに行き、学校は週に二日位の授業だった。

学校内でも男の先生方は、次々と招集になり先生の数は少なくなってしまったため、女の先生方も「宿直」をするようになり、二人で夜の警備をした。

真っ暗な校舎を身支度をしっかりとて、豆電球の明りで夜回りをした。その時の勇気を思い出してみると、今ではどんなことでも怖いとは思うことはない。それに、兵隊さん達が敵陣をめがけて自分の命をも顧みず飛び込んで行く恐怖を思えば、私達の怖さなんか比較にならない。

終戦により昭和21年4月、陸軍飛行学校用地（中之条の千曲高校の校庭）に移転する事になったのだが、まだ全校生徒が移れないので、まず上級生が先発として赴き兵舎の掃除をしたが、とても授業ができる環境ではなかった。

先生方は本校と「飛行場の分校」とを行ったり来りの授業だった。雨の日は上田橋を通るのだが、強風にあおられ傘はキノコ（逆三角形）になり全身びしょぬれ。

一年間は掛持ちの授業だった。

22年に全校生徒が移転となったが、さらに一年間は職員と生徒により飛行機の残骸や兵器の片付け等でとても大変だった。

「宿直で学校を回ると、軍服姿の兵士が宿直室の横にある池の側で、挙手の姿で待っており、ニッコリ笑って消えるのを夕べ目の前で見た…」という怖い話も聞いた。

名残りを惜しみ飛び立って行った数知れない飛行士の霊が、仲間に別れに来たのだろうか。

動員時代に生徒とともに泣いた苦しい時もあったが、それだけに、新しい校舎に移った喜びはひとしおだった。

教え子（私のクラス）に上羽貞子（上羽）（現在千曲高校の家政科の教諭）がいる。同窓会に努力してもらっている。



上田市が育てた学校（元・同校教諭、片桐昭）

— 元本校職員（上田市大屋）



校門前にスクールバスが……

* 上羽姓は6頁に、

【スクールバス】

S26年

昭和26年7月から定期バス（スクールバスと呼ぶ）が正門まで来るようになった。朝と放課後各2台。定期代は1ヶ月200円。

80年のあゆみ(5)

「頑張ったあの頃」

井出富佐江（昭和18年、実科高女卒）

昭和10年代は実業高校は大変な人気で、入学志望者が殺到していました。

私立「上田実科高等科」は、現在の清明小学校の地に本科と高等科の併設の学校でした。

小規模ながら内容が充実しているという評判のもとに入学しました……。幸いに私達の年度から1クラス増の3クラスとなりました。

権威あるオールドミスの先生方のモットーは、「学校の名誉・クラス及び個人が進歩する」であって、個々の責任ある活動が望まれ、背筋は何時もシャンと伸びていたものです。

昭和15年は、満州事変から支那事変に移り戦争が色濃くなって、大東亜戦争へと。

各地で国をあげての祝典が行われ、各学校も出場、市営グラウンドで胸を張っての堂々の入場行進、そして2600人の美しい人文字が描かれました。

全校が1つの輪となって見事な出来栄のダンス。それもその筈です、放課後の特訓はそれは厳しく只々緊張の連続でした。整列時は微動だにできず、壇上の先生の鋭い目が光り、ぼんやり者がいると小走りに近寄って来て持っているレコードで頭をコツン……。

全ての面で軽率な行動は許されず、常に正しい心構えが要求されていたのです。

スカートで革靴の底を鳴らして誇らしく歩いたのが、大東亜戦争が勃発して、黒色の木綿のモンペと下駄へと変身しました。

教育内容も戦争に荷担していかなねばならない時代となっていきました。英語は一切使ってはならず、日本語に訳し難い「ピンポン、スカート、バット」など、会話には苦勞したものです。

衣食住は創意工夫で日常生活に事欠くことのない教育内容となってきました。文字通り「質実剛健」の気質が涵養された訳です。

設備も充分でない校舎でしたが、梅の花が香る窓辺や涼しいプラタナスの木陰で友と語り、からたちの垣根に囲まれたミシン室で友と競いあった事が微笑ましく、私たちが育ててくれた学舎を誇り感慨深く思っています。（上田市古里・在住）



【ビタミン組】

30年のあゆみ (6)

S26年

4月の新入生（1年生）から、機械科の半分と建築科の半分と家政科の半分を組合わせてA₁、A₂、B₁、B₂、C₁、C₂、D₁、D₂としたのでビタミンクラスと呼んだ共学がスタートしたが、1年間の命であった。

【第1回学校開放】

S28年

県立完全移管（上田千曲高校）の祝賀会が行われ、それにあわせて第1回学校開放が行われた。

（千曲祭の前身）

〈運動会と学校開放を交互に〉

昭和31年には第4回学校開放を実施したがエネルギーを使い過ぎるので、次の年から「学校開放」と「運動会」は交互に行うことになった。

幻の上田工業学校

柳町照雄（昭和21年機械科卒）

「上田工業学校？」・・・はて、そんな学校は聞いた事もないし、何処にあったのかなも知られていない。おそらく今の人達は勿論、当時の人達でも知っている人は殆どいないと思う。然し現実にあったのだ。上田千曲高等学校同窓会名簿を見て下さい。

昭和21年卒(1946)『上田工業学校卒業生名簿』が存在している。それ以前にも以降にも、校名は出てこない、ただ一回だけの「幻の上田工業学校」なのであった。

私達はその学校の卒業生であり、それも本校機械科第1回の卒業生だ。入学した当時は、市立上田商工学校で、機械科が新設された時だった。コースは商業科、建築科、機械科で各1クラスの設定だった。

商家出身の私は、親の勧めもあり、商業科に入学した。当時は大東亜戦争の真っ最中で、学校生活も軍隊式の採用に伴い、登下校の服装は、戦闘帽に国民服、足にはゲートルの着用が義務化され、カーキ色一色に統一されていた。また、挨拶は総て軍隊式挙手礼による敬礼方式が取られていた。一日の授業は、朝礼の裸体操から始まり、一日7時間授業の中に2時間以上の軍事式訓練が必修科目とされ、軍隊から配属された教官の指導のもとに、毎日戦闘訓練が行われた。今の生徒諸君には想像もつかない学校生活だった。

入学してから約1年後、戦争もいよいよ熾烈^{しよく}を極め、昭和19年(1944)戦時下、中等学校令により、商業科過程を廃止するという指令が文部省から発令され、本校もこれに従わざるを得ず、私ども商業科2年生50余名は、やっと慣れて来た授業だったが、やむなく機械科に強制転換させられることになり、皆は戸惑うばかりであった。

校名も商業科過程がなくなったのを機に「市立上田工業学校」と校名変更された。

戦局は一段と厳しさを増し、敵軍29大型爆撃機が頻繁に本土上空に飛来してくるようになってきた頃に、我々機械科2年生甲乙両組に、当局より学徒勤労動員令によって出動命令が下った。7月8日学業を離れ、上田市内の三童製作所という軍需工場に入所した。



【ピストル騒動】

S28年

昭和28年、学校に警察が来て「学校にピストルがあるそうだが」と高野校長が調べられた。これは、実は池を掃除したところ2丁のピストルが出てきたので、これを町の某(男)に渡したためであることがわかった。

【就職難】

S32年

昭和32年、景気はどん底でクラスでは11月になっても2~3名しか就職が決まっていなかった。先生方は県内企業へお百度回り。交通費はなく、臼田・小海から歩いて帰校。



80年のあゆみ(7)

高野校長もびっくり

入所した生徒は工場内の、旋盤、フライス盤、仕上部、治具、検査部等の各部署にそれぞれ配置され、軍需兵器増産の使命を担う事になった。朝7時から夕方6時迄、夜勤は夕方5時から深夜12時迄の交替勤務。学徒の皆は工員の人達と一緒に機械油にまみれ真っ黒になりながらも、国のためという使命感に燃えて、本当に一生懸命に働いた。

こんな生活が1年3か月続き、昭和20年8月15日(1945)終戦と同時に解放され、学校へ復帰する事ができた。

しかし帰って来て見た学校は、校舎も校庭も戦時中、工場として撤収利用されていたため見るも無残な荒れ放題、我々の教室は、強制疎開のため校舎毎取り壊されていた。

ガラクタだけが放置されていただけだった。それから生徒全員で後片付けに追われる毎が続いた。

戦時中は本校の教師も軍隊に招集され、年配の教師以外は殆ど残っていなかった。同級生も何人かは志願兵として出征して行ったので、授業再開の目途がたらず、その後ぼつぼつと復学し2か月ぐらい後、授業再開になった。教室はなんとか確保できたが、机も腰掛けもなく、やむなく^{まいる}箆を敷いて座学で授業を受ける状態だったが、学校の復活はどんな条件下でも、我々には大きな喜びだった。

そこへ、また大きな問題が持ち上がってきた。

戦時中当局の圧制により商業科廃止を余儀なくさせられたのは、つい2年前の出来事なのに、それが敗戦となって時代の状況変化に伴い、商業科が必要となった。それでもはや機械科は不要の事態となったという。

ある日の朝礼で、校長より「本校に商業科を復設して、機械科を廃止することに決定した！」との独断的な発表があった。

我々生徒はこの発言に非常に憤慨した。早速、機械科生徒全員の集合により、「学生集会」を開催して学校当局の独裁的声明に対し、徹底抗議を採択した。さらに機械科存続決議文を作成したのである。

各学級長の血判を押して、学校当局に提出し、それが受け入れられなければ、全校ストライキに突入をと宣言した。

これに対し、学校当局は^{きょげ}いたく驚愕し、「機械科存続に努力する」旨の回答があり、ストライキは回避された。その後校長及び関係者は既に申請した機械科廃止に対して、所轄官庁及び文部省当局に陳情した結果、斬く機械科存続となった。

(上田市中央西)



【地学班、県知事賞】

S36年

地学班の「塩田平の湖成層」の研究が「県知事賞」「日本学生科学賞第2位」に輝いた。

千曲川の段丘礫層を見学し、「大昔は塩田平は湖であった」との事実を、花粉や当時の気候を調べて証明した。

(89頁に記事が)

【千曲祭は昭和46年から】

S46年

昭和46年から「千曲祭」(文化祭)として一本化され、千曲デパートなど市民には好評であった。

5000~8000人以上の来客があった。

※ 最近では3000人前後



千曲川の瀬音

保屋野節子（昭和23年実科女学校卒）

【終戦の前】

昭和20年8月13日電車通学の私は、乗り遅れまいと駆け足で大屋駅へと向かった。突然の空襲警報が鳴り、真上に敵機が飛来、上田の飛行場を狙っての襲撃だった。

【終戦】

その2日後が終戦、講堂に集まった私達はすすり泣き、居並ぶ先生方も涙を拭う、その9ヶ月後、あの日の戦闘機が襲った飛行場の跡が私達の学校になろうとは誰も思いもよらぬ事であった。

【その飛行場跡へ】

2年生に進級した5月21日、私達が先発隊として飛行場跡の分校に移ったのだ。学校への移動は、リヤカーや大八車を借りて机やイスを積み、身の回りの小物は手に持って公園の前を通り、上田橋を渡り人里離れた学校へと運んだ。

校舎とは名ばかり、かつての兵舎、建て付けの悪い教室、割れたガラス、その上、軍隊の皮靴による傷だらけの床、粗塗りのコンクリートの廊下。

凹凸の床や廊下では一寸した油断で突っ掛かりよく転んでしまった。

格納庫の裏の焼却炉には機材の残骸がそのまま山積みになっていた。

【教材】

墨で塗りつぶされた教科書に変わり、新しい教育方針にのっとって配られた教科書は、わら半紙を綴じ合わせたようなものだった。

衣料品の切符制はあったが、家庭科の教材には全く事欠いていた。

家庭科の実習で布団作りのとき、クラスのAさんの両親が一組の布団地と綿を工面してくれた。その布を教室に置いて帰ってしまったところ、次の日はその貴重な教材は失くっていた。

【滑走路は広大な校庭】

戦時中の勤労奉仕や開墾に明け暮れていた私達にとっては、おんぼろ教室もペラペラな教科書さえも幸せに感じた。そして、上田市のド真ん中にあった国民学校との同居の学舎から、独立した校舎に入ることができ、誰にも遠慮もいらず広い校地を動き回ることができた。

骨組みだけの大格納庫はそのまま講堂と教室に早変わりし、かつての滑走路は広大な校庭と生まれ変わっていた。その校庭で思い切り汗を流し、芝生に寝転んでハイネや藤村の詩に酔い、木陰に集まって「清水澄子」の『ささやき』に胸を踊らせたものだ。

当時辺鄙な学校と敬遠され、荒れたその通学路を千曲川の川風に吹かれながらおしゃべりしをして通ったが、遠かったその堤防の道さえその距離に比例して楽しく思えた。

アルムの絵題字
岡村桂城先生



【浅間山登山事件】

S48年

80年のあゆみ(9)

昭和48年、山岳班が冬の浅間山に登山。丁度この時、江戸時代以来の噴火となり、「遭難か」と学校や家族が捜索を開始した。

【専攻科が失くなる】

残念なこともあった。それは上田市立高等女学校の一番の特色であった「教員養成」への道である専攻科が終戦による学制改革で、昭和22年3月31日に打ち切られてしまったこと。

大正11年の検定以来、小学校家庭科の正教員として、多くの優秀な教育者を送り出してきた上田実科女学校は、昭和18年度から改名され「上田市立高等女学校」となった。その専攻科が私達の1年上で切られてしまった。それを目的で入学した者にとっては残念という他はない…。

(上田市保屋)

「電気班 創立時代」

内藤利幸 (昭和26年、建築科卒)

終戦直後の10月に野球部、庭球部、文学部そして音楽部が発足した。学校は「上田工業学校」と言い、授業は一日、3～4時間程度であった。

昭和21年になると招集によって軍隊に行かれた先生方も、ボツボツ復員されて授業時間も少しずつ増えてきた。

町の本屋で『太郎のラジオ実験読本』（粗悪紙のA5判より小型）を買い、鉱石ラジオを作りたいかった。ところが必要な真空管は上田市に無く、当時ほてい屋が疎開者等が出店利用しての物々交換市があり、目的の真空管が出ていた。家の米を持ち出し、やっとこれを手に入れることができ、夏休みには完成にこぎ着けた。

隣家の建物との間15mにアンテナを張って…。

こうしてNHK第一放送がレシーバーから聞こえてきたときは大感激であった。

秋の遠足にこのラジオ（木製箱形でかさばるし、電池は重く）を持って行ったが、鳥居峠の山間部という事もあって結局受信は出来なかった。

初めて学芸祭（文化祭）にこの単球式ラジオを出展した。しかし建築科の人たちが三球式を出展したのは不思議と言うか、驚きであった。

4月にラジオ班を結成。学校には拡声器があったが、先生方でこれらを操作できる人はいなかった。

そこで職員室への入室は、扉の前で「2年B組内藤利幸、〇〇先生に〇〇の用件があって参りました。」と申告するようになっていた（学制改革で新制中学に編入されていた、我々は機械科がA組、建築科がB組であった）。それを「ラジオ班の内藤です！」（科はいわなくてもよい）と言って勝手に入室し、拡声器を操作してよい事になったいた。



【風船「横浜へ」】

30年のあゆみ (10)

S61年

第27回千曲祭では後夜祭に1100個の風船を飛ばしたところ、次の日午前中に横浜市まで届き、小学生4年生が拾いハガキを送ってくれた。

我々が入学したのは上田市立商工学校、それが上田市立工業学校になり、昭和21年には再び上田市立商工学校になり、更に「上田市立高等学校」となった。帽章はペン先を菱形に囲むもので裏に真鍮の足が半田づけされたもの、この足がよく取れてしまった。ラジオ班でこの足を半田付けのサービスをした。

この頃、班の部室を最初に獲得したのは我々ラジオ班だったと思う。(班員は40人)

校舎の最も北側にある、講堂の隣の物置を一部使わせてもらい、電気の引き込みの配線は皆でやった。休み時間も常に、班室に入り浸っていた。

この年、我が校庭であるスポーツの東信予備選抜会が行われ、女子部からうぐいす嬢として2人に来てもらった。甘酸っぱい気分になったことが懐かしい・・・。

いよいよ、飛行場兵舎跡に教室を引っ越しとなり、飛行場跡に移った学校での班室は理科室の隣の研究室に同居させてもらった。

飛行場跡の校舎では放送施設が必要であり、上田染谷丘高校に見学に行った。我々の力で広い敷地に散らばっている校舎へ、効率よく伝達するべき放送設備の計画設計に着手した。

今の専売会社がある辺りは軍需工場が疎開してきていた。そこで戦闘機などを作っていた工場へ先生方と見学に行った。

大型の^{40cm程度}旋盤やフライス盤などがあったが、実は放送機のフレームにするアルミを貰いにいったのである。しかし、飛行機の残骸から切り取った主翼のパーツは元と先端では太さも厚さも違い、非常に使いにくいものであった。

生徒会では初めての役員選挙があった。未だ立候補制ではなく、2年生のクラス代表が候補者となって選挙が行われ、機械科1組から会長^が当選した。夏休みを返上して機械科の班員を主流にアンプ造りに励んだ。

放送室の新築工事も建築科の生徒の手で建築の実習とし進められた。

夏休み明け、各教室への配線作業は残暑の厳しい天井裏をはいずり回って配線し、各教室への一斉放送ができる配線は、なかなか思うようにいかず苦労した。

秋の学芸祭は完成したアンプを格納庫の講堂に運び込んだ。設置したスピーカーの効果は、実際に客席で聞いてみると、たいして効果があるとは感じなかったが、停電になってみると舞台の台詞がまったく聞きとれなかった。こうしてみるとスピーカーの効果が大いことを実感した。

こうして、この一年は校内放送の設置と放送活動に明け暮れた。
(東京都在住)



(え・同校教諭、片桐 昭)

夏休みはアンプ造りも

【おてがら】

80年のあゆみ(11)

H6年

平成6年のこと、学校長と生活指導宛に手紙がきた。

『突然のお便り…(略)。学校近く(御所苑老人ホーム)の道路側溝に脱輪して困っていたところ、貴校の男子生徒5人がドロドロになって車を持ち上げてくれました。そのまま名前もいわずに…』

(上田市の老夫婦より)

その後、この生徒は建築科3年3人、電気科3年2人であることが判明。全校集会で報告された。

「電気班は学校の施設課と同じ」

小林 侑 (昭和27年機械科卒)

同郷の人に会った時など、私が上田千曲高校出身だというと「何科の卒業ですか」とよく聞かれます。その時、私は「電気“班”の出身です」と答えています。すると相手から必ず怪訝な顔をされます。

理由は、昭和24年に入学して同27年3月卒業までの3年間は、もっぱら「電気班」のクラブ活動に専念し？、機械科の授業は、クラブ活動の余暇のようなもので、今考えると良き時代だったと思います。

ここで誤解のないように申し添えますが、一般科目や機械科の所定の授業は、最低限のノルマは果たしていたので、なんとか無事3年間で卒業できました。

では、当時のクラブ活動の状況、特に私の所属した「電気班」の特異(?)ともいえる活動の一部を紹介してみましょう。 ※ カット は 85 頁 に。

◇入学の頃のクラブ活動

この電気班も、私たちが入学した昭和24年の頃は、まだ科学班の1グループで当時の家電の花形であったラジオの製作や研究を主体のグループでしたが、その後、電気班として独立しました。

当時、本校には、まだ電気科がなかったにもかかわらず、電気班の人気は高く、多くの優秀な先輩達がおりました。まだ、大学生だった、現・武蔵工業大学の主任教授の井出正男氏も、夏休みなど部室にみえられ、後輩の指導をしておられました。

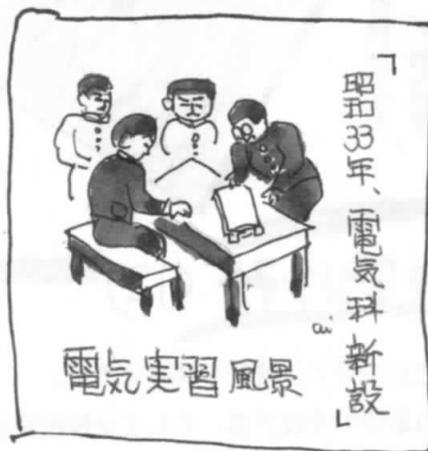
私などは、機械科に入学したのですが、3か月足らずで手先の器用さの必要な機械科には不適格だと知り、一種の挫折感を持っていた。そこで、ラジオ班か科学グループ班か迷いましたが、電気班にして1年生からクラブ活動に没頭する日が多くなってしまいました。 ※ 電気科は、昭和33年に新設された。

◇家に帰れない班員

当時の電気班は、いわば学校の施設課電気係のような存在でした。

まず、前年は先輩達が、独力であの広大な施設内に校内放送の設備を完成してありましたが、その技術的管理は電気班の業務?のようなものでした。故障やトラブルがあれば、たとえ授業中であっても放送室(最初は職員室)に駆けつけた。さらに校舎は元陸軍飛行学校跡の古い建物でしたので、各クラブの部室のトラブルや停電の修理まで駆り出されたものでした。

特に学校祭や、運動会(体育祭)の放送、照明などは設置から管理運営をすべて電気班員の役割でした。その上、学校では、クラスの展示もしなければならないので毎年、この時期は徹夜の作業となり、一番困ったのは食事でした。



※ 小林 侑 さんの事は 5 頁に載ります。(東京都中野区)



「古舟の渡し」

中島暎子（昭和28年卒）

昭和28年に卒業してから、40数年があっという間に過ぎたのですネ。

当時は終戦直後で食べる物もなく、着るものもない時期でした。中学からの高校進学は40名の3割くらいでした。

高校への登校は先輩に呼んでもらい、一緒に緑が丘から鎌原新町を通り、現在の古舟橋の近くにある舟つき場から舟に乗り、千曲高校側に渡ったものです。その折、舟を漕ぐおじさんから心温まる色々な話を聞いたのです。

舟を降りると目の前に広々としたグラウンド、平屋の校舎が点々と並んでいました。

グラウンドの真中を流れる川で手足を洗った事が印象に残っています。今考えてもどうしてあの場所に川があったのでしょうか、しかもとても冷たい水でした。

木造校舎の床はところどころ抜け落ちているので、気をつけて歩かなければなりませんでした。校庭の一番奥には大格納庫を仕切った講堂と教室がありました。各教室の移動は雨が降ればそれはそれは大変で、いくら掃除しても奇麗にならず、それでも磨いたものでした。

当時の服装・着る物は店では買えず、母親の着物をほどいてブラウスやズボンに仕立てたものです。時代故に下駄履きでの登校でした。

いつも着物と袴姿で授業をされた家庭科の先生の姿が美しく、また先生の立ち振る舞いから女性が身につけなければならない事を教えられた気がします。

今の私は1年間のうち10か月ほどは着物ですが、自分で仕立てたものです。その技術も高校時代に教えていただいたたまものです。

思いやりの心、感謝の心、そして何と言っても「自分自身で努力する大切さ」を身につけさせていただいた先生と母校に感謝しております。

(上田市緑ヶ丘)



ブルマでバレーに興じた。
元・昭和50年(高校風土記)
(建築科、間島久美)



【制服自由化に】

30年のあゆみ (12)

1年用

H7年

生徒会は3年間かけて制服の自由化に向けて、検討を続けてきた。

最後に学年毎に投票

平成7年に臨時の生徒総会がもたれ最後の全校討論、そして全校投票が行われたが「自由化賛成多数」でついに自由化に踏み切ることになった。

「私を育ててくれた千曲高校」

竹内栄重 (昭和29年機械科卒)

1. 飛行機の因縁

私が塩田盆地に生まれて、もの心がつくといつも空にはオレンジ色の複葉中等練習機が、時には銀色で低翼単葉の高等練習機も飛んでいました。

少年の胸を踊らせた飛行機は、母校の敷地から飛び立っていたとはその時には、思ってもいませんでした。つまり、その「千曲高校」へ後日、入学することになろうとは。

あの練習機が私を理科好きの少年に育ててくれたのです。

2. 学校づくり

入学した「千曲高校」は木造校舎で木造格納庫を改造した老朽な教室でした。その教室は商業科が使っていました。

入学した頃は県立移管の準備が始まっていて、週に1回の奉仕活動が時間に組みこまれており、石ころ運びや廃材の片付け等汗だくで学校作りをしました。

教室の仕切りは、一枚板の薄い壁でした。当然隣のクラスでの先生の授業の声や小言もよく聞こえてきました。

3. 名物先生とニックネーム

筆頭は「漫才師」(私たちは親しみをこめて失礼を承知で呼んでおりました)こと高野校長です。持ち前の型破りのキャラクターで明るく、いつも優しく語りかけて下さいました。月に一度の全校朝礼では話がはずみ過ぎて時間が延長されることもよくあったものです。

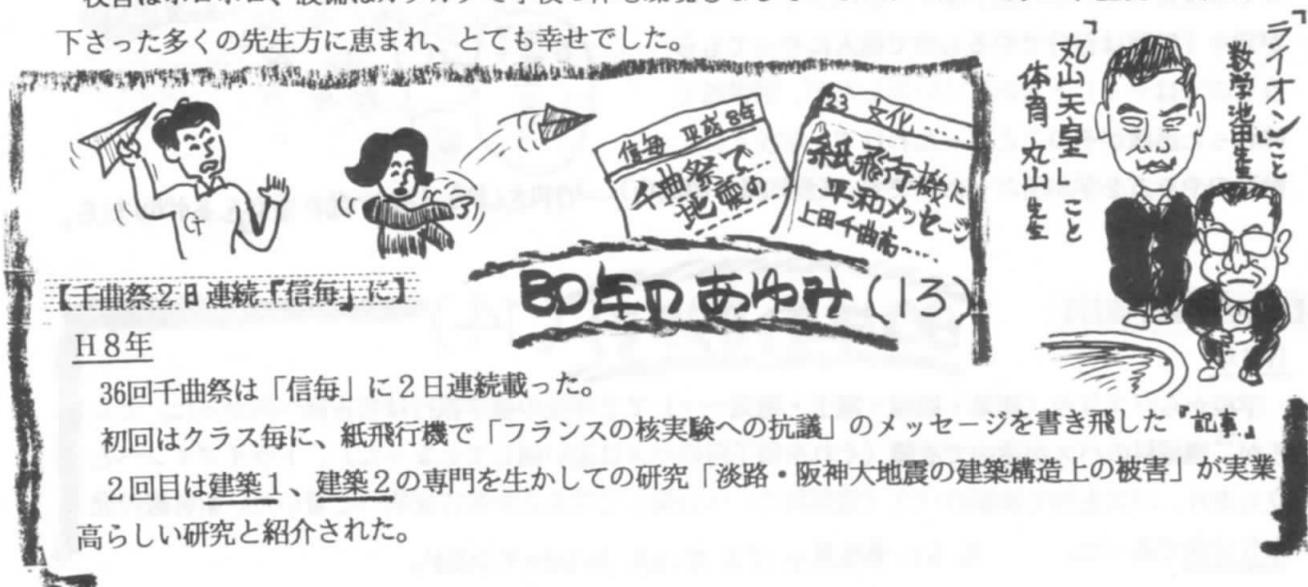
県立移管のため他校の学校長の何倍も苦労や苦心があったのに、私達の前ではいつもパワー全開でした。高野学校長のおかげで県立千曲高校の第1回卒業生となれました。

もう一人忘れ得ぬ名物先生は「ライオン」こと池田正三先生(数学)、大きな声と精悍な顔、ライオンそのものですが心根のやさしい教育者でした。

生徒会長の私は生徒会顧問としても熱心な指導を受けました。

私達の将来を心配して「今の日本には外貨がほとんどなく、獲得する手段もない、君達はこの厳しい現実をよく知らねばならん」と、よく言われていました。

校舎はボロボロ、設備はガタガタで学校の体も環境もなしていなかったのですが、生徒を心配して下さった多くの先生方に恵まれ、とても幸せでした。



4. 男女共学

機械科1年時は被服科(家庭科)と共学でした。もちろん国語、数学など普通科目の時のみです。後日考えてみると貴重な体験でした。多感な年頃に男女の性による差を認め、お互いに信頼し合うことを言葉だけでなく、自然に身につけていたのです…。

上小地区にも男子校、女子校と分かれていたなかで、母校がさきがけて共学を推進したことは先進的であり、先生方の決断に改めて拍手を送りたいものです。

5. 英語クラブで

運動神経が鈍いため運動部は無理なので英語クラブへ。上級生の女子が優しかったこと。文化祭ではシェイクスピアの『ベニスの商人』を上演することになり、悪役の金貸しのユダヤ人の役を演じ、観衆に喜んでもらいました。この劇、練習を通じて「人間は必死になれば何でもやれる、体で覚えたことは財産になる」と学びました。

英語劇の燃え残りは40年以上経ても残っており、今年から市民文化講座で中国語を始めました。

6. 命がけの体験

3年生の秋のこと、行事と就職活動が重なり、運動会、直後に夜行列車で就職試験、続いて文化祭と強行が続きバテ気味でした。

文化祭後半は学校に泊まり続けました。その午後に自転車にてパンの買い出しに外出したその帰りに、自転車に乗ったまま気絶してしまい、気がついたら、どこかの民家の座敷に寝ていました。

側に高野学校長が介抱してくれていました。若き日の恥ずかしくも懐かしい思い出です。

7. 飛行機に熱中

高校時代のもう一つの思い出は模型飛行機造りに夢中になったことと、そのための勉強に一生懸命だったこと。

塩田の地に飛んでいた練習飛行機に撞けて飛行機を造ろうと、上田市立図書館へ通い、「飛行機の本」を借り出して読み返し、飛行機の仕組みと飛行の原理とを知り感激したものです。

あの熱中したエネルギーと知る喜びで、その力が今でも役だっていると思います。池田ライオン先生が常々「勉強は自分でやるもので他人にやってもらうものではナイ」と言われていましたが、図書館で味わった感激がそのことだったわけで、学校とは、勉強のやり方を学ぶ所だったのです。(愛知県 岡崎市)...



【七ヶ井の修学旅行】

30年のゆかり(14)

H7年

学校からバス9台(建築・機械・電子・電気……)で2年生の修学旅行は名古屋へ向かった。ところが、^{*}機械科のバスが途中で故障(それを電子科のバスは追い越してしまった)、ドライブインへと立ち寄り、バスを捨て後続のバス(電気科の)へ分乗してなんとか名古屋駅へと着いた。新幹線の発車5分前であった。 ^{*}もし、最後尾のバスだったら とうなっていたか。

「三度・三様に千曲高へ」

杉崎 ^{あせら} 斌 (前校長) 昭和31年 (機械科卒)

私が千曲高校にいたのは3回、第1回目は生徒の時。中学の頃から機械、電気に興味があり、当時は月刊誌の「初歩のラジオ」を夢中になり読んだものです。

戦後の物資不足のなかでラジオが故障しても、買い替える時代ではなく、村の大人から「ラジオが変なので直してくれ」と、頼まれ、修理したものです。

進路の選択がやってきたが、千曲高校にはまだ電気科はなく、中学の先生から機械科を勧められたわけです。

飛行場跡の広大な敷地にまばらに存在する学舎や、自転車で授業をしに教室まで移動をして来る先生方もあり驚きました。また、実習では飛行機の格納庫を大ハンマーでコンクリートをたたき破壊し、整備作業をしばらくの間やったことも印象に残っています。

第2回目は昭和51年4月に赴任して9年間物理を教えました。その時の大きな仕事は「創立60周年記念事業の記念誌」の発刊でした。その編集作業の折、高校生の頃に確か図書館にあった「愛天真」の額がどこにも掲げてないことに気がつきました。

調べてみますと実科高等女学校のアルバムの中に、その額の写真が必ず載っていたのです。これはきっと礼儀作法(?)を厳しく教えたものかと、その歴史の重さを感じ、宝探しのようにこの額の由来を探ろうと思ったのです。

昭和4年以前の『職員会議録』を片っ端からめくってみますと「天真爛漫」の記事がありました。「昭和3年4月29日(天長節)の記事に『書家の^{いせや さざなみ}厳谷小波(童話作家)氏に講演をお願いし…」とあり、実科高女は清明小学校(国民学校)に併設されていたので、小学校に『天真爛漫』の方が存在するのではと思い、念のため『職員会議録』を調べてもらいました。

結局そのような記録・事実はなく、実科高女の記録の間違いで、3文字の『^{あいてんしん}愛天真』が正しいことが判明しました。

早速、職員会で事情を報告してから、ほぼ3か月後に黒漆塗りの立派な額縁だけが出てきました。しばらくすると額に入っているべき、『問題の書』が丸められた状況で発見されたのです。

その「書」を表装して、アクリル製の額に納めて応接室に飾りました。

厳谷小波氏は月刊誌「赤い鳥」の発行者であり、代表作に『ぶんぶく茶釜』があります。

第3回目は平成7年4月に箕輪工業高校から学校長として赴任して、多くの山積する問題・仕事の中で校内外の協力を得ながら、生活福祉科の設置や職業高校としての方向性を付けてきた事に細やかな充足感を得ています。

実科女校には



黒板の上に「愛天真」の額があった

昭和30年代、先生方は (上田市 芳田)



「『黒ちゃん』こと黒柳正幸先生」

小林重利（昭和29年、商業科卒）

私たちが2年生に進級した昭和28年、小柄で痩せこけた1人の先生が小県東部高校から着任されました。これが私達の商業科担任となる「黒ちゃん」（恩師を呼ぶのに大変不謹慎ですが、親愛の表れなのです）。社会科、世界史の専門でテレビドラマの「金ばち先生」を地でいくような生徒との葛藤の2年間が始まりました。



黒柳正幸先生
(社会) 昭和34年

前任校ではその容姿・風貌から「カマキリ・カマキリ先生」と呼ばれていたようですが、私たちのクラスではそう呼びませんでした。

男子27名、女子15名、合計42名の大変個性的な生徒の集まりでしたから、授業中チョークがとびかいました。気が短い怒りんぼうの黒ちゃんは、顔を真っ赤にして怒鳴りました。

私たちは校内外でいろいろ先生を悩まし、心配をかけましたが、その度、小さな体を更に縮めて対処されました。

そんな訳で、写真を撮る時はいつも不機嫌な表情で写ってしまうのでした。

無理が重なって、卒業目前に胃潰瘍で倒れて、手術することになりました。

クラスの生徒を中心に数人で輸血をしました。手術は成功しましたが、卒業式には間に合いませんでした。

その後、先生に会う度に「俺の体には若い皆の血が入っているので、若返ったんだ」と笑顔で話しました。その言葉を聞くにつけ私達は黒ちゃんとの絆の強さを実感しております。

先生は常に私達の動向を把握され、気にかけて下さっていました。

卒業35年のクラス会も「黒柳会」として、1992年6月に上田市にて開きました。

高校時代と異なり、優しい笑顔に満ちた先生を囲み、懐かしい高校時代の話に花が咲いたものでした。（東京都、立川市）



高校時代のジブイ顔でなく、優しい笑顔でした。

※ 上田東急インで「黒柳会(同級生)」が。

あ の こ ろ

- 一年の春の遠足。雨で中止だと思っていたら8時頃にはやんでしまった。急いで学校へ行くと、半分くらいの人が集まっていた。約30人で千曲公園に自転車で行った。

河川敷のグラウンドに自転車を置いて、30分くらいで頂上に着いた。しばらくすると遅刻組がちゃんと集まって来たのではないかと、えらい。

竹内晋二(昭和64年、建築卒)

- 『雨、晴れ、雨』、私たちの3年間の遠足の天気です。2年の時の「古文化財巡り」(上田、小県)だけが晴れて、3年の楽しみの軽井沢プレイランドが雨なんて。

池田喜美子(昭和62年、商業卒)

商業実習のこと

石原澄子(昭和34年、商業科卒)

入学して間もなくのこと、応援練習がありました。その時の3年生は高校生になったばかりの新生にとっては、とてつもなく大きな存在で、「怖いおじさん」に見えました。

声が小さいといっっては怒鳴り、態度がなっていないと怒り、大きなガラガラ声に、ただただ身が縮む思いでした。

校門で見張っているので帰ることもできませんでした。

「太郎山の逆さ霧」の呼び声で、ヨーイ、シャン シャン シャンと手拍子を取り、整列している横を応援団員が通り過ぎると、緊張で胸が痛くなるほどでした。

野球の大会で松本まで応援に出かけたこともありました。監督は社会科のスマートな平野先生、若くて澆刺^{はつらつ}としておられました。

入学時に右往左往していた新生を、応援団員の先輩達の一つにまとめて、私達を引っ張ってくれたそのご苦労が痛感されます。

音楽班に属し、曜日をきめて音楽室でピアノの練習をしましたが、そこへ、「ライオン」のニックネームを持つ数学の池田先生(授業は吠えるような大声、なにより風貌がライオンによく似ていた)が入って来られ、「おう、ピアノが弾けるのか」と笑顔で近づいて来られました。

先生の優しい一面に接し、とても嬉しくなったものです。

珠算クラブでは「国民珠算競技大会」で県下を回り、長野商業、松本商業の素晴らしい成績に唖然としました。

飯田の近くにある天竜峡で記念写真を撮りました、その時に一緒だった部員の皆さんはいまどうしているのでしょうかね。

商業科では恵比寿講に実習として、上田市内の商店で働いたこともありました。原町の「高橋洋品店」で赤いタスキを掛け、大声を出して売る実習が、とても恥ずかしかったことを覚えています。

その頃の街は、今と違いとても活気がありました。

あっという間の3年間でした。久しぶりに母校を訪れても、もうかつての面影はありませんが、高校時代は、私にとってはとても思い出に残る3年間でした。
(上田市、大手)



ライオンの異名をとった
名物校長、池田 正三
(え・同校教諭、片桐 昭)



あ の こ ろ

- 昭和61年の討論会は、事前に司会者、記録者の合同会議を開き当日の運営とレポーターの要請をした。(討論会ニュースも3号発行)

8テーマ(欄の声のテーマと同じ)、28会場、特に「高校生と平和」の分代会では資料7枚も用意されるなど、一定の盛り上がりとは成果はあったが、全体としては討論に慣れていなくて十分な話し合いにならなかった。

秋野真一(昭和62年、建築卒)

創業の電気科一期生

春原宗明（昭和36年 電気科卒）

昭和33年4月入学式の日、私は千曲川を一人の老人に案内されて、渡し船に乗って右岸から左岸へとゆっくり渡ったのであります。丁度、今の古船橋辺りに右岸から左岸へ鉄線が張ってありそこに船をつけ、紐を手操って渡って行くのです、今では想像さえ出来ないのんびりした光景の中を、緊張の思いで学校に行ったのです。

暫く経ってから船は廃止され、自転車通学となったのであります。

さて、東信地区に初めての電気科の設置が本校となり、「これからの時代は電気なのだ」と希望に燃えての学校生活でした。

ソ連のスプートニックス人工衛星打ち上げで、「これからの日本は科学技術の充実を図って行かなければならない」、との時代の要請からの「電気科の設置」であり、その一番の功労者は何と言っても横田邦男先生（昭和33~40年）なのであります、その創業の御苦労はいかばかりであったのかと想像してあまりあるものであります。

それこそヒルで私たちの兄貴分のようにも、若さ溢れるあのエネルギーと情熱に圧倒されながらも、必死で着いて行きました。

勢い余って千曲公園で酒盛りをして、停学処分を食らったり、ある時、信越線の陸橋に頭をぶつけながら、一命を取り止め、今日では世界一大きい電力会社の大部長になっている兵(つひ)もいるのであります。

すべて先生や学校、地域社会の人々の温かな力添えがあったからこそ今日があるので。

当時最新の実験室や高圧受電室の中で、授業が受けられた事が誇りでありました。「学校開放(千曲祭の前身)」の時などでは、教えていただいた知識を元に、強電弱電を織り交せて夫々が得意分野で準備したものです。

電気班に所属した私は、一年の時 に初めて「電信電話アマチュア無線国家試験」を受け合格しました、暑く臭い古い部屋の中で、「CQ、CQ、ツートン、ツートン」と、夜も徹してやったものでした。

高度成長期に入る前の不況の時代で、お金なんてある筈もなく、ジャンク屋へ日参してNHKから出たと言われた「807の真空管」を買い、送信機を組み立てて、外国のアマチュア無線家たちと交信しました。そんな出来事はついこの間のような気がいたします。

※人工衛星は車の「カーナビ」にも載っている。
人工衛星は数え切れないほど沢山打ち上げられ、人工衛星なしでは世界は動いていけない現代となっている訳ですが、「渡し船の光景」からその後の三十数年間の科学技術の凄さは、今更ながら感慨するの
であります。

それにひきかえ人の心は、いかばかりなのでありましようか。その当時、先生と生徒との信頼と絆は、皆夫々に持っていたものでした。

ある体操の時間に一人の同級生の出来事の原因によって全員が体育の先生から、頬に火が出るほどの平手打ちを貰ったこともありました。



でも、誰も文句や反発などしなかったのです。それほど、その先生が怖かったのではありましたが…。

やはり何かがあったのです。何か違ったものが～。

また、体育の時間には千曲川にて、先生が 鮎の友釣り を実際にやって見せて、楽しく教えて下されたことなど未だ忘れ得ぬ事です。

いずれにしましても、先生方の情熱と愛情は物凄いものでありました。あつというまの三年間でしたが、広い敷地と古い校舎の中や通学時の電車などの思い出は、一人 ひとりに違いはあれ 精一杯に青春の3年間を過ごした と思うのであります。(上田市 秋和)

実業高校の素晴らしさ

久保田浩靖(昭和37年 機械科卒)

卒業後35年も経過していますし、平凡な生徒でしたのでエピソードなどの気の利いた話ではありませんが、学校生活を思い返しながらか、青春のひとこまを。

私は、昭和37年3月機械科一組(45名)の卒業ですが、当時機械科が二組・建築科が一組・電気科が二組・商業科が二組・家庭科が四組、全部で10クラスの総生徒数477名という大所帯でした、東京オリンピック前の高度経済成長の真っ直中、今思うに実業高校の一番華やかな時代ではなかったかと思ひます。

そんな時代でしたが、生徒は東信地区一帯から集まった「田舎の男女共学の実業高校」、学校生活は楽しく比較的のんびりしたのどかなものでした。

※ 理科が4クラスだったが、今は2クラス。学年で8クラス総勢320名

実習でピッケルを作ったり、ベルト掛けの古旋盤での「ねじ切り」、三輪自動車での運転実習、ダイヤモンド製図等々、四苦八苦 してやった事など全て懐かしい思い出です。

その頃の校舎は平屋で機械科の校舎(棟)は、北の一番奥にあり、そして職員室は別棟にありましたので比較的静かな環境でした。

製図室では広い製図台の上でテスト期間中、皆が帰った後 トランプゲーム(ナポレオン)を果てしなく楽しんだこともありました。

思えば恵まれた環境の中で勉強を全然しなかったのが今となっては悔やまれます。それでも私達のクラスは、個性が豊かな生徒の集まりで普段はまとまりがなくバラバラですが、いざとなるとまとまり、第10回運動会では優勝したのです。

向上心が旺盛で時代にも恵まれて、皆いい処(殆ど県外大手企業)へ就職出来たこと等、学校・先生・級友に恵まれたと感謝しております。また、就職後、多くの人が夜間学校に通い、新しい知識を取得して、それぞれの分野で頑張っていることを知りみんなの逞しさを感じています。

私達の担任は、藤沢巖雄先生は私たちからは「お父ちゃん」と呼ばれ、ちょっとぶっきらぼうで一風変わってはいましたが良い先生でした。言葉には余り表しませんが、生徒一人一人に対して親身になって心配をしてくれた良き「お父ちゃん」でしたが、残念ながら昨年一月他界されてしまいました。同級会もしないで皆で励ましてあげることができなかつたことを悔やんでおります。

後輩の皆様にはこのような思いをしないよう先生・級友との縁も、大切に人生を歩んで欲しいと願っています。

最後に私なりに高校生活についても一度振り返ってみて、人生の中での意義・何を得ればいいのか考えてみました。

機械科を選んで良かったことは、自分の手で物を作るということ、図面を書くことによって物を多方面から観察することの「実習」が出来たことが一番良かったと思ひます。



卒業後経済・電気の勉強も一寸かじりましたが、勉強した頭の知識だけでは役に立たず自分の手で覚えた知恵・創造力の大切さを痛感しています。

試験のための勉強より、物を作り出す工夫、改良、知恵を身につけることを目指し、自分の手足・頭を使うことを楽しんでそれを好きになる方が役に立ちます。

これが実業高校の素晴らしいところで、この基礎を身につけることが出来れば必ずと自分の進むべき道が見つかり開けてくるものと信じています。(上市市 中野)



先生方の熱き力

笹井 弘(昭和46年 機械科卒)

私は機械科二年時に美術を志しましたが、当時の千曲高校には美術の先生はいませんでした。染谷高校で美術担当の荻原先生が千曲と兼務だったのです。週に一度だけ千曲に来ていたのですが、その千曲の美術の設備、教育環境はまったく何もない状態でした。

そこで荻原先生に相談すると「染谷高校へ来てデッサンの勉強をするように」とのこと。アドバイスを受けまして、一年半ほど千曲高校の授業が終った放課後、染谷高校(当時 女子高 だった)に毎日通いました。友人から(女子高通いを)とても羨ましがられたものです。

夕方5時から夜9時まで自由に(先生がいない時でも)美術室への出入りが出来ました。まったくありがたかったものです。

また、千曲高校の先生方は、英語、国語、社会と受験に関係する教科では、毎週宿題を出してくださり、熱心に指導してもらったのです。特に担任の故川名兵蔵先生(昭和43~49年)にはさまざまな相談にのっていただき、心の支えになりました。

これは内緒の話ですが、受験の際「内申書」を一通多く請求し、余りのその「一通」をそうと見てしまったのです。担任の先生の温かな言葉と評価、そして担任・先生方の苦心、生徒に対する 思いやりの深さを強く感じ、頭のさがる思いでした。

私の卒業時では進学者は2~3割位でした。今はどうでしょうか。

いずれにしても私たち生徒は各々の進路において、またその目的を達成するには多くの先生方のお世話や目に見えないところでの応援のあることを、つくづく感じております。

機械科の先生方には実習時間の不足な私を卒業(進級)させていただき、本当にありがとうございました。



機械科の実習

(横浜市 緑区)

あ の こ ろ

● (昭和50年) 庄田文雄学校長(数学) ● (\$46.4 ~ 51.3)

昭和30年に植えたポプラや桐が大木となり、アメリカシロヒトリの巣になったり、大風で折れる心配があるからといって木の先端を切つて非難をあびた。

数学の校長が五人も続いたのは珍しい。



雑誌に紹介された制服

(S51年卒・商業科 中沢(金井)正子)

私が在校していた昭和49年度は、千曲高校は校庭に新校舎の建設中でした。体育館は完成してここで入学式を行いました。しかし、古い校舎はそのままあり、そこで一年半ぐらいは勉強しました。

昭和50年の2学期の始めに新校舎に移りましたが、まだ商業科棟や家政科棟はありませんでした。新校舎から見るポプラ並木は風に吹かれると大きくうねり私にとってそれが印象的でした。

校舎の立て替えの時期で千曲祭は一般公開は行わず、運動会、班活の発表と、生徒だけで行われました。私は2年生のとき生徒会の役員(書記)をしていました。この時は、征服の自由化ということが議題となりました。しかし、6枚はぎのフレヤースカートのこの上田近辺にないということ、ファッション雑誌に紹介されたこともあって、意見はあったものの盛り上がりせず、そのままになりました。自分たちは千曲高校の生徒であることを誇りをもって生きていたと思います。

源(あわら) 純江さんが『スポーツ山脈(信州 あの人はいま)』

(信濃毎日新聞社編)に載っている、
同窓生が出ているとは実にうれしいことである。



未完の大意 恵まれた素質をもてあましたような「陸上人生」だった。
青く澄みわたった一九七六年のモントリオール五輪陸上競技場(カナダ)。身長171cm、体重61kg、日本人離れした色白の源純江が、フィールドに立ったただで絵になった。

陸上 源 純江
五輪走り幅跳び代表

防空壕掘り

4, 11 頁を見よ

手塚裕(昭和25年、機械科卒)

昭和19年4月に商業科が廃止(生徒募集を中止)になったため、2年生は「機械科課程」に変更し、校名も「上田工業」となった。そして昭和21年には再び「市立商工」となり、商業科を新設。そんな目まぐるしく、かつ私たちが動揺する中で「機械が好きだし、当時の花形だったので機械科を志望したが、学制改革で6年間も学ぶ羽目になった。イモやモロコシをつくり、防空壕を掘ったり、市内の農家へ田植や稲刈りに行くなど動員された」

電車通学

当時は、石炭列車にも満足に乗れず、ブタ小屋のような車内でカマの前や運転席の横に乗かって振り落とされた者もいた。

20年入学なので「工業」「商工」「市立高校」「千曲高校」へ。しかも学制改革で新設中学校になったことなどから、戸倉から列車で6年間も通学することになった。

市橋 勇(昭和27年、建築科卒)



入学当時の校舎

絵・柳町照雄さん(昭和21年卒)

担任の陰謀

(S60年卒 城田 政志)

私が「機械科」一年生の時の事です。

実習で旋盤を使って切削加工していました。刃を取り付けた台がしっかり固定されていなかったことを知らずに刃を工作物に近づけて切削を始めた瞬間「ビシッ」という音がして刃が工作物に食い込み旋盤の軸を曲げてしまいました。修理台はなんと30万円だったそうです。もちろん学校の負担でしたが担任の先生が苦笑いしていたのを覚えています。

私が二年になり次期生徒会の役員選出の時、担任から「お前生徒会長に立候補しないか」と言われ、学校に迷惑ばかりかけていた私はその気になって立候補し、一年間無事に生徒会長を務めることができました。今考えると、担任の陰謀にはまってしまったように思います。

これがわたしの高校時代のエピソードです。みなさんもそれぞれの思い出を千曲高校で体験してください。



《 ある家庭訪問 》

これは最近家庭訪問が多くなり、先生方が苦勞しているという記録である。 (匿名の寄稿)

その①

『平成7年6月、1年生時に全員の家庭訪問をやっ
てしまおうと、得意(?)のバイクで真田まで行った。

順調に進んで、M家に向かうその入り口の道で、
運転を誤り、土手から落ちてそのまま水田の中に
頭から突っ込んでしまった。

泥だらけになっているのにもかかわらず、根性でその
後もH家、Y宅へと訪問を続けた。』

その②

『平成9年2月に小諸まで家庭訪問にと上田駅へ。15時30分の電車の予定であったが、駅に着くとちょうど15時21分の特急があった、少しでも早く行きたいと(然、時間の節約と小諸に停車するという計算、予定によって)その特急に飛び乗った。ところが目的の“小諸”は通過、停車しないのである。これには驚きあわてた(どうしてなのか理解できないが、ドタバタしてもあとどりは出れないので)次は“中軽井沢”と願うような気持ちでデッキで待った、が、ここも通過してしまった。いったいこの特急はどうなっているのだろうか? 一途の望みをかける、次は《天下の軽井沢》である、絶対にトマルはず。

願は通じたのか今度は“軽井沢”で確かに停車。「やったー」と気が緩む。

次の頁へ。

あ の こ ろ

●S40年 柏原(大田垣)文子(商業科)●

「1年生のとき、学校祭で菓子屋の売り子を担当した。とても楽しかった」

「池田校長は、古武士的な感じが印象に残っている。楽しく、明るい学園生活だった」

●S43年 塩沢(松尾)幸子(家政科)●

「校舎はボロだったが、クラブ活動(英語同好会)は一生懸命やった。学校祭では

『ベニスの商人』をやり、楽しかった」

これで何とか下車できると思いきや、ドアが開かない!、そこへ車内放送で「この特急はスキー専用特別列車のため、軽井沢では停車だけでドアは開きません」と。

これは後で分かったことだが、上田発15時21分の特急は《冬季の2月だけ》“スキー特別列車”となるのである。

加えて次の一言は地獄であった。「次の停車は“高崎”デス」と。

この瞬間、汗がドッと出て来た。

(この後のことは、寄稿原稿には記入なし、想像するとやはり高崎まで行ったのであろう)



無理とは思ったが
ドアにチャレンジ!

父先生は心死だった。

家庭科から家“政”科へ

私が在学していた昭和40年頃、1年生の時は『家庭科』でした。でも時代感覚にあわせて、『家政科』にしましょうと先生と生徒で話し合い、2年生から変更になりました。学習の内容は将来女性として、母として、大変役に立つことを沢山教えていただきました。しかし、私はどの教科も全て苦手で友人に大変助けられました。お陰で、今は主婦として欠点だらけの毎日ですが何とかやっています。そこで、縁あって、我が息子が今年入学させていただき、懐かしい学校に足を運ばせていただくことができました。現在の校庭と、校舎が全く入れ代わってしまい、残っているものは正門とケヤキ(?)の木位かも知れません。

校歌はとても懐かしく思い出し、その他に印象に残っていることは、上田駅から堤防を毎日歩いたことです。あの頃は、「千曲町行」というバスがあり、お金持ちの友人は優雅に乗っていたように思います。県道上山田線で「柳堂」とかいうバス停もあったように思います。

ほんのたまに下校時に利用した記憶もありますが、足が疲れるということもなく元気で歩けたあの頃が懐かしいです。今もそのようなバスはあるのでしょうか？

卒業して、特別に同級会を持ったこともなかったのですが、〇〇年振りに皆に逢ってみたくなりました。

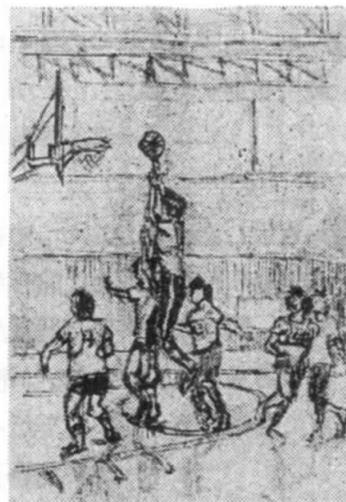
匿名

あ の こ ろ

- 母の柳沢なみ子(昭和9年、実科卒)は庭球部。その妹の富美(昭和12年)も庭球部だったが、「授業が終われば、タマが見えなくなるまで猛練習をしたものだ」。私の母の「モチ屋」には、母の後輩やクラブ活動後の生徒がよく立ち寄ったものだ。「自分はバスケット班で、相馬今朝一先生(建築)に指導され、関東大会予選新人戦3位だった。」——柳沢光雄(昭和33年、建築科卒)

- 新設間もない工業課程が、廃止になるという声があがった際、「先生方を講堂にカンズメにして工業課程の存続を呼びかけた。生産のないところに国の復興はない(生意気だったかも知れないが)」一週間も生徒集会を開き、湯川校長にも陳情して遂に存続決定に持ち込んだ

大日方弘文(昭和21年、機械科卒)



七・50年建築科2年小林敏雄

後夜祭のあの場面

中田智恵(平成3年、家政卒)

私は生徒会の書記局でした。千曲祭では、後夜祭において 仮装大会 を企画し執行部も仮装をしました。

副会長のM君(建築)は紫色の衣装の忍者となり、紙の手裏剣をなげたり、トンボ返りをしたり(M君いわく、「こんなことをしては嫁さんの来てが来ない」) 観客の中まで入り込み、大いにハッスルしたものです。

先生方も仮装で登場、「天才バカボン一家」でした。確か、バカボンに泉先生(電気)(そっくり!でした)、おとうさんに山崎先生(英語)。弟の赤ちゃん(?)に召田(めだ)先生(家政)。

おしゃぶりを口に乳母車に乗っていたのが印象的です。

後夜祭は盛り上がりました、グラウンドに描いた※人文字・絵(団扇の中に「千曲」の文字)を松本から飛んで来たセスナ機が写真を撮ったのです。※ この人文字の「写真」をTELカードにしたいと、希望者としたところ、結局希望者がなくて実現しなかった



こんな時代

昼休みのベルがなって待ちに待った弁当の時間である、いざ弁当箱を開いてまさに食べようとした時である、突然教室のドアが荒々しく開けられ、屈強な先輩が4~5人が乱入して来た。そのなかでも一番大きな上級生が、嘯み付くようなしかもドラ声で「すぐ説教室に集まれ!」と。この説教室とは校舎の東端の空き教室である、我々はとぼとぼと屠殺場に引かれる子羊のごとくにその地獄の教室へ。入り口で礼をして中へ入ると、大勢の上級生がキート睨む。この時点でブルブルと震える者がほとんど、そこへ「整列」と怒鳴られた。全員が教室の中央に不動の姿勢をとった。

よそ見でもしようものなら 即座にピンタがとんでくる。「これから服装検査をする」との 声で端からチェックが始まる。パンパンと殴る音、「貴様、名札はどうしたッ!」「目玉が動いた」と怒鳴られ、殴る。

これは軍隊教育の伝統的な風習で正当化されているのだからたまらない。こんな不条理なことが昭和18年には行われていたのである。

柳町照雄(昭和22年機械科卒)さんの『自由な学苑』より抜粋。

あ の こ ろ

● 私の入学した時の商業科の入試には5倍もつめかけた。簿記や珠算など最低3級の検定取らないと進級できなかった。

—— 宮本みち子(昭和35年、商業科卒)

● 入学したとき、こんなにも古いもの(兵舎跡が校舎、教室なのだから)とは思わなかった。私は商業科だったが、隣が家政科の調理室だったので料理実習になるとうるさい、いい匂いが授業中に漂ってきたものだ。どこも暗くて、汚い教室だった。

—— 網島静子(昭和44年、商業科卒)



野球応援一事件

宮下美恵子(平成3年、建築卒)

3年生の7月、夏の野球大会のことです。上田市営球場(城の近く)での朝8時(?)からの試合、なにしろわがクラスから(※ 主メンバー が出ているので)エースが投げています。 ※ 主力とは、電気3年1組と建3年からの選手が多い
一時間目のLHR(8:40)を全員で(あの超真面目なタイソン事、小山くんも一緒に)学校を抜け出して野球場にかけつけました。

ところがその球場にはなんと、これまた、電気3年1組も全員がLHRを※すっぽかして来ていました。こうなると応援の生徒は90余名いることになります。と言いますのは、試合はこの時点で、「0-7」で負けていました。

応援団長の水品君は元気がありません。そこで、田中生徒会長、副の宮沢君(以上建3)が応援団と協力して、急に加わった3年の2クラスと三々五々応援に駆けつけた生徒(?)と保護者、さらに、先生がた(学校長、建築の1先生も応援に来ていた)に呼びかけて『この劣勢を跳ね返すべし』と、整然と整列をして、

「フレ、フレ千曲」、「かっ飛ばせ、児平一(黙)!!」と大声援を送り、活気ある応援をやったのです。

選手は、はつらつとして来ました。

連打も出て来て、なんと奇跡的に5-7まで追いつけたのです。その後は、乱打戦の打ち合い。「応援の成果」は如実です。応援席も盛り上がりました。

久しぶりの好試合、千曲高校としては健闘です。

しかし、もう一步およばず、8-9で惜敗しました。

※ すっぽかし事件で担任のA先生方、電気担任のY先生方に迷惑をかけました。



みずしな
水品団長は急にハッスル!

あ の こ ろ

① 我々機械3-1は「スーパーマリオのハリボテ」を造り、また、前夜祭のステージ発表では最優秀だった。フィナーレに全校であげた七色の風船が空高く飛んで行くのは、とても感動でした。 _____ 藤沢敏和(昭和62年、機械卒)

② 覚えていますかあの「背番号33」(藤3-3)Tシャツを。我がクラスの出口画家が描いた犬のデザインも輝きました。今回のクラスマッチは一勝すると、1点の方式でした。
バスケットでは過激な応援により優勝(他に2種目も優勝)、こうして堂々の女子総合優勝をとげたのです。男子は建築3年が優勝。 _____ 小山美奈子(昭和62年、商業卒)

③ 昭和61年(3年)の芸術鑑賞は「音楽鑑賞」でした。「高校生のための、オーケストラはタイムマシンにのって」は、いろんな楽器の演奏を聞いて楽しかった。
「新世界(ドボルザーク)」は一楽章だけだったがよかった。「サンドペーパー・バレエ」の時に左端の人がヤスリを落としてしまって可哀想だったが、変わった演奏でおもしろかった。
_____ 竹内正美(昭和62年、家政卒)

校地の「地下水」の謎

杉崎 斌(前学校長)

南ホームルーム棟の西南の隅にマンホールの蓋があり、その地下に冷水が流れている事は職員の間でも意外と知られていない。どうして地下に多量の地下水があるのか 千曲の七不思議の一つであるが、今回 杉崎前校長が解説・解明してくれた。

校舎の建っている地は昭和48年以前は広い、およそ一万坪のグラウンドでありました。そのグラウンドの南側の西よりに東西に走る直径1mぐらいのコンクリート管が埋蔵され、湧水を汲めるようになっていたのである。昭和8年頃の昔の話だが、この大量の湧水は千曲川に沿い赤岩から中之条・下之条にかけて走り、再び千曲川に注ぐ川底から浸透した伏流水を集めた川である。

陸軍がこの地に飛行学校を設置したとき、この川が邪魔なので大きなコンクリート管で埋めた。

終戦、そして昭和21~23にかけてこの飛行学校分校あとに男子部(市立商工学校)と女子部(市立高等女学校)が引っ越してきた。

それ以来グラウンド地下を走るこの 湧水は、年間水温がほとんど一定であり、夏は冷たい清水である。 放課後・クラブ活動のあと、この冷水を浴びたり飲んだりしたものである。

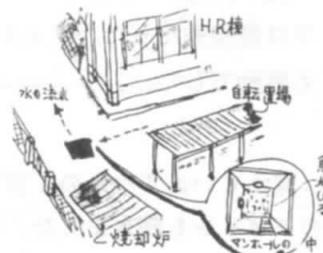
文字通り生徒のオアシスであったことが、懐かしく思い出される。校舎移転に絡んで昭和50年の水質検査の結果は、飲み水としては不適当の印を押されてしまった。

在学の頃は上田橋から学校まで人家はほんの数軒であったが今では民家も増え地下水も以前のようなきれいな水ではない。

千曲高校へは二回目の赴任で9年間いたにもかかわらず、湧水についてはすっかり忘れていたが、三回目の赴任の7月、その湧水が見たくなり、数人で久しぶりにマンホールの蓋を開けてみた。水面に降りられるよう取っ手がついている。覗くと、大きなヒューム管からとうとうと落ちる千曲川の湧水と対面できたのである。なお壺の底をよく見ると、大きなウグイ(ハヤ)が5~6匹いた。 早速コップに汲み上げると冷たいためコップの外側が曇った。水道水と比較しても甲乙なく、むしろ結露があるためか透明度は汲み上げた方が良く見える。飲めないのが残念ですが、おそらく雑排水のためどぶ川になっているだろうと思いついていたが予測に反して、冷たく透明でありかつ魚までいたことにほっとした次第である。

上田市長に、来校の際見ていただいたが、水量が多く透明度の高さに驚いておられた。いつまでも綺麗な水でおくよう願っている。

※ 七不思議の一つにはあり、44頁参照。
49頁にエピソード、



ここが地下水の入口
(マンホール)

エピソード

九鳥に軍配!
長崎、藤木両先生ショック

一件落着のハズだったが、

※ 藤木先生

建築科と商業・家政科を結ぶ渡り廊下の天井(梁との間)に、ハトが住みついた。それを防ぐためF先生が立ち上がった。*長崎先生も手伝った…。

(1) 田畑で使う「目玉」の鳥威しを使用→しかし、一週間でききめなし。

(2) ダンボールで梁との間をふさいだ→これも、わずかな隙間にもぐりこまれて巣を造られ失敗。

長坂商店のおばさん

(文責) 相原 文哉(職員)

千曲高校前の交差点に面して「長坂商店」(数年前までは「科章・上履きなど」の販売を依頼していた)、その商店は昭和25年頃から、学校の前にあるというので丁度、千曲高校の歴史と同じ「年輪」を持つといえるのです。

何より今日もクラブを終えた生徒が、パンやジュースを買うなどなじみの店・場所です。その店主のおばあちゃん(84才)から、千曲高校の生徒との関わりの話を伺いました。

※ クラブの者が立ち寄っている様子は46頁にある

「ここに店を開いたのは昭和25年頃、当時は古舟橋も国道もなく、店部分は旧道(登下校の道)は東側でした。旧校舎時代も運動部の生徒さんがよく放課後立ち寄って、パンを食べて行ったものです。今の体育館の位置が運動場で、バスケットボールは外でやっていましたネ、その女子バスケットの生徒さんが「おばさん(当時は若かったから)、6時頃食べに来るので ラーメンをお願いします」と頼まれたので時間までにつくって待っていました。

ところがいくら待っても、7時を過ぎても来ないので、ラーメンはのびてしまう、心配にはなるし…、やっと7時半頃、顔を出して「今日に限って練習が長くなり(先生はずうというし)、帰るに帰れなくて。おばさんゴメンナサイ」って

新校舎になってからか、その直前かはっきりしませんけど 野球部の生徒たち (顔はいつも放課後立ち寄っていたので見知っている)が「甲子園の決勝戦を見せて!」と、5人でやって来たのです。

「先生に見つかるヤバイから」と言うのでクツを奥にしまい、中が見えないようにカーテンを引いてやったものですヨ。

そうそう野球と言えば、ある時に長野市の球場で千曲高校が第二回戦にも勝った、それがうれしくて、球場へ祝電を「千曲のババ」で打ったんです。すると監督さんのH先生が帰って来るや、すぐに「おばあさん、電報ありがとう」ってお礼を…。

昔の運動班(特に女子)の生徒が大人になり、子供がまた「千曲の高校生に…」、その母親となった生徒さんが「おばちゃん(昔の呼び名で)、子供が世話になります」って、うれしいですネ。

先日(7月27日)、長野へ行ったら昨年卒業した家政科の女子が「おばあちゃん、どうしてこんな所に? 元気で長生きしてネ」と、声をかけてくれました。

もう、この年で顔も名前も覚えられないけど、生徒さんはちゃんと覚えていてくれるんです、うれしいもんですヨ。

千曲の生徒達はよい生徒ばかり、最近はおケ気味で計算が遅いんです、すると店の電卓で男子生徒は計算をしてくれるんです。真面目にネ。長生きのコツは若い人達と話をすること。

一番変わった事というと、学校の周囲に住宅が増えた事、それに自動車が…。

昭和22、23年頃だったか、古舟橋と学校の間あたりに確かワサビ畑があった、そんな事は夢のようですね」。

懐かしい卒業生もいっぱいいるでしょう、機会があれば寄って話をしてみてください。



「長坂のおばあちゃん」 84才



学校の七不思議

新校舎の巻

旧校舎(なぜなら飛行場跡の兵舎である)には当然、「学校の七不思議」として①「校舎に幽霊が〜」と、あるようだが、七つを取材するのは今となっては不可能、そこで 新校舎の『七不思議』 を拾ってみる。

- 1、応接室の「大壺」？
- 2、校舎の下に「地下水」？
- 3、「番地」が存在しない？
- 4、「校歌」に学校名がない？
- 5、「避雷針」のアースは？
- 6、格納庫の「教室」跡？
- 7、旧校舎の「生き残り」？



【角平言説】

1、「大壺」？

応接室には人が入れるほどの大きさの※淡緑色の壺がある。いつ？、誰が学校に？、その大きさは何に使用なのか？、まったく不明。その価値は？※ 淡緑色とは「松代焼」のようでもある



2、「地下水」？

南ホームルーム棟とその南の自転車置場の間の地下2mほどのところを流れ、※焼却炉の斜め前で直角に向きを変え、今度は北(機械科棟の方角)へと流れる、冷たいきれいな水で大きさ10斤魚が数匹泳いでいる。

旧校舎に学んだ卒業生はよくこの地下水のことを知っていて、夏の暑いときはこの地下に入り、涼んだり、水を飲んだ。と

2年前にこの地下の川について解明された。 ※ 焼却炉の前に四角の鉄板の(マンホール)壺があり、そこから地下へと降りられる。42頁参照
49頁に古い同窓生の記録がある。

3、「番地」？

学校の住所は「上田市 中之条※“626”番地」となっているが、この“626”の番地は学校の校地には存在しない、『土地台帳』にも載っていない。当然、市内案内の地図にもない。※ 626番地に近い番地はある。(関連の記事が48頁に)

4、「校名」がない？

ほとんどの学校の校歌(歌詞)には「学校名」が入っているが、我が校の素晴らしい※校歌には「上田千曲」は入っていない。

※ 校歌については4頁を参照
は15頁に。

5、「避雷針」のアースは？

電気科棟に“避雷針”があるが、その『アース』がなんとテニスコート(旧正門近く)の樫の根元に埋められている。どうしてこんな長距離(離れている)なのか？、旧校舎時代の名残か。

6、格納庫の「教室」跡？

昭和24年、上田千曲高校になったとき、飛行場跡の※大格納庫を仕切り「教室」として使っていた(同窓会館・桐葉館の位置)。その格納庫の基礎が残っている。

※ 大格納庫は講堂と10教室に仕切られた。
13頁のカット参照

7、旧校舎の「生き残り」？

旧校舎時代は、桜、松、ポプラ、樺、※桐。グラウンドの周囲に「アカシア」があった。多く木の中でアカシアの木が焼却炉(ここがグラウンドでテニスコートの位置?)の横に、当時のまま生き続けている。つまり、昭和24年以來、千曲高校の歴史を見つめていると言うわけ。

(桐の木については2頁参照)

※ 桐は全校で将来役立つだろうと植樹した。

強練を週に3日やった。小林蕃夫先生の指導で、剣道術と基礎訓練に汗を流した。食べる物もなく体力がつかず過労と栄養失調で黄疸になってしまった。——滝沢（山崎）隆（昭和20年、商業卒）



田中則夫（庭球で東信大会優勝、昭和31卒商業科2組）らと庭球の練習に励んだ。練習のときに飲んだ校庭の湧き水がうまかった。質実剛健の気風で長髪も禁止されていた。駄菓子屋へ裏から入り、お茶とパンで腹を満した。建築科の相馬今朝一先生は若く、張り切っておられ、当時としては珍しい設備で今、盛んに使われている空調を教えてくれた。——山田幸司（昭和33年卒、建築科）

上田市役所には、千曲高の同窓生が10%以上おり、特に建築課には多い。「当時の小県蚕業学校（現上田東高）の蚕室を借りて半年、東小学校に1年。このように転々としていた。校舎が出来ると戦争が激化して工場へ勤労働員、授業は1週間に1日ほど。



※長坂商店のこぼらしい

——佐藤次男（昭和20年卒、建築科）

昭和50年
工業科男子生徒の測量実習（え・同校教諭、片桐昭）

昭和53年の改築で、上田市の職員として「特別教室と管理棟」を設計したと、誇りに思っている。

——上野 貢、田中 進（昭和25年、建築科）

「学校では、野球に明け暮れた。平原から通学していたので、練習が遅くなると夜も10時過ぎの時もあった。級友の倉島寿己君が投手、私は三塁手だった。

——林 明男（昭和35年卒、建築科卒・千曲高校職員）



S26、大格納庫教室が傾いた。その建物は陸軍航空本部の高山警技師が設計したもので、鉄材を使わないスパンの大きな木造の建物だった。「仕切った教室が暗いからと、壁を切り取ってしまったために傾いたのかなー」と、おっちゃんの名前で親しまれていた久保敏先生は語る。

——久保 敏先生 S24年～50年（建築科教諭）



イスや机はオンボロだったため、体の大きな人（X君）が腰をかけるとう壊れてしまい（ストーブのまきにしようとして、教壇の下へ隠しておいた。その教壇が少し浮き上がってしまい先生に見つかり、叱られた。そんな一幕もあった。——有賀嘉三（昭和26年、商業科卒）



とにかく机もイスも古かった!!

【名物教師】

敬称略



実科・高女時代

①有川仙之助（農業）

素朴な人柄。「私は、教育者だ！教育のために教壇で倒れるのは本望だ」といわれていて、講義中脳溢血で倒れてそのまま。教育熱心。修学旅行はワラジ履き。

②塩入 進（物理、数学）

○ワラソウリで通勤。雨が降るとそのワラソウリをふところに入れて裸足で登校。
○着任草々、棒高跳びに夢中になり、基本もへったくれもなく自己流で長いタケざおを使って校舎の屋根から飛び下り骨折した。それでも猛練習、遂に県下の競技大会で優勝した。

○夏休みに母校の北海道大学へ遊びにいったのだが、休暇が終わってもさっぱり本校へは帰って来ない。心配した池田教頭が、「スグカエレ」と電報を打つと「ナニヨウ、ヘンマツ（何の用事があるのか、返事で説明を）」と返信をよこした。

○思いついたことは、何でも実行に移す無頓着で、愉快的な先生。

③宮下 銀子（裁縫、作法）

よく小言もいったが、下手なのはほどいて「あなたは、そつちを縫いなさい」と半分ずつ仕立てた。教材の代わりに小学校の男先生の寝間着を縫ってあげた。

④清水 洸（生物）

「アメリカのMPが授業中に入って来て『血を見るような実験はいけない』といいながら顕微鏡のミジンコを喜んで見ていた。女生徒を連れ、引揚者を上田駅まで出迎えに行つて、その時の湯茶接待がまじめだと新聞に報じられた」

上田千曲高時代

①（昭和24年）久保 敏（建築）

「お父ちゃん」の名で親しまれ、教え子（生徒）にも泣かされたが、若い（昭和25年から昭和50年）時から熱血漢で建築構造設計には情熱を燃した。年に何回も同級会に招かれる人気者。

②（昭和25年）丸山登一郎（体育）

「校舎の周りにキツネの足跡があつたり、キツネの赤ん坊を見つけたこともあつた。若い先生などは宿直の見回りに、自分の足音でさえこわがっていた。卒業生はボロ校舎で育つたので、どこの企業も立派に見えて、よく働いている」



「オッチャン」と人気のあつた
久保先生は語る。

運動・体育はもちろん 学校にはなくてはならぬ存在。
丸山天皇 こと！

4曲② 登一郎先生。



壁を切りとつたから弱くなつたんだナ！

4曲① 久保敏先生

ハプニングと事件編 (?)

最大の危機一髪

こんな **希必話** があった。それは。

平成●年(暇すると寝がある)の修学旅行のおどろくべき実話である。、広島にて「クラス別」の行動・見学となった、最終日、家政科2年1組は広島の安芸(あき)の宮島(日本三景、修学旅行では必ず訪れる)を堪能!、見学を終えて、さて広島へと戻り新幹線にて名古屋へ…予定通りに進んでいた。

広島電鉄の「宮島口」駅で(広島で新幹線に乗るべき)予定の電車を待つ。「さあー電車で戻り、広島駅に学年が **集結して**」と予定を確かめ、見学も無事終わり I と K の正副担任はゆったりとした **気持** で電車の入線を待った。

ところがとんでもない、考えられないことが **発覚**、起こった!



予定の電車が **「ない」** のである。つまり、

旅行業者が時刻表でスケジュールを組み、その時刻表で電車の時間を調べ組んだ時に「土曜日は運休」を見落としたのである。

※ 本当は水曜日だったかな?

さあー 大変だ、どうするか、どうなるのか。

いくら悔やんで、恨んでも、はたまたアワテテでも電車なんて存在しないのである。「電車を動かして」というわけには行かない、大ピンチである。何が何でも、どんな方法でもとにかく 広島駅までは行かねばならない。

駅前には小さな駅ゆえ、タクシーは数台しかない、しかも広島駅までは「かなりの距離」がある。

とにかく引率職員二人を含む43人(燃、新幹線を託)が移動しなければならぬ。



駅前のタクシーを片端から確保するのだが5台しかない。大きな旅行荷物はあるし、1台には4~5人しかのれない、小型が多いし、万事休す。

しかし、何とかタクシーは9台を確保できた(リミットであった)。これこそ幸運であった(ここでも時間がかなり費やした)、小型であろうがとにかく5人が強引に詰め込んで(もし8台だったらアウトであったと I 担任教諭はしみじみ、ひや汗をふきながら語った)やっとの、いや **必死** で43人は広島駅を目指したのである。

運転手さんも必死である。どんなことをしても、一秒でも早く広島駅へと。 **運転手さんも死に物狂いで協力...**
(新幹線の時刻は今度は間違いなく予定通り運行するはずであるから)

広島市内の道でも時には100%ですとばし...ここで事故でも起きていたら、いったいどうなっていたのかゾットとする場面である。



それに9台のタクシーではかなりの 時間の差 が起きる。そもそも宮島口駅前の出発時点ですでに差があったのであるから。

広島駅では最初に着いた **I 先生** は気が気でない、新幹線の出発時間は目前、秒読みである。駅前にて、いらいら、ドキドキとして待つ。時計とにらめっこ(「輪が縮まった」と徒)、

「途中で交通事故にならないだろうか」(あのスピードで飛んでくるんだから)

「もし間にあわなかつたら」

やっと最後の一台が到着。この時、新幹線 発車の3分前。だが、ここからまた戦いが始まった。新幹線ホームまで大きな荷物をもって全速力の移動である。こんな時に限って乗り場のホームまでが遠い、なりふりかまわず走りに走って、ホームへとたどり着いた。(映画の場面のような※筆者 注)

奇跡的に、本当に危機一髪、滑り込みのセーフであった。(ここにワープロで文字化する筆者も、その情景が目に見え、だって、こんな機会だからとしこたま土産を買い込み、両手に荷物があるのだから。それに、どのようにしてタクシーにそれらの「大きな荷物」を詰め込み、5人が乗ったのかな謎も残っている、とにかく人間必死、土壇場になるとすごい力を出すものだ)

いかに大変な(心身的にも)大事件であったかは、新幹線にて乗り込んだ瞬間、**2人が車中で倒れ、気絶してしまった**のである。

「後にも先にも(文字通り)こんな命の縮まる経験は初めてだ」と、担任だったI先生は語る。

「これは絶対内緒ですよ」とも付け加えられたが。

⑥

【学校の住所がない】

平成9年7月の事、事務室の越川さんが「これは驚いた、千曲高校には住所がない!」と言う。

何のことかと詳しく聞いてみると「千曲高校には※番地がないのです」

「つまり中之条「626番地」となっているけど(当然学校所在地としての番地は「上田市 中之条 626番地」がそうである)その『626』なんて、校地にはその番地はないのです」と、土地台帳を広げて見せてくれた。

なるほど『626』は存在しない、学校なら事務室・管理室のある土地が住所になるはずなので、昭和48年の今の管理棟の位置の番地、だとも考えられるが、(贈与の位置)地図から言うと「字久保田1204-3」となっている。校庭の西側(野球のダイヤモンド)に「632-2」とあるのでこの近くに「626」あったのではあろうか。いずれにしても現グラウンドの一面に、かつては存在したのだろう。

実は昭和30年までは「中之条」(翻はない)となっていたが、翌昭和31年からは、「中之条 626番地」になっている。土地の合筆(土地と番地、所有者などの整理)をした折、626番地が「632番地」に吸収されてしまったのかも知れない。

※ 番地がないのが千曲高校「七不思議」の一つなのです。

(42頁に関係記事)



越川さん「この謎は何だ」と



体育館とプールのある位置は「字、宮浦」(讀)になっているが、これは『宮川神社の北側(裏側)』の事であろう。よって『宮裏(浦)』なのかも知れない。その他、字名に『田』がついているのが興味深い。

あ の こ ろ

●S25年 宮崎 (宮沢) ミハル (家庭科)●

「県大会で100mに13秒5の記録。国体にも出場。「青木村から通学していた。朝の早い汽車に乗るためには三時頃に起床、峠越えをして別所に出たり、上田原の電車の駅まで一時間も歩いた。“せつない”と思ったが、準備体操になった」

コスモス会騒動

昭和24年10月のこと。戦後の「民主 国家の建設」という事か、「校友会」にかわり、「学校自治会」が出来、学校のあり方、授業のあり方等、さらに生徒自身の熱意から学校側に対して、「図書閲覧室の設置」「校歌の作成」を求める声と動きがあった。

そして、10月のある日、商業科男子の有志数名が「コスモス会」（意味不明、もし、現在の宇宙のコスモスを指しているとなれば・・・）を作り、第一回文化講座（目的はゼミといったものか？）を社会科の某先生にお願いし「農村一揆」、英語科のK教諭に「ロシア文字」の二講座を開いてもらった。



ところが、このコスモス会の動きが職員会の議題にのぼり（政治的背景、思想的に問題があるので）と議論となった）、結局、職員会より解散が命ぜられた。

厳しいしつけ

昭和30年、家庭科のクラスの担任T先生は服装について非常に厳しく、始業の挨拶に起立すると「バッジのついている人は座りなさい、次いで、制服のリボンを『きちん』とついている人は座りなさい」といつものしつけで一日がスタート。正しい服装をしていない者は立っていなければならなかった。

昭和32年頃は、厳しいしつけと規則があり、「先生が引率しなければ、スキーにも行けなかった」。「それは納得できない」と、大草校長に直接談判（直訴）に行き、学校長からは許可をもらったが、生徒指導のW先生から呼びつけられ、説教され、結局クラス有志のスキーは実現できなかった。

児玉 晃夫（昭和34年度卒）



ボールを後方にははずす理由

野球部で活躍した林 明男三塁手（昭和35年、建築科卒）は、夏の炎天下で毎日練習に励んだ。ところが面白い現象に気がついた。レフトやセンターの外野手がしきりに、ライトの守備につきたがる。そしてライトの守備につくと、『必ず』ボールを後方にそらす。

「技術的な事かな」と不思議に思っていると、ライトの後方へとボールを拾いに行った選手が、フッと地上から消えた。その不思議さと、エラー（ボールを外す）の理由は意外な事であった。

千曲高の七不思議（？）の一つである、「グラウンド下にきれいな冷水が流れている」、その地下水を飲みたいばかりにライトの守備へ……。そこでわざとボールを外し、地下水路へと降り冷たい水を飲みに行くために姿が消えたのである。



あ の こ ろ

●S48年 大塚（関口） 郁子（商業科）●

「学校内が広くて、電気科や機械科などは学校祭のときチラリと見ただけ。若林琢先生（商業科）は珠算の授業をやらす、自分の昔話をしてくれて楽しかった」

【ある修学旅行】

平成5年までの修学旅行は、「篠の井」から特急で名古屋へ。そして新幹線で関西や岡山、広島。四国（金毘羅参りと瀬戸大橋）へ行くことも。（バスで名古屋に行った年もある）

ところで、車中は携帯のゲームをやるか、『ジャンプ』などのマンガ本を読んでいる、そして最近ではウオークマンを聴いている。トランプをする者はめっきり減った。こんな調子だから「何という駅で乗るんですか」「何時に着くんですか」「どこへ行くんですか」と質問責め。まがりなりにも事前学習はやってきたしもちろん、（必携）“旅のしおり（栞）”にみんな書いてあるのに。

そして列車やバスが着いた瞬間、すぐに自動販売機に殺到。

「時間の観念」があやふやなため、こんな事が起こった。



名古屋駅に着き、広島行き予定の「ひかり〇号」までには40分余りの時間はあるが、とにかく新幹線のホームへ移動した。

そこへ、無数に走っている早めの「ひかり△号」（もちろん予定の列車ではない）が滑り込んで来て、目の前に停まった。すると、ここぞとばかりに5人の男子生徒が「それー」と乗り込んでしまった。

“数秒間の停車”なので「違う、降りろ」という声も届かないうち、列車は発車してしまったのである。

※ 名古屋駅からその「ひかり△号」に電話し京都で下車させて、予定の「ひかり号」に乗せた。



【下駄履で通学】

昭和31～33年頃は今のように“革靴”を履ける時代ではなく、クラス40名の内38名が下駄履であった。

一年生の時は新しい下駄を履いて行き、廊下にある下駄箱に入れておいたが、帰りに下駄箱から出すとこれが センベイ のような“下駄”に変身していた？

これでは困る(家父厳ひど(叱らた)ので、今度は教室の机の中に下駄を入れてこの交換(鶏)事件を防ごうとした。

専門科目になると実習室や特別教室の授業となり、その教室まで下駄を持って行った。しかしこの移動教室に行った時に限って、その教室の机の中に下駄を置き忘れてしまった。放課後あわてて持ちに行くと「なくなっている」か、またもや「薄い下駄」に変わっていた。

3年生になると親からは1ヶ月に2足分を使うので下駄を買う為にお金(下駄)をもらったが、若い肉体(食欲)のためにウドン代や映画代へと回ってしまい、必要な下駄は「下駄箱交換事件」(方法)で対処した！。

その頃の生活指導の先生は厳しいところもあつたが温かみもあり、よい思い出ばかりである。

【そこのけ、そこのけ俺が通る？】

昭和の終から平成の初めにかけては、おっかない先生がたくさんいた(今でも約一名？ほど健在だが)蝶丸《高橋 魁》、バキン(後に“フセイン”や“尊師”とも呼ばれた)《滝沢 魁》、ウソン《細川 魁》等。その先生たちが通るだけで生徒たちは震え上がった。

バキン先生は「先生がた、職員会議の時間です、全員(会議室まで)駆け足！」と、放送をした伝説の持主。



授業風景

【昭和23年】 今まで「鬼畜米英だった」のがガラリと変わり、機械の教科書はアメリカの原本を使った。

【昭和30年】 英語の小林利通先生は授業も、挨拶も 全て英語 で日本語はいっさい話さなかった。よって英語は手こずった。

堀場勝椰(昭和33年 隠微)

【昭和34年】「物理」の教科書は上田高校と同じ。「数学」の授業はアメリカが月ロケットで宇宙開発をしている時代。「月にロケットを打ち込む、この技術は、針の穴へ鉄砲を打ち込むのと同じ難しさだ」と、いつも世界や科学の話をやり、数学はわずか10分位で終わりであった。「後は君達の力で」と。

理科には 清水 洸, 山岸猪久馬先生ら 学者が…… 林 明男(昭和35年 隠微)



女性の香り

昭和26年の入学でビタミン組、『A₁』の生徒です。

教室はA₁, A₂が現在のテニスコートの所にある正門の外にあった。0番教室(木造・昔の兵舎を改造した)のうち、隣の教室には家庭科(1~3組)のお姉さんたちがいて、女性の「香り」がした。43年振りに来校、母校がものすごく変わってしまいビックリ。 西沢保榮(昭和29年 隠微) 第38回千曲祭「80年のあゆみコーナー」に来校しての記載より

運動会のひとこま

平成7年の運動会で15人のクラス対抗の「ムカデ競争」。

女子クラスは練習の成果によってスムーズに走ったが、男子チームとなると先頭は急ぎ、後ろはノロノロ、当然15人がバタバタと倒れる。

これを見ていた電気3年は「ウサギ跳び」方式で、ピョン、ピョンと跳ねてゴール。好タイムであった。一方、電子機械科も考えた、「横一列」のアイデア(?)の作戦で15人が横にズラリと並び(足を組んで)一斉に「いち、に、

一、二！」と走った。タイムはよかったが、「ヨコの百足(ムカデ)競走 なんて ムカデ競争は白熱 前代未聞である、蟹(カ)競争ではあるまいし」と、この記録は認められなかった。



【司会者のヒット】

第26回千曲祭の後夜祭で全校※「○×ウルトラ・クイズ」を実施した。

問題の一つに「藤波弘子先生(隠)と内山到先生(隠)の年齢の関係」、すなわち、「藤波弘子先生の方が内山先生より 年上 である、○か×か？」と。

ところが司会の電気3年のS君は

『藤波先生の方が ババ である』と、

やったから(ヒットを飛ばしたのであるが)大変、若い藤波先生はステージの上で大怒り? 「ヒドイー！」

また、答に、○(正しい)にした人数が多く

藤波先生はこれまた ショック。

ちなみに両先生は『同年齢』。よって答えは ×。

※ この時は、学校長も趣味の問題、先生方の給料の問題など「学校に関する」○×クイズであった。

「○×クイズ」は、学校に関するものが出題された。



【予餞会のシルエットクイズ】

「3年生を送る会」(予餞会)としては、昭和62年までは全校で映画を見ていた。昭和63年3月の予餞会では3学年の先生方の姿をシルエットで映し出して担任を当てる「クイズ」が企画された。斬新なアイデアで楽しかった。最近ではビデオの導入によって「3年間の思い出」が放映され、平成7年にはその「3年間の思い出」のビデオテープが卒業生に配られた。



【生徒会での制服の自由化】

昭和50年の2学期に新校舎に移った。しかし、まだ商業・家政科棟は出来ていなかった。千曲祭の一般公開はなく、運動会と斑活動の発表であった。

50年には制服の自由化が議論になったが、6枚ヒダのフレアスカートは上田近辺では珍しいと『ファッション雑誌』に紹介されたこともあり、意見はあったが自由化としては盛り上がりずそのままとなってしまった(自分はこの時、生徒会役員であった)

※ 80年のあゆみに寄せられました「原稿」、匿名

あ の こ ろ

【担任の思い出】

昭和41年、私の担任は長野工業(?)から赴任された「千野英巳先生」。恐ろしい先生でピリピリしてた。(ただし、商業科等女生徒がいるクラスでは優しくったとの噂だったが)

《エピソードその1》

入学式の当日、何が原因かは覚えていないが、高校生活のスタートで凄^おいけんまくで怒られた同級生がいた。

《エピソードその2》

その先生は数学の担当であり、午後の授業が多く、どうしても眠くなるが、そこへ黒板消が飛んできた。不思議に怪我人はでなかった。

《エピソードその3》

2~3時間目は早弁、ところが職員室にいる筈の先生が廊下へ、窓際の者は一瞬体が硬直したがニャッとして行かれてしまった。



【犬も授業】

平成2年6月の事、三階の建築2年生の教室ではいつものように賑やかな「工業数理」の授業で板書された問題を解いていた。

そこへ一匹の赤犬が後ろの入り口からトコトコと入って来て、真ん中の机の下へ寝そべってしまった。

この犬の出現で賑やかな教室は「シーン」となった。

「何だ、急に静かになって！」と、板書から振り返ったA先生は犬を見て「オオー、犬が俺の授業を受けに来たか!」と。

だが、この一言で犬はサーッと起き上がり、廊下へと出て行ってしまった。 ※ ときどき猫や犬が校舎内に、時にはトンボや蝶、小鳥も教室へ入り込んでくる。 クラス通信(礎₂)より



【たかが筒、されど筒】

千曲高校への通学は上田橋を渡る。その時に他校生や通勤者とすれ違うわけだが、建築科の生徒は製図用の筒を持っていることが誇りであった。

ところで最近はその製図用の筒を自転車の前カゴに入れ、後ろには同級生か彼女を立ったまま乗せて(これを「二輪」と呼ぶらしい・2人乗り)、古舟橋の歩道を学校へと目指す(このときオーケマンを聞きながらだと典型的な現代高校生?)。

古舟橋の歩道は狭くかつ、欄干(てすり)が低い、ある生徒が風にあおられて「誇り高い筒」を低い欄干から千曲川へドブンと落としてしまった。

拾いに行こうにも、川の中央をブカリブカリ。

「ああー、たかが筒!、されど筒?」と、歎いたとか。

新人類には前者か。後者も昭和50年代までのことであろう。

※ 古舟橋の歩道の「手摺りが低くて危険」との声がPTAの会合に出る。



通学あれこれ

【悪路と渡し舟】

昭和20年代は学校と三好町との間の通学路は砂利道の悪路、その上街灯もなく途中には墓地もあり、しかも人家はまばらで寂しい事、この上ない。

そこでクラブ活動など日没後の下校は、女子の一人歩きは禁止されていた。男子と一緒に集団で帰宅するように指導されていたのである。

昭和34年頃までは、古舟橋の近くに「渡し舟」があり、上田西部、塩尻地区の生徒は両岸にかけられたワイヤーを手でたぐって舟を進めて渡った。その「渡し舟」に自転車ごと乗って渡河しての登校であった。大水が出ると一時運航中止。

【不名誉記録】

平成8年の運動会は25人によるクラス対抗「大縄跳び」、成功(跳んだ)回数を競う。

建築2年(艇の姓も加って)は息もピッタリ、19回を跳び優勝。

その隣は建築3年(A姓)は、生徒会長Oを加えてやっと25人、優勝めざして意気込んでチャレンジ。「それ、イチ!」と、跳んだが1回目で失敗(つまり0回)。3回ある試技も結局、0、1、0回の)最低記録であった。

「人数が揃ったことも立派、参加することに意義がある!」と、A先生は負け惜しみ。



【自転車通学急増】

昭和30年代は生徒は下駄履、ズック靴か革靴になった。

また、自転車通学者が急増した。

昭和32年は市内または上田駅からの自転車通学者が450台(人)

このため ① 各クラスに1本ずつの ポンプ (空気入れ)を配置。

② 理科教室の北側にあった240台分の自転車置場一棟を追加。

昭和34年には建築科2年生の建築実習として、小体育館の北側に100台分の「自転車置場」を造った。



【年齢は不詳】

「昭和40年代のこと、学校や官舎などを掃除してくれる人がいました。

千曲高校にも一人のおじさんがいたが、このおじさんはハデナ服装にサングラスをかけて常に若々しくふるまっていた。年齢は不詳で30~50才であろうという。

最近(平成5年)、※そのおじさんが健在で、千曲川の堤防を黄色の運動着で体操をしながら歩いていた、頭はツルツルになってはいたが相変わらず年齢は読み取れなかった。しかし当時、30才としてもあれから30余年経ているのでゆうに60才を越えているはずである」と。

※ 本校の卒業生である清水高市先生は不思議そうに語った。

バイクの山岸先生

昭和46年の地学班として「塩田平は湖の底だった(湖成層の研究)」で活躍された(当時家政科の13人の娘さんの一人)関 多三好さんが37年ぶりに母校を訪れた。それは第38回千曲祭の※「80年のあゆみコーナー」に展示された『塩田平の湖成層の研究』の展示物(新聞記事と表彰状など)を見るためであった。

展示を見ながら、懐かしく当時の様子を語ってくださった。

「顧問の山岸猪久馬先生は当時は バイク であり、冬の放課後、塩田平の研究に行ったのが、夜の8時頃までの調査になってしまい、寒かったり、くたびれてしまいました。

さて、帰りとなり、家までは先生のバイクに《3人乗り》をして送ってもらったものです」

※ 1997.9.7.80年のあゆみコーナーにて、88頁の写真、坂井さん提供。

坂井(関)多三好(昭和37年 家趣辞)

【テレビ効果】

第37回千曲祭において建築班(建築3年加藤子姪)の研究発表が※「信濃国分寺三重塔の古い材」であった。

この500年前(室町時代)の『古い材を希望者にプレゼントします』と、地元の テレビ(UCV) が放映した。

すると土曜日の一般公開は午後1時からなのに、なんと朝8時30分、SHR・掃除前なのに市内蒼久保の男性(70歳)が訪れて、「親戚の人の分もぜひほしい!」と。

「先着者、一人1本」であったがこの早朝来校の熱意に3本を顧問のA先生がプレゼント。

とにかく マスコミ・テレビの効果はすごい。 ※ この「古材」は先生方に好評であった。



あ の こ ろ

昭和20年、終戦の少し前だったが、飛行場を空襲したアメリカのグラマンが朝日に銀色の機体を輝かせていた。

大日方弘文 (昭和21年機械科卒)

【1時間でもう“卒業”！】

平成3年4月の入学式(仮姓が弊社)の出来事。一時間の厳粛な入学式がとどろりなく終わろうとしていた。最後の閉式の辞である。

島田教頭は厳かに「以上をもちまして“卒業式”を終わります」と。

近くにいた職員や式場全体「アレー」と驚き、あわてた。

職員席からも「違う！(入学式)」と、示唆と訂正の小声。

ところが、島田先生は会場の雰囲気から誤りを感じたが、あわてたために訂正の言い直しも、またもや

「以上で“卒業式”～」と。

再び『卒業』になってしまった。

つまり、この年の入学生は入学して1時間で『卒業してしまった?』

※「入学式を終わります」になったことは言うまでもない



印象深い入学式に...

【蝙蝠(コウモリ)事件】

機械、電気、建築科棟付近には「コウモリ」が巣をつくり、夕方になると飛び回っている。渡り廊下にもフンがいっぱいある(夜に天井に吊り下がるのであろう)。

それは、平成3年11月、建築科製図室におこった。一匹のコウモリが昼間なのに教室を我が物顔で飛び回っていた。女子は製図室に入れないほど驚き、嫌がった。 ※昼間なのに単に迷って(?)飛んではいるのだらう。

そこで男子がホウキやモップを持って追い回したが、冬のため窓は閉まっているのだが、とてもコウモリを捕まえることも、追い払うことも出来ない。そこへA先生が「俺に任せろ」と登場、大ミエをきって“三角スケール(長さ30cm)”でコウモリの不規則な軌道に備えて構える。ところがここで『奇跡』が起こった。

ヒラリ、ヒラリと超音波を発しながら障害物を避けて飛ぶコウモリが、A先生の方へと飛来してくるや例の三角スケールでコッーンと叩き落としてしまった。

男性軍は「神業、奇跡、ミラクル」と絶賛。

ところが女子は、なんと死んだコウモリを見て、「残酷」「ひどい!」、「A先生って非情だ」と、鬼のような言葉
を投げかけた。 クラス通信「礎」より

※ 校内にはハトとコウモリが住みついている。また球技大会時にヘビが庭にいたことも。



【とんだ爆発事件】

平成8年の12月の寒いある日の午後のこと、杉崎校長が事務室前の廊下を歩いていると、突然「進路室」の中で「ドカーン！」ともものすごい爆発音、驚いて何かとドアを開けて見た。

ヤカンの蓋(ふた)が5~6mの所に飛び、ヤカンはストーブの上から床に落ちている、しかし、水は一滴も周囲にこぼれていない。そこには「コーヒージュースの缶」が一本あった。

事務室からも「何事か」、「何か事件か」と駆けつけて来たが、何がどうなったのか分からない。

つまり音とフタを飛ばしたこの事件、事故の犯人、その原因は?

缶コーヒを暖めようとして、カラ(掃除機(なべ))のヤカン
中で、膨張した缶コーヒがついに動きだし、ヤカンの蓋
を吹き飛ばしたのである。

幸いその時は、進路室は無人でケガ人も被害もなかった。

※この珍事件、職員会で報告された……



歌唱力で会長に

生徒会の役員、とくに「生徒会長」となると立候補者がいなかった年や逆に、3人も4人もいる年があったり…する。立候補者は必ず「今年より千曲祭を盛り上げ、成功させる」と公約でアピールする。

すると、必ず質問も「具体的にはどうするか」、3年生からは「今年の千曲祭を評価しないのか」などの質問というより意見が出る。

ところが昭和60年11月の会長選挙は違っていた。何と、質問や要望は候補者全員が「校歌を歌ってほしい」であった。

その結果、キャラクター性もあり、度胸と歌唱力もあったK君が評価されて見事に生徒会長に輝いた。



風と雨傘

中之条の辺りは風が強い。千曲川沿の通学路は上田橋から登校の朝は川下からの『向かい風』、おまけにこれまた帰りも川上からの『向かい風』のため、傘を前にしなければ歩けないほどの強風。

半過の地は千曲川が最も狭い地形のため、そこを風が一気に吹き抜ける。つまり『トウミの口』ともいってよく知られている。

別所線の利用者は、赤坂上駅から徒歩で登校したが雨や雪の日は下から吹きあげ、時には突風もあり傘がトックリ（キノコ）になってしまう。

ところで昭和60年頃には、雨の少ないこの地域とはいえ、下校時に急な雨に遭うことがあった。そこで先生心（配慮）により各科・コースに緑と黒の縞模様のコウモリ傘を数本用意した。

ところがストライプ模様に加え、その傘には大きな文字で「千曲高」と書かれてあり、あまりに目立つ傘のため利用者はなかったの、この先生心案も数年で途絶えてしまった。※このコウモリ傘専用の「カサ立て」を買おうとの計画もあった。



完全武装でヤル気充分

【土木部長奮戦する】

昭和26年のこと。学校造りと校地整理は、全校の職員と生徒が一丸となってやった。まったくの河原であり、毎日クラス毎に交替で石集め、コンクリート練り、そして廊下造り。

そして木が一本もないので植樹をした。しかし、地下1mには飛行場跡のアスファルトと石ころだらけであり、水は毎日やり、堆肥もくれたのが結局1~2年で枯ってしまった。

大貫教頭は連日作業着に身を固め、陣頭指揮をとって学校造りに懸命であった。その姿と勢いから生徒たちから『土木部長』と、呼ばれた。



あ の こ ろ

●S39年 斎藤（春原）泰生（電気科）●

「昭和39年、40年頃はスポーツは大変強かった。三段跳ではインターハイ9位の清水 渉（昭和40年、機械科）、80mの茂木秀二（昭和40年、機械科）水泳の滝本住夫（昭和41年、電気科）、走高跳、三段跳の西藤友和（昭和39年商業科）らで、39年の県大会で総合優勝した。それまでは進学校に優勝をさらわれていただけに、喜びは大きい」

会社へお百度参り

昭和の初期は 不景氣 で就職先はなく、先生方は毎日会社へと就職をお願いに歩いた。ある会社はせつかく遠くまでも先生が訪ねて行ったのに事務所の入り口で立ち話。

やっと人事係の人が出て来ても「いままでに千曲高校から来ていませんので」と断られたり、
「今まで一度も生徒をくれなかったのに…」と嫌みを言われた。
「門前払い」が多かった。

それでもひとつ、ひとつ会社回りをした。白田や佐久まで手弁当で回った。汽車賃がなくなり歩いて帰って来ることも。帰校したときは夜中になってしまつて……。

と、建築科(黽黽々)の久保先生は語った。(昭和50年)



久保先生らは毎日
会社まわり

学校長の名前も登場

平成7年の千曲祭の校内祭、この時は体育館で全校クイズを実施、先生方も回答者となった。

問題「杉崎学校長の名前である“斌”(あきら)をワープロで求めたい、では『斌』は何と読んで求められるか、文字が出てくるか？」

とこれは難問であった。国語科の根橋に解説を「これはヒンと読んで入力すると出て来ます」と、~~や~~っていただいた。これは模範的説明。そこで司会者は「そうです、杉崎校長の名前は、品(ヒ)がよくなるようにと命名されたようですが。はたして…」とのよく分かる解説を追加した。

この解説指導は顧問の某先生によるらしい。一部に拍手が……

校長の名が問題に



【カラスの巣と教育問題】

社会科教室の窓から南を見ると、テニスコート横の大きなケヤキの木にいつからかカラスが巣をつくり住み着いている。O先生はこのカラス一家をホノボノと平和のひとこまとして眺めていた。

一方、生徒会関係で生物の研究室をよく訪れるA先生はある日、そのカラスの親子(一族)が、自転車置き場のアスファルトに「クルミ」を空から落として割っている場面に出遭った。

「これは利口だ、どこか(?)の高校生よりカシコイかも知れない」と、複雑な気持ちで眺めていた。



あ の こ ろ

●S40年 関口(栗原)悦子(家政科)●

「小林(鮎沢)亨先生(体育科)は、『先生というな“お兄さんと呼べ”と冗談をいって笑わせた。好記録をだしたらユニホームやスパイクを買ってやる』と励まされた。」「遠征のときは、パチンコに連れていってリラックサさせたり、自分の給料はみな使うくらい、陸上のために青春を費した。その好意にこたえるよう懸命にやった」

【こんなはずではなかった】

『甲子園への夢 野球試合観戦記』

平成9年度・夏の野球大会は雨のため一日延びた。

7/19(土)に長野県営球場で対「駒ヶ根工」との間に、9:00からプレーボール。「今年こそ甲子園へと応援側も燃えた。すなわち、メガホン を40本買い(これで社、打撃)、景気つけの準備は万全、藤沢先生率いる プラスバンド も張り切った。

応援は生徒会役員、応援委員会、それに伊藤(謙)、西沢(謙)、上水(詮)先生、生徒会顧問の犬飼、井原先生ら総勢50名(榎先生は飯張野から駆けつけ)は、学校を7:20に出発して高速道路にて8:30には東和田の球場へ到着。丁度選手はフィールディングをやっていた。千曲高の守備練習は緊張しているのか送球に精彩がなかった。父母会、同窓生も駆けつけ、総勢100人くらいになった。 ※ 今年は無運の幸運により「2回戦」からである。

さて、先攻で試合は始まったが、初回は残念ながら3者凡退。

そこでAとI両先生は、球場近くの 弁当屋 に『昼食を注文』に出掛けた。

9回まで戦うだろうとして(勝てれば先攻だし9回裏がある)想定しての、「11時に弁当が届くように」と、注文をした。

球場へ戻ってびっくり、1回裏に 何と5点 を入れられてしまったのだ。2回以降の攻撃も三振して(キャッチャー後逸)そのままベンチへ帰って着てしまう(振り逃げではないか)

ノーアウト2塁も結局無得点。こんな調子で、結局、まさかの7回コールド『0対7』で完敗、試合終了は10:15であった。

さあ大変 コールド負け とは計算外。こんなに早く終わってしまうとは。完敗のショックと「弁当が間に合わない」、※(31)回の裏の時、それでも、わざわざ時間指定の延期をしたのである。

*実はI先生は、届けてもらう時間をさらに「11:30」と、電話で時間を延期したというおまけつき。

『踏んだり蹴ったり』の番狂わせ(ちぐはぐ)? と、暑さでAとI両先生は 汗ビッショリ。

※ この試合については 59 頁に。



【無人化の一問題】

警備会社による警備システムの学校無人化は、夜中パトロールをし、見回ることにより電灯の消し忘れ、扉の開け放しや錠のかけ忘れをチェックしてくれて効果は大きなものである。

しかし、その警報システムを 解除しないまま入室 してしまうことがある。すると、事務室へ警備会社から電話がかかってくる。

「うっかりだと思いが先生が…」と。

ところで、これが日曜日や休日、用事や忘れものを取りにうっかり研究室などへ入室すると大変である。

5分くらいで警備会社の人駆けつける。

ところが今年(平成9年)の7月にその無人化の弱点をつくような事故(軒ではない)が起こった。

休みの日の午前中のこと、どうしたはずみか 火災報知機 が突然鳴り出した、いつもなら音がやんで「ただいまのは誤報です」と、放送が入る。

ところがこの日は 無人 なのである。火災報知機は鳴り続けた(とにかくうるさい)、消防署(消防車)と警備会社が、「それー火災だ」と飛んで来た。

ちょうど散髪屋に行っていた香山校長のもとに、電話連絡が「学校が火災のようだ」と。

香山校長はあわてた ことはいうまでもない? ※ 弱点というかこんなことも生じるという話。一側。



【現代の若者】

平成8年の7月のこと、上山田で同級会を終えた機械科(昭和21年卒)の同窓生が50年ぶりに母校を訪れた、もちろん、旧校舎時代の大先輩であるゆえ、新校舎にびっくり(校舎と校庭が逆の位置になっている)それはともかく、応接室へと。

そこで一同は、現生徒会の役員に会いたいという。

「現状を聞きたい、激励をしたい」というのである。

早速、内山典彦副会長(数研)が応接室へと。

10人の大先輩(老人)の前にて、「生徒会の活動とその取り組み」の様子をとうとうと述べた。

同席した担任の相原教諭は、「あれだけの先輩、しかも10人の前でしゃべれるとはたいしたものだ」と誉めると、当の内山は「ええ、うちのジイさんたちと思えば、どうてこと…」と。



大先輩の前でも動じない

※ この時の同窓生は 柳町さんでした。
(22頁に寄稿)

【日中友好】

1997年2月、寒中休みに『中国歴史の旅・北京、西安の史跡を訪ねて』として、冬の中国へ。

小栗(数研)事務局長以下、城下団長(数研)ら18人(榎野や駒)は、西安(古、唐の都・長安のあった所)の郊外の食堂(中国では“大飯店”という)で昼食をするため予定の会場にと入った。その大広間の食堂ではちょうど結婚式の真っ最中(日本で言う披露宴)。

これは中国の風習、習慣を知るよい機会だと写真を撮らせてもらった(もちろん通訳を通してだが、吉原先生は中国語を少し話せるが)。

そのお礼にやじ馬団からカンパ・祝儀を。でしゃばりの日本人はさらに世界の城下団長の音頭で「新婚さん万歳！」と。

この日中友好の様子は手塚ビデオ撮影技師(数研)のビデオにしっかりとおさめられている。



18名の千曲軍団は勉強を
しに中国へと飛んだ!

あ の こ ろ

清水寺



● 高校時代の最大の「思い出」、それは、広島への修学旅行だ。上田から※東京へ。新幹線で広島へ、そして電車で宮島へ。そこは海の町であったのだ。我々長野県人にとっては海はうれしい、思わず目頭を押さえた。※ 鯉川で行ったこともある 砂子田雅美(昭和63年、建築卒)

● 修学旅行の一日目は移動に費やした。、3日目はクラス別見学で、宝塚ファミリーランドへ、すごい乗り物ばかりだった。一回で酔う人もたくさんいた。楽しい1日だった。

4日目は※京都における班別行動、清水の滝(3つの願いがかなうという小さな滝)では人が大勢並んでいて結局飲めなかった。※ 京都における班別自由見学行動は、当時は流行だった。そのご長崎への修学旅行でも午後の半日は市内自由見学行動となった _____ 笠原 薫(昭和63年、商業卒)



● 昭和62年10月20日、1,000個の風船に千曲高校生の夢を託して飛ばした。、千曲祭は大成功のうちに幕を閉じた。青い澄み切った空に色とりどりの風船が飛んで行くのを見ながら誰もが感動を覚えたことだろう。 _____ 岩下友幸(昭和62年、電気卒)

【文化祭と運動会】

昔は文化祭(学校開放、千曲祭)の最終日(胴日)には運動会があった。かつては入場行進もあり、さらにクラスやコースごとにハリボテの人形をつくっての応援合戦。種目もマスゲームや仮装行列、借り物競走など。最近では35人対抗の「綱引き」が人気があった。

平成3年にはエキサイト、盛り上がり過ぎて35人以上の出場者が殺到したり、1～2年生の試合に3年生が応援出場となってしまう人数確認に時間がかかってしまった。

そんな中で、3年生対抗(工業科)では女子が10人と男子25人で出場した建築3年が、何と全てストレート勝ちで みごと優勝してしまっ

た。クラス対抗リレーやパン食い競走、障害物競走など※楽しい種目もあったが、生徒は運動会を敬遠、平成8年で運動会は姿を消すハメになってしまった。

※ 騎馬戦もおこなったことがあったが、危険(ケガ人が出た)ということでその年のみ。



千曲祭スナップ

1) 一人舞台

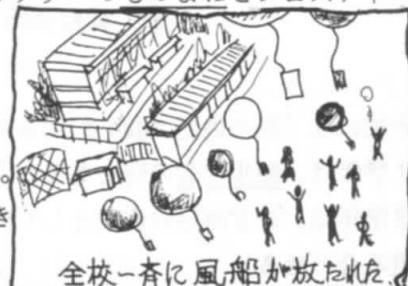
第26回千曲祭の前夜祭(胴日の午後におこなわれる校内)は、27の全クラスが出場して歌、踊り、劇、バンド演奏など。ところで、この年は前年に続いて機械科のK君(生徒)が「ものまね」の一人舞台。

「ウルトラマン太郎」「ゲゲゲの鬼太郎の父」など当時の人気キャラクターのものまねをジェスチャーと大きな声で演じ会場は大爆笑、そして拍手喝采をあげた。

2) 風船上げ

第26回千曲祭から後夜祭(4時30分)に「全校風船上げ」を企画、実施。風船は横浜(昭和62年)へ、また群馬県(昭和63年)、その次の年は栃木県へ届きハガキや手紙が寄せられた。

※ その後は環境汚染の心配ということで中止



3) パラボラアンテナ

クラス展示発表が加わった第27回千曲祭に電子機械科1年(S組)は、ダンボールと石膏で大きなパラボラアンテナを作った。

これが人気で廊下に展示し、30m離れたささやき声も聞き取れるとあって、アンテナの前に立って実験する人が列となった。

※ このパラボラアンテナは**夏休**から作りだしたという。



電子1年の作品は且立った。

4) 万歳に気合をこめて

第26回千曲祭の「ファイナル」に千曲祭副実行委員長のT君がステージの上で、「千曲祭高校バンザイ〜」と、やろうとするのだが「万才」の『バ』が出て来ない。「ヨ〜シ」と拳を突き出し、気合を入れ再び『バン〜』とやろうとしたがまたもや声が出ず。

※ この「万才」の儀式から、その後、生徒会役員の引継・退任式が定着となっていった。

これを繰り返すこと3度、やっと4回目に成功し、「バンザイ」と。

ちなみに後夜祭の終了時間は第25回までは3:00、第26回4:30、第30回は6:00(ファイヤーストームがおこなわれるようになった)第35回は7:00、今年(平成9年)第38回千曲祭の後夜祭は8:00までとなり、今までの最も遅い時間となった。

※ ファイヤーストームがおこなわれてから、生徒会役員の挨拶・セレモニーをやるようになった。」

5) 職員も負けていない

前夜祭(勅使では、星間やってもこう呼ぶ)には例年職員も出演している、「ベートーベンの第九」(喜びの歌をドイツ語で)の合唱、演歌(北酒場)を熱唱(S先生はのりのりって歌いまくった)など。

何と言っても青木村の『義民太鼓』を25人(丸山教頭も参加)の大部隊で出演したのが圧巻であった。湯本、沢野両先生(国語)のジュエツも上手であった。

体育館のステージでは狭すぎて急ぎよ、前ステージを作った(動物を積み上げ、ここには若い先生やFkの女性教員が)、成績(採点)はトップの点数(職員が優勝)となり、文化祭(校内祭)を盛り上げた。

※ 夏休みあけから、夜7:00に青木村の体育館に集合して9:00まで練習を積んだ。勿論ハチマキとハッピ姿である。



【競歩大会】

平成6年は1学年の春の遠足を学年としては競歩大会の形で実施した。学校から工業団地の裏山(須川湖の近くを目指した15km)の一周コース。

平成7年もこのコースで実施。女子がスタートして10分後に男子が出発。西友ストアまでは徒歩で、そこから走る。

コースには1kmごとに「キロ数」を記した看板(標識)をつけた。ところが中間点の1km手前の「あと1kmで中間点」という標識の位置が、少し狂い中間点の手前500mくらいの松の木につけられたため、「ペースが狂ってしまった」と、不評?。

※ これは標識をつける時、その距離を勘でやったために誤ってしまった。

ところで、最後尾を歩いていた建築1年の女子5人は、途中でコースからはずれ、山の中へと迷い込んでしまった。体育の春日先生が最後を車でケガ人、病人を拾うためにゆっくりとコースを進むと、なんと、かなり離れた(コースからはずれていたが偶然発見した)山道をトボトボとさまよう5人を発見して救助した。

※ 車に乗せられた5人は折り返し点に送られ、そこから帰路に着いたが、コースを外れたこと、車に乗ったことで完走(?)はしたものの順位はなかった。

【春の遠足】

本校には「春の遠足」(観は一度)がある、6月初旬に学年や科及びクラスの計画によって実施される。

1学年は、競歩大会の時もあるが、適当に「近郊へ」の遠足。それもバスを使う場合が多い。

2学年は、修学旅行の前段として松代(大本営跡と象山地下壕の見学)と北信方面の見学(工場・企業見学を組み合わせる)

※ 松代は象山地下壕を全クラスが見学、そして松代の城下町を探索するクラスも。

3学年は、最後の遠足だというのでクラスの親睦を目的に、高崎や群馬サファリワールド、富士急ハイランド、軽井沢や黒姫(童話の森)など遠くへと。しかし、遠足の主旨にのっとり「太郎山」登山のクラスもある。年によって学年がまとまって「霧ヶ峰」に行ったこともあった。(平成7年)。

最近「富士急」へは数クラスが。

※ 高速道路の開通により見学(行き先)のはんいが広がった。

ある年の職員会議。「3学年としては、まとまってこの資料のように」と、分厚い綴じ込み(遠足のテキスト)を取り出したO先生が「中山道こと、木曾路(妻籠と馬込)の歴史大研究に行きます」と、発言・説明、拍手が起きた。※ 今年3年生が「木曾路」へ数クラスが行った。



3学年の遠足は!
と、大井先生(社).



【死体がいっぱい】

冬に備えて、各教室(実習室、研究室など)にストーブが入る。さて、そのストーブの煙突は教室や研究室によっては壁にエントツを接続する訳だが、どうしたのかその教室は去年は煙突の吸い込みが悪かった。

そこでこの機会に掃除・点検をしようと、煙突の接続部分を引き抜いた。その瞬間、腰を抜かす大事件が。

トドロー と煙突の穴から『ひからびた鳥、雀の大群?』が出て来た。

「ギャー、なんとこんなに死体が!」と、X先生はたじたじしながら叫んだ。

「先生、焦らない、驚かない、この場合は死体というより、“死骸”というべきです」

と、一緒に掃除をしていた女子生徒の方がクールであった。

※ ひからびた鳥が12匹も。どこの教室でもこんな経験をしているのでは。



【水量の計算】

平成9年8月の夏休みに生徒会書記局は、連日登校した。千曲祭の全校企画「アキカン(大絵)」のその集まった缶を水洗いをするのだが、これが苛酷な、ものすごい重労働・※作業であった。

つまり、上田県営球場から届けられたビニール20袋から、取り出して いざ洗おう としたのだが、真夏の太陽に照らされた袋の中のカンはずい異臭を放つのである。それにタバコの吸い殻が混入していて、全くひどい状態。

この作業を5日間、6,000個もやったのである。手ぬぐいで鼻と口をふさいだり、袋の口を開いて、ガスと臭気を追い出して(たいては嫌いな)1時間後に洗い出しを開始したりと工夫もむなしく、匂いが体中に染み付いてしまった。

腰は痛い、夕方には手は水で ふやけてしまひ、カンを見るのもイヤになったと。

そのふやけた手の話から、「と、いうことは、一日、7時間、で5日間だその水量はどのくらいになるのかな?」

「おおよそ、50㎡(日)で5日間だ。こりゃものすごい水量だ、水代はいったいいくらだ?」

と、顧問の某先生はそっちの費用の計算に夢中であった。

※ 作業は地獄のようだったと。洗った7キカンはのべ13,000個。



【離任式にて】



謎の言葉を...

【離任式の謎】

毎年3月になると離任式で多くの先生方とお別れで、寂しい限りである。先生方はお別れの挨拶に万感の思いを込めて、諺やオリジナルの言葉で、惜別歌や校歌を歌うことも。英語でスピーチ、また漢詩を詠ずることもある。

ところで平成●年(はつきり書く見当がつくので伏せるが)、某先生はステージの中央で声高らかに「若い人(娘)にむやみに触れないこと」と一言のみの挨拶であった。

何のことやら、自問なのか、はたまた全校への警告なのか、今だに謎である。●年以来、語りぐさとなっている。

カンボジアの子供たちに笑顔を

上田千曲高生支援訴え

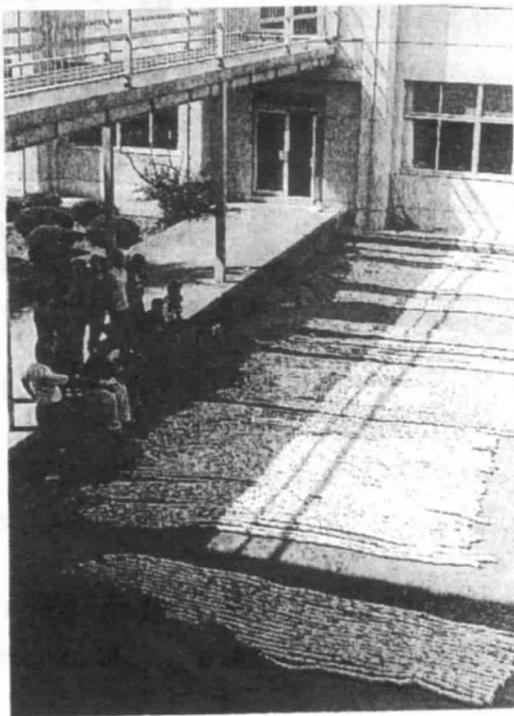
来月文化祭で展示発表へ

上田千曲高校(上田市)の生徒たちが「カンボジアの子供たちの笑顔を見た」との思いを胸に、九月六、七日に開く文化祭でカンボジアへの支援を訴える全校企画の準備に励んでいる。

生徒会顧問の相原文哉教諭が、カンボジアで井戸を掘るなどの活動をしている奈良・東大寺の僧りよ、内田弘慈さんを知ったのがきっかけ。内田さんを通じてカンボジアに絵本などを届けてはどうかと生徒会に提案、カンボジアの実情紹介と支援を全校企画にすることが決まった。

文化祭当日は、カンボジアの気候風土や地雷に悩む現状などをパネルや写真で紹介し、ジユースなどの空き缶で作った縦四角、横二

十五分の壁画で支援を訴えたい。絵本や衣類、タオルなどの支援物資受け付け窓口や募金箱を設けるほか、バザーなどの収益金を現地の学校建設資金に充てる。担当の吉田千香さん「二年は「速い存在だったカンボジアを、高校生でも応援できる」と実感しています。たくさんの方の力を集めたい」と話す。古畑戸寿母さん「二年は「子供たちが少しでも幸せを感じてくれて、応援の成果が学校として残ればうれしい」と期待している。支援物資は生徒会で受け付ける。



制作中のカンボジア支援を訴える空き缶による壁画

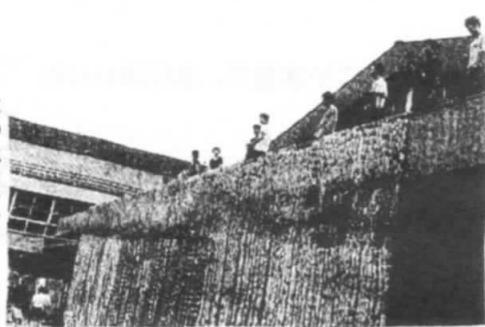
※カンボジア・コーナーは、三階中央廊下に、81ページに(当日9/6の様子か)。

東信ジャーナル

(1) 1997年(平成9年)9月9日(火曜日)

カンボジア 救済テーマに 上田千曲高生

上田市の上田千曲高校は、六日と七日に行なった文化祭「第三十八回千曲祭」で、全校生徒が「カンボジアの子供たちへの救済活動」をテーマに国際的な支



空き缶で作ったカンボジア支援の絵文字

援に取り組んだ。

この結果、市民に呼び掛けて集まったタオルや衣類によるバザーと、ポップコーンやわたあめなど屋台の売上げ金、募金活動などで約十八万円の支援金を集めるなど大きな成果をあげた。

第二体育館前には支援活動を目に見える形にしようと、全校生徒が持ち寄った空き缶約一万一千個を色別に針金でつなげて吊した巨大な絵文字(高さ四m、横二十五m)を制作。同校と同国を「LOVE」の文字でむすんだ構図に仕上げた。

また、カンボジアコーナーの展示発表では、パネルやカラー写真で同国の政治情勢や地雷の恐怖を訴え、訪れた人たちに絵本やえんぴつなどの寄付も呼び掛けた。

この取り組みは、今年八月から始まったので、カンボジアで井戸を掘りながら子供たちへ教育資金の支援をボランティアでしている拓本美術家で奈良県の東大寺の僧侶、内田弘慈さんを知ったことがきっかけ。

内田さんの生き方に感銘して企画したという生徒会顧問の相原文哉教諭(51)は「大きなテーマを持ったことで生徒たちが生き生きと動いていたし、やり遂げたことで自信もつかんだようだ」と生徒の頑張りを目を細めていた。

週刊上田、上田ケーブルテレビにも取りあげられ、反響が大きかった。

「写真に「当日の様子」の記事」

【売れ先は職員】

ここ数年、千曲祭では建築コース発表の一部として、清水、岩崎両先生の指導の下に「木造パズル」を製作・販売(?)している。

生き残りパズル(35本の棒をルールにしたがって1本にすればOK)と、「特級建築士パズル」(棒で建物の形を設計する)がある。

小学生はもちろん高校生(展示販売している係の生徒も夢中でやっている)に人気、そこへ見学・巡視(?)に来た先生方ものめり込んでしまった。

買ったお客としては 本校の職員が一番多かった。

X先生など、毎年買ってきてくださる。そこで「同じものを、いつもありがとうございます」と建築の先生がお礼。すると、X先生は「ええ、なくしてしまうもので」と。

Y先生の場合、「孫へのお土産に」

Z先生は「子供に取られてしまったから」と。

※ 小宮山先生(数学)など、机の上にいつも用意(?)されていた……。

ちなみに「生き残りパズル」では、1本となり成功したのは I先生だけ(?), A先生などいくらチャレンジしても5本も残っている。しかし、「特級建築士パズル」の一級、特級の問題を考えたのはA先生であると。



先生方もはまり込んだ



【なんて歌うの】

本校の『校歌』の2番には「烏帽子岳の山の磐根 延ふ如」とある。1番はすらすらと歌えるのだが、この2番となると歌詞をよく覚えていない。

さて、この「烏帽子岳山 の磐根～」の部分だが、歌う時にはどうするのであろうか？

「言葉の数が1番と合わない」と、飯島、井原、相原の3先生は悩み考えた。広い額を寄せ集めて考えた結果、「60周年記念に作ったレコードで聴けば解決する」と。さすが3人寄れば文殊の知恵だ一件落着きそうだったが、最近ではレコードをかけられるプレーヤーがないではないか。

三、	青	のど	然	【	こ	学	信	安	こ
広	み	かな	遠	烏	と	び	州	く	の
き	た	な	き	帽	だ	得	の	あ	国
胸	り	れ	し	子	だ	て	青	れ	は
寛	小	師	き	岳	て	聡	年	ほ	ほ
げ	果	の	わ	の	明	に	は	ろ	ぼ
て		君	が	山				ぼ	さ
		よ	文	の	正			さ	し
			化	盤	し			し	
			興	根	さ				
			し	延	よ				
			な	ふ					
			む	如					

↑問題のところ？

【時間切れ】

今年の芸術鑑賞(7月に難)は「お諏訪太鼓」であった、市民会館にて予定の時間で始まり、途中に、「太鼓教室」と称して、各クラス代表が出て学年順に練習(熾々々)をし、初級免許を与えるという試みであった。

ところがこれが意外と時間がかかってしまい、諏訪太鼓の十八番の演奏が「残り5分」となってしまった。

最前列に陣取っていたA先生、「太鼓教室」が始まった時点で「これは時間切れになる(計画がよくない、失敗する)」と予言していた。

案の定、アウトだった。



大口さんは……

【同じ教室へ】

本校は広くて建物も多く、実習棟まで入ると複雑であり、とにかく校舎数が多い。場所(館)を覚えるのに苦勞する。しかしこの話は普通教科の事件である(ホームルーム棟が授業の範囲であるはず)

1998年7月のこと(7月となると機嫌、学校にも慣れたはず) 国語科U先生は1時間目にK科の1年の授業に。

そして5時間目にまたもや現れた、驚いたのは生徒の方。

もっとも当の先生は間違いとは気が付かず(ここで生徒の反応から気が付いてもよさそうなんだが)、教卓に着くや、出席を取り出して、全く違うクラスの氏名を呼び出したのである。

ここで生徒は、またもやびっくり。

(その後授業になったかどうか、記録には残っていないので不明)



修学旅行悲話

平成5年の九州修学旅行、川上峡のホテルの浴場は大きく風情があった。ところで女子の浴槽とは大きな岩(壁のように)で仕切られていた。この岩でケガをした兵(つゆ)がいる。

つまり、女子の浴槽をノゾキ見ようと高さ3.5mものこの岩壁をよじ登りを試みたが失敗して、転落したのであった。



団結力の結果

昭和61年7月14、15日一年の夏合宿で菅平に行った。商業、家政科は「菅平高原観光ホテル」。電気、機械建築科は別の「唐澤館」に泊まった。

雨天のため宿舎の大広間を使って〇×クイズをやった。

わたしたちのクラスは団結力が強すぎてみんなが同じ答えの方に動いてしまい結局、最後まで残る者はいなかった。

村田由香(昭和64年、商業卒)

あ の こ ろ

- 昭和37年だったと思う、就職試験を兼ねて「全日本学生科学賞(長野県塩田平の湖成層の研究)」の表彰式に出席のため、家政科の女子4人で上京。

※ 82~83p参照

そこで「13人のメダル」をもらってきた。今でもそのメンバーをはっきり覚えている。

————— 山岸猪久馬先生(元教員) 第38千歳の直前に救して。

開墾第一で、小牧山へ毎日足を運んで作物を作った。卒業の少し前から勉強をただけ。学校は門をくぐっただけで感じなので、もう一度勉強をやりたい。

————— 戸田愛子(昭和23年卒)



だっ広く、教室の前がすぐ庭だった。今の上田一中から椅子や机をかついで運んだ。

【開墾に汗を流した】

————— 小林貞義(昭和23年卒)

【これは驚き】

小林ポッポちゃんこと、俊一先生指導下の陸上班に「凄い選手」がいた。佐々木茂雄(昭和60年、職科)はハンマー投げて県記録保持者。全国大会にも出場したツワモノ(兵)。

3年生の四月、身体測定で『背筋力』をやったところ、あまりのその力によって機械が壊れてしまった。



【愛鳥週間 “2話”】

〈その1〉

平成3年、建築科の研究室へ、なにをどう間違ったのか一匹(羽)のインコーが迷い混んで来た(この室は鬼より怖いI先生がいるの知らなかったのであろう)、天井近くをうろうろと飛んでいた。

I先生とS先生は捕まえようと、“魚釣りの網”と“ホウキ”で追い回したが、もう少しのところまで追い詰めるのだが逃げられてしまう。

そこへA先生がちょうど来た。この捕物騒動を見て、

「私こと、“鳥とり”の名人(どうも、かつての“コウモリをたたき落とした糞”を自分では指しているらしいが)にお任せ下さい」と、言うや否や素手でいとも簡単に捕まえてしまった。

この「インコー」はS先生宅で飼われている。



〈その2〉

平成6年、機械科の実習の時間の事である。北側の木にすみついたモズの巣から、1羽のヒナ鳥が地上に落ちて、ヒーヒーと鳴いていた。そこで3年の男子数人とO先生がこの赤ちゃんを助けようと、善行(?)にたちあがった。

長い竿の先に小さな袋状の物を作り、そこへヒナ鳥を入れて高い木の上の巣に戻してやろうという訳である。

巣は枝の間にあってねらいが定まりにくい。

つまり近くまで届くのだが、今一步のところまで枝が邪魔になり、なかなか上手には巣に届かない。

※選手交替などして数回試みたところ、どうにか成功。おもわず拍手が出た。

※選手交替とは、「お前は下手でだめ、おれが代わろう」「おれに任せろ」と入れ替わった次第。



あ の こ ろ

昭和8年、テニスは県大会で優勝したが、この年バスケットなど全種目に優勝したため、明治神宮大会に出場する予算がなくなり、行けなかった。

当時の『新聞』に「県下女子中等学校に燦然と輝く、ナンバーワンの位置を確保した〈上田実科高女は至宝、柳沢なみ子、下村久江さんらは〉神宮大会へのに出場権を得ながら、参加出来ずあの真っ黒な顔を無念の涙でぬらした…」と。

柳沢なみ子、下村久江(昭和8年卒)

乙んなスポーツ(全盛)時代

【実科高女時代のスポーツ】『高校風土記』(毎日新聞)より

バスケットボール、刈間今朝雄先生のコーチでメキメキ上達した。昭和6年10月、上田高女(現上田染谷高)を破り、県大会で優勝。そして県の代表として「第6回明治神宮大会(現国体)」に出場し、3回戦で優勝した木更津高女に惜敗してしまっただが、あの国体出場の感激は今でも忘れられない。



浦原(武井)愛子(昭和6年卒)、丸山みち(昭和8年卒)



「愛天真」(出原谷小波)の額は
今も校長室にある。

教育方針は厳しかった
(元・同校教諭 片桐 昭)

私はマンツーマン方式で自分のポジションを身に付ける練習を重ねた。あの時、失敗したタマは今でも覚えている、また、お揃いのブルマーを自分達 でつくったものですヨ。
安田きみ子(昭和5年卒)

松本女子職業学校(現松本美々ヶ丘高)といつも優勝争いをした。

「全信州」と「信越女子大会」で昭和7年まで3年連続優勝。このときの優勝旗を昭和18年に市立高女になった時に

「校旗」としたのです。

越(飯島)すみ子(昭和8年卒)

テニスを遅くまでやった。日華事変で毎日兵隊さんを駅へ送って行った。敵国だから英語はやめた。斎藤校長が「神社仏閣」の話をしてくれた。

今になってみれば、文化財に興味を持てたのは先生のお陰だと思います。

小岩井正志(昭和7年卒)

あ の こ ろ

「千曲の“七不思議”」と言い、「校庭の中央の池で兵隊の足音が聞こえる」と。広い敷地にポツンと校舎があって寂しかった。

バス停への近道にと畑の中を横切ってしかられた。

(商業)

笠井(中村)峯子(昭和35年卒)

ハンドボール班の女子は、2年前に出来たばかりです。ルールも知らない私たちがハンドボールと言うスポーツをやるのはとても困難でした。しかし運動(班活動)をやったことでいろんなことを得ました。千曲祭を手伝うということで、書記局に加えてもらいました、毎日とても大変でしたが、とても楽しい充実した学校生活でした。
※ 龍岡の「助っ人」としておおい活躍した。滝沢美紀(昭和162年、建築卒)

南北教室棟間の中庭



千曲祭で「中庭ステージ」に
したこともあった。

テニスで 桜井もと(昭和10年卒)、下条小雪(昭和14年卒) さんらと、上田駅まで出迎えを受けてとてもうれしかった。

4月から9月まで4キロ以内は歩けということで練習を終えて帰ると暗くなり、母が秋和の田んぼまで迎えに来てくれていたのが忘れられない。

沓掛 久(昭和9年卒)

バスケットでがんばった。宮坂先生が長野高女(現長野西高)へ転勤、その後刈間先生の指導を受けて、その長野高女と「県大会」での決勝戦では激戦となり、同点。

土壇場でのシュートが決まった(勝ったと思った)がその時はタイムオーバー、あんな残念の事はなかった。

宮原つね(昭和9年卒)、柳沢(武重)モト(昭和10年卒)、土屋(水出)つや(昭和11年卒)

練習は校庭で、まず水を撒きホコリを鎮めてから先輩を迎えた。失敗をしたときは近くの護国神社へ行って、反省し、髪を切った。

だんだん短くなってしまい三つ編みにはできなかった。

野村信子(昭和13年卒)



バスケットの練習のあと、学校の前のモチ店で豆入りの三角モチ、羽二重モチなど買って下級生 を励ました。

丸山みち、酒井百合子(昭和8年卒)

バスケットで県代表として神宮大会(現国体)に行こうとしたが、後援会もなく資金がなくて行けなかった。

野村信子(昭和13年卒)

バレーボールでも長野師範(鴎巣寮)で開かれた県大会に優勝したが、やはり費用がなく全国大会をあきらめざるをえなかった。卒業生がユニホームをくれ、旅費も父母が負担するというので、行きたかったが、山崎校長が許可してくれなかった。みんなで刈間先生の下宿へ詰め掛けワーワー泣いた。

山岸(今井)ハツノ(昭和10年卒)



京都の学校を受験した時、「スポーツは好きか」と聞かれたことを忘れられない。バレーボールで練習が好きだった、顔は真っ黒でおなかが白く、まるで黒人(?)のようだと笑われた。練習の合間に友達が差し入れてくれた果物をコッソリ食べて叱られた。

東川つきよ(昭和11年卒)

あ の こ ろ

機械に進みたかったが建築に回されてしまった、もつとも機械に使われなくてよかったと言える。

堀場勝竜(昭和33年、昭和34年)

千曲高 陸上黄金時代

県 I H 優勝者氏名

昭和36年	浪	淑	恵	槍	投
37年	山	村	則	三	段 跳
38年	春	原	春	円	盤 投
〃	清	水		三	段 跳
39年	清	水			〃
41年	成	沢	恒	走	高 跳
42年	飯	島	久	砲	丸 投
43年	浪		純	走	高 跳
44年	浪		純	五	種 競 技
〃	浪		純		100MH
45年	浪		純	五	種 競 技
〃	浪		純	走	高 跳
46年	滝	沢	由		100M
47年	滝	沢	由		100M
〃	山	崎	春	円	盤 投
昭和49年	沓	掛	英	ハ	ン マ - 投
〃	水	野	秀	槍	投
51年	高	木		棒	高 跳



昭和53年長野国体成年女子
走り幅跳び 6m.28
大会新で2連勝
浪選手

北信越大会優勝者



昭和40年	赤	地	幸	子	円	盤	投	松本大会
47年	滝	沢	由	紀	夫		100M	金沢大会
〃	滝	沢	由	紀	夫		200M	金沢大会

北信越高等学校選手権大会

昭和38年	男子総合得点	第4位	22点
	フィールドの部	優勝	22点
39年	駅伝大会	第6位	2時間24分04秒
	(茂木秀二 清水浩 関忠正 小沢芳昭 池田竹男) 長井勉 須田昭夫		
46年	滝沢由紀夫	100M 200M	2位
47年	滝沢由紀夫	100M 200M	1位
	山崎春美	円盤投	5位
49年	沓掛英一	ハンマー投	5位



あ の こ ろ

【陸上競技班の記録】

我ら陸上班は、毎日練習をしていましたが、いざ大会になるといまいち成績がよくありませんでした。しかし、高橋成海(平成2年製)一人が良い成績を残してくれました。

5.6年の活動 (生徒会誌『空』第7号より)

国民体育大会参加者氏名

昭和36年	泉	淑	恵	槍	投	6位入賞	秋田大会
44年	泉	純	江		100MH		長崎大会
45年	泉	純	江		100MH		岩手大会
46年	滝	沢	由紀夫		100M		和歌山大会
47年	滝	沢	由紀夫		100M		鹿児島大会
〃	山	崎	春美	円	盤投		鹿児島大会



全国高等学校大会参加者

昭和35年	宮	崎	洋	吉	5.000M		神戸大会
〃	小	池	洋	子	砲丸投		神戸大会
36年	泉	淑	恵	槍	投		静岡大会
37年	山	村	則	雄	三段跳	200MH	大分大会
〃	坂	田	八重子	円	盤投		大分大会
38年	春	原	泰	生	円盤・砲丸投		新潟大会
〃	西	藤	友	和	走高跳		新潟大会
〃	清	水	涉	三	段跳		新潟大会
39年	清	水	涉	三	段跳	9位	大阪大会
〃				走	巾跳		大阪大会
〃	赤	地	幸	子	円盤投		大阪大会
41年	今	井	京	子	円盤投		青森大会
42年	飯	島	久	雄	砲丸投		福井大会
〃	小	林	孝	子	円盤投		福井大会
43年	泉	純	江	走	高跳		広島大会
45年	泉	純	江	五種競技	3位入賞		和歌山大会
〃	清	水	敬	子	槍	投	和歌山大会
46年	滝	沢	由紀夫	100M	200M		徳島大会
47年	滝	沢	由紀夫	100M	200M		山形大会
〃	山	崎	春美	円	盤投		山形大会
49年	沓	掛	英	一	ハンマー投		福岡大会



あ の こ ろ

【演劇班の活動】

私達、演劇班の昭和61年の活動は、新入生勧誘の発表。何と言っても千曲祭で『**新釈・源氏物語り**』を発表したこと。

また「東信演劇連盟」に初めて加入し、11月の発表会には千曲祭と同じもの『**新釈・源氏物語り**』を発表しました。

他にも昨年行った「施設訪問」を回数を増やしたり、他校の作品を見ての勉強にと、頑張ってきたつもりです。

生徒会誌『空』第7号より

〔県高等学校選手権大会成績〕



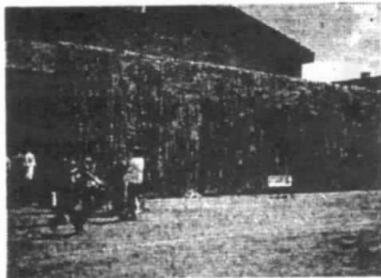
昭和37年	男子総合得点	第4位	23点
38年	〃	優勝	41点
39年	駅伝大会	第4位	2時間24分04秒
42年	男子総合得点	第5位	18点
44年	女子総合得点	第4位	18点
45年	〃	第3位	22点
46年	男子総合得点	第4位	28点
47年	〃	第5位	26点
48年	〃	第5位	23点
49年	〃	第3位	29点
50年	〃		0点
51年	〃		8点

『陸上競技部記録史』上田千曲高・陸上競技部OG・OG会(昭和51年)より

あ の こ ろ

(平成9年)9月27日(土曜日)第466号

週刊上田



創立80周年を迎えた上田千曲高校。80年の歩みをまとめた展示をはじめ、各学科の個性が際立つ内容が訪れた人の目を引きました。建築班は善光寺を建築学の視点からとらえ、ネジレ柱や山門の額縁効果をわかりやすく絵で解説。また各学年から優秀作5点を選び、製図コンクールも行いました。

第38回千曲祭

上田千曲高校

'97 学園祭より

9月6・7日

電子科2年による「沖繩」

は、模造紙33枚に地図や年表も盛りこんだ力作。保健委員会が調べた「薬物乱用の恐怖」とともに見ごたえのある発表となりました。

生徒会が中心になって取り組んだカンボジア支援運動は、新聞などで呼びかけたところ大量の衣類が寄せられ、カンボジアの実状をていねいにまとめた展示にも関心が集まっていました。

建桐会

同窓会報 第4号 S48号より

建桐会が発足してから、丁度丸二年たちました。

同じ千曲の建築科を卒業したという事で、上田及び小県の人達が集って、互いの親睦を深め、又、これによって母校の発展に少しでも寄与することを目的として一〇〇名近い建築の仕事に従事している方々で、会を結成したわけです。

当時、発起人で、現、建桐会の副会長をしておられる武田さん始め久保田さん、上野さん、等の方々の非常な御骨折りで、一年有余を費して一昨年七月末、結成をみたのであります。



〃肩のこらない気楽な集りにしよう。〃古い人でも新しい人でもすぐうちとけて話の出来る様な会にしよう。〃技術的な交換も大いにやろう。等々、と、非常に盛り沢山のスローガンを掲げてやっています。

本年度の総会も四月上旬、多勢集まって盛會りに行われ、空調関係の中央の権威ある大学教授の講演等、質的に高いレベルも目指している次第であります。

私共、建築の仕事も、急激な高度社会成長にともなう、煩雑な一途をたどり、住環境は今あらゆる角度から、大きな、そして深刻な社会問題となっております。

この様な社会に、日々、仕事に追いまわられている私共にとって、この、建桐会の存在は、〃技術の交換や、情報の提供〃の場もさることながら、親睦を通じて得られる、大きな心の寄り所となっております。

野 口 晶 巳

(昭和三十四年建築科卒)

県下高校めぐり

伝統は生きてる

題字は矢沢 千里校長

前身は女子実業校
馬蹄蹄の旗印で知られる千曲川が、美しい曲線を描き、ふし銀のように輝く流れのほとり

り変わり、戦後男子校の上田商工学校と学制改革で合併、男女共学の上田市立高等専修学校から創立移管になるまで、幾多の曲折をかきわけてきた。

実習教育に重点

上田女子実業補習学校は地蔵社の発展で、女子の徳性を養

県下一広大な敷き地

伝46年の産業人と家庭婦人育成

むかしからの敷き地が、戦後から日支事案へと戦線は拡大

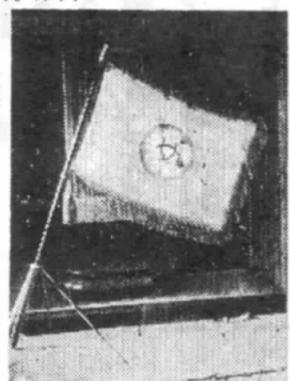
上田千曲高校



りに敷き地を有する校舎。六万三千四百二平方メートルの敷き地の広さは、県下第一。輪廻の姿(そな)が、静寂な環境にまつまれた創立上田千曲高校は、いまも四十年の伝統を受けついで、時代の要請に応じた産業人を、そして、家庭婦人を育成している。

本校の生い立ちは大正四年四月、上田市新町(当時上田町)の上田女子高等専修小学校に併設された町立上田女子実業補習学校に始まり、いよいよ上田実科高女、市立上田高女と移

- ◇上田千曲高校沿革◇
- 大6.4 町立上田女子実業補習学校創立、上田女子専修小学校に併設される
 - # 8.5 上田市制施行により市立上田女子実業補習学校と改称
 - 大12.4 校友会設立
 - 昭18.4 中等学校令により校名を上田市立高等専修学校と改称
 - # 22.5 全校上田市中之条旧雁谷飛行場跡に移転、生徒総数467人
 - # 17.4 市の要望により上田市立商工学校設立、上田大原簿記学校校舎を使用
 - # 20.4 上田工業学校と改称
 - # 21.4 校名をさらに変更、上田商工学校となる
 - # 24.1 P.T.A創立、同4月県に移管され県立上田千曲高等学校となり、商業・建築・機械・家庭・普通5課程を置き、男女共学の総合高校となる
 - # 28.3 本館・体育館兼講堂・図書館・同窓会館の増改築と実習諸工場の諸設備が完工
 - # 28.10 完全県移管、産業教育振興法により機械・家庭の施設補足する
 - # 31.11 創立40周年記念式典挙行
 - # 36.4 産振法により機械科原動機実験室を新築、水力総合実験装置を新設
 - # 37.4 建築科施工実習室新築

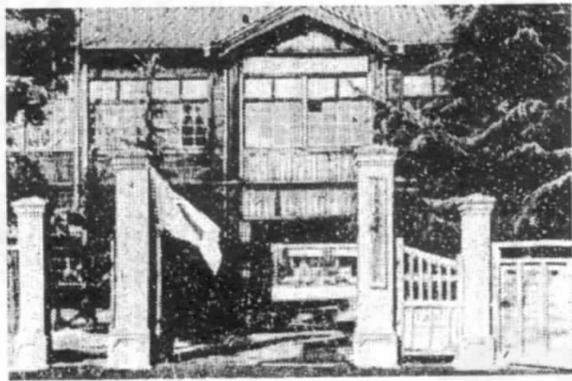


市立高女時代の校旗



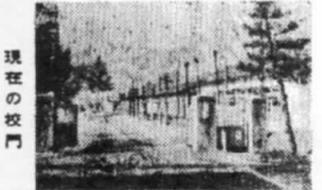
町立初代の柳原静江校長

上田大原簿記学校(創立明治十九年、東京大原簿記学校分校として発足、校長故西沢庄太郎氏、校長代理故西沢一氏、卒業生四百有餘)は一年間に入学する者本科二百、別科合わせて



上田市立商工学校の正門

五百人を越える状況であったが、校長代理西沢一氏は市当局の公立学校新設の機運と時の流れを認識し、この学校を母体として、市立の商工学校が設置されるなら喜んで校舎提供のいっさいを寄付する「むわ市の文教委員長小林九十九(つぐも)氏らに申し入れた。財政難の市当局は大喜び、そして翌年(昭和十七年四月)を期して市立商工学校が材木町に設置され、専修



現在の校門

S. 38. 2. 19

サンケイ新聞

県下高校めぐり

伝統は生きてゐる

題子は 矢沢 千里校長・筆



高野量文校長

廃校か存置か
六三制の学制改革が行なわれ

上田千曲高校



大正十二年当時の上田市には市立女学校として女子は本校男子は市の強い要望で実業学校舎として設けられた市立商工学校があった。学制改革により、市は新学制準備協議会を組織し、学校の整備に取りかかり、(S)二校を統合して市立高学校として研究して、しかり新たに中学校を三校

(一)中、(二)中、(三)中(も)建設しなければならぬと定めたが、財政的には維持して維持してゆけるか、義務教育の新制中学校でかまわぬか、自費でかまわぬか、自費と成算がなかった。そのため市立高学校の存置にはひびきとなり、

大格納庫で勉強

合併後の殺風景な飛行場に

酒造的でこの協議会の最終結論をたす会議には廃校とする意見が圧倒的であった。そして同年九月、あわや廃校

二校の統合なる



上商時代の校舎

合併後の敷地は国鉄上田駅から西方二の中之空地、旧熊谷飛行学校上田分校跡と定めたが、こゝはバラックの兵舎と格納庫だけで、とても授業などにはまともな校舎がなかった。女子館の中央には二中があり、二中も市の公舎で一部授業をしてきたからむね女子の一部(専攻科一学級、補習正教諭担任)は飛行場兵舎に移転、授業を開始した。こゝは学校としてより編入を受けた種物が存在している戦場そのもの殺風景なものであった。

大格納庫の教室

このまめかぶられた両校の合併は創立準備を前提として実現男女共学の市立上田立高高等学校に昇格、初代校長事務取り扱いに井上初市市長が就任した。校舎はさしあたり合併前と同様、女子は中学校、現清明小、男子は東校(現一中)だった。



校舎だった大格納庫

市市立から県立に移管になるというわけで、名称は上田千曲高等学校と改称、商業、建築、機械、家庭、普通科の五課程の総合校となった。しかし校舎は既の建物のより市で建てなければならなかったが、異は蓋せられたり、改築され、市は蓋せられたり、改築された。そして移管の間

◇ 歴代校長と在職期間 ◇

大6.4 ~	9.3	(町立上田女子実業補習学校)	柳原 静江 (兼)
# 9.4 ~	13.5	(県上田女子実業補習学校)	小早川 源 (#)
# 13.6 ~	昭7.3	(同 上)	斎藤 節 (#)
昭7.4 ~	16.3	(同 上)	山崎 彌生 (#)
# 16.4 ~	20.11	(県上田実科高等女学校、県上田市立高等女学校)	別府 明来 (#)
# 20.12 ~	22.5	(長野県上田市立高等女学校)	一志 一郎
# 17.4 ~	17.8	(長野県上田市立商工学校)	浅井 敬吾 (事務取扱)
# 17.9 ~	22.5	(同上、県上田工業学校、県上田商工学校)	藤川 始
# 22.6 ~	23.3	(県上田商工学校)	綿林 光雄
# 23.4 ~	23.9	(県上田市立高等女学校)	井上 柳梧 (事務取扱)
# 23.10 ~	32.3	(同上、県上田千曲高等女学校)	高野 豊文
# 32.4 ~	35.3	(県上田千曲高等女学校)	大豊 英雄
# 35.4 ~	37.3	(同 上)	豊島 敏夫
# 37.4 ~	現在	(同 上)	矢沢 千里

千曲高にピストル
飛行機跡の格納庫校舎時代に、この遺物は廃棄されたから全面ははじめていたが、それがその

県下高校めぐり

伝統は生きてゐる

稲平 矢尺
千里校長・筆

⑬

つてなれない作業で苦しい生活を体験した。
とくに東京方面から疎開して来た四十名ほどの生徒たちは、農具一つ使ったこともなく、

へ出動した。日登工場では落下入用生地の糸をこいていたので、毎日栄養補給をこらしてひとにぎりすつきの「サナギ」を食せさせられ、また薄のサナギ

園の基礎は、興立修習当時の高野登文校長と大真進教頭（現松本市）の構想によるもので、昭和十八年完全開校を旨とし、校内の全面的整備に職員、生徒が一体となって勤務奉仕した努力の結果であった。毎日校舎（トラス）すつ出動して千

「戦時要綱」によつてつくられた普通科一年生のとき、機械科に専攻、勤労動員で三重製作所へつた。戦時要綱の機銃発射機銃の製作に従事。借用工にまじりながら、戦前に完結して用いた古グラブを、鋸、修理工とでメンテナンスした。ゲートの巻き方が悪いとか、種子のかぶり方が悪いといふ簡単なことで上級生になられたものだが、この上級生の卒業するまで、みなこよつてたかつかか

終戦直後の昭和二十二年に生徒たちの強い要望、野球部が創設された。当時は戦後の物資不足、野球用具もしょうぶもないわけがなく、戦前に完結して用いた古グラブを、鋸、修理工とでメンテナンスした。ゲートの巻き方が悪いとか、種子のかぶり方が悪いといふ簡単なことで上級生になられたものだが、この上級生の卒業するまで、みなこよつてたかつかか

地が広い川原のため、キリは成育が早く、しかも高樹に引き寄せられる。そのうえ上田城主松平藩の邸所であり、本校の校舎とされていから。管理は生徒一人一本を目標として、昭和三十一年春、十年か十五年後に予定されている新校舎の建設単位に分担し、育成に当たることになった。毎年卒業生の分

上田千曲高校 ⑬



終戦直後に野球部

キリで新校舎建設資金

勤労動員で援農

大半は戦時が拡大されるにつれてこの地でも人全不食となり、生徒たちは六月と十月の収穫期に親戚に出動、また原野の開墾も割り当てられ、釜川湖畔の原野二つを開墾したのは昭和十年の秋だった。約一か月毎日山に登り、重い扇風を運ぶ

のうえ食糧不足で栄養失調におちいりつらかった。また重体みを利用して難井沢産の飯島三氏（上田市）所有の別荘地約一畝の野を開墾、食糧増産の一助をたすなとペンギンわに持ち帰らされた。

のにおいが衣服や体中にしみみ、生徒が電車に乗ると乗客が「へんたい」とよけるほどだった。だが生徒たちは「わくわくしたちは学生運動だ」といふ誇りを持っていた。これは卒業生たちにとつて生涯忘れられない思い出だ。

四十年経たぬ事業のひととして、キリを通し本校の協力性と生物産産の伝精神がつかわれてきた。生徒たちは自分たちの手で苦心して育ってきたキリが成長、新校舎建設資金の一助となる日（一日）も早いことを卒業生（ともに）持っている。

兵器の増産にも

さらに戦争がはげしくなると、食糧増産から兵器増産にたい身取として動員された。まず本科二年生は十九年八月から富士電機、山洋電機、日産工場（現信越電機）紙工場など

卒業生たちの回想

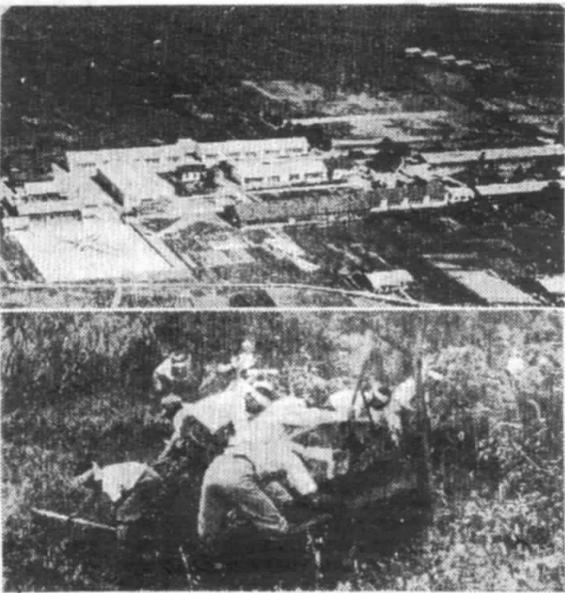
当時の思い出を本科二回生の上田市、中野農産社専務野野雄、副社長山田國司、同ラジオ販売一夫の三氏はつづつ

屋外道路の石運び

現校舎の配置、あるいは庭

キリ千本植樹

その年の秋、高野校長はじめ職員生徒は毎日放課後約一時間をおいて、石ころだらけの荒地を削りだし、開墾化道路からもらったキリ千本を植えたのである。キリを選んだのは校



⑬空から見た現在の校舎と⑭は経井沢で原野を開墾する生徒たち

県下高校めぐり

伝統は生きてゐる

題字は矢沢 千重校長・筆

教壇で倒れる

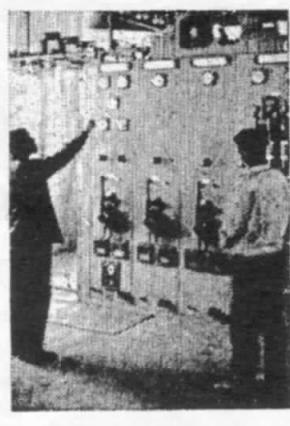
おむの 多くの先生もどくに思ひ出 人佐田きみ子(上田市)は

目を凝らした。先生が倒れた とき授業を受けていた生徒の

「先生はつねに、私は教育者 一年間を在校した遠藤淳教諭

生(現東京自衛隊研究所助 務)だ。この先生は上田商工学

校のころ、北大出身で物理、数



理科の教室

上田千曲高校



スポーツの黄金時代

“学校開放”いまや名物に

のまわりになってしまった。教 校の池田正三現教諭、二十年の

「先生はつねに、私は教育者 一年間を在校した遠藤淳教諭

このため手足を何處もつたが

スポーツ振興に力

スポーツの育ての親に宮坂仁 吾先生(現上田高校定時制主

バザーもさかん

校友会の年間最大の行事はバ



明治神宮大会出場当時のバスケットチーム

バスケットボール、陸球、陸上 競技などあらゆる面でめざまし

「創立から今日まで、本校は 実業学校として地産地消人育成

実業当時の有川仙助教諭もそ の一人だ。先生昭和四年七月



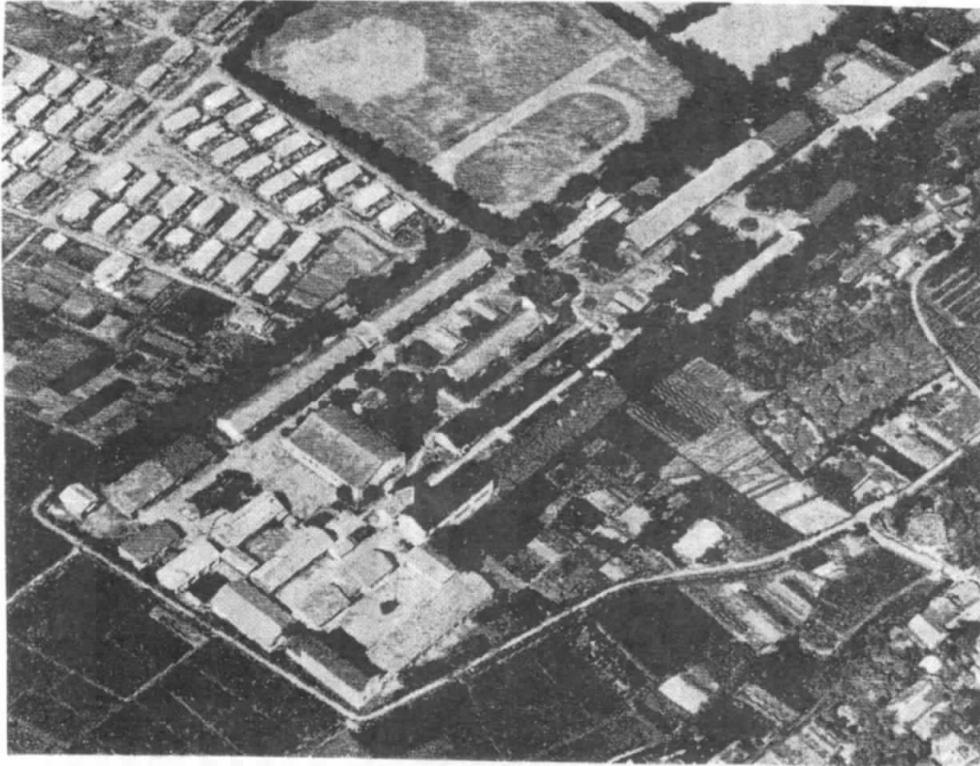
「先生はつねに、私は教育者 一年間を在校した遠藤淳教諭

「創立から今日まで、本校は 実業学校として地産地消人育成

「創立から今日まで、本校は 実業学校として地産地消人育成

上田千曲 高等学校の歩み 池田正三 (学校長)

県立へ、そして 中之条の地へ



私が千曲高等学校の前身である上田工業学校にはじめて勤めたのは、終戦後でもない、昭和二十年十月でした。校舎の瓦は剥がれ、廊下はこわされていて、大変に荒れた校舎でした。授業にでて、さらに驚いたことには、机も椅子も

なく、座学のクラスもあって、これで授業ができるものかと思ひ、甚だ心細いかぎりでした。戦争が終って、兵役にいた、先生や生徒が毎日のように帰ってきました。昭和二十一年四月に校名が上田商

科が設置されました。商業科には特別教室はなく、工業科には工場はなく、雨天体操場が工場にあてられたが、実習機械や工具類は殆んどありませんでした。

最近の上田千曲高校

昭和二十二年に建築料の実習工場が新築されましたが、建物が出たのみで、設備等は皆無でした。その頃学制改革が行なわれ、新制中学校が新設されることになり、旧制中学校は、高等学校になることになりました。この学制改革に対処するため、上田市は新学制準備協議会を結成し、その委員に、市側から教育担当職員、市会議員代表者数名、市民の代表者数名、学校側から、小学校長六名、中学校長三名、高等学校から、女学校長と商工学校から私が委員になり二か年間にわたり、数十回の会議を行い研究討論を重ねました。最初に基本方針として、小学校を六校、中学校を三校、高等学校は、女学校と商工学校を合併して、一校設立することが一応決定しました。決定したものの、財政負担と建築費材の不足を考えたとき、これを実施することは、容易なことではありませんでした。このう

池田先生



ち中学校は義務教育でありますから、どんな困難があっても、三つの校舎を新築しなければならないこれとて財政面から考えて、直ちに新築することができないので、とりあえず、一中は北小学校の一部を利用し、二中は中央小学校(現清明小学校)の一部を利用し、三中はしばらく南小学校の一部を利用し、将来は商工学校が他に転転したとき、そのあとに移ることにしました。女学校は当時中央小学校のなかにありました。そのところへさらに二中をおくことになったので、一刻も早く移転しなければならなくなりました。一方、商工学校も早急に移転しなければ一中が困るという状況にありました。

そのように、義務教育の中学校の校舎さえ新築ができないで、一時しのぎに、小学校の一部を利用することにしました。これとてやがて早急に三つの中学校の校舎を新築しなければならない、その上に女学校と商工学校を合併した、高等学校の校舎を同時に新築するためには、膨大な手算を必要とします。その結果、三つの中学校と高等学校とを新設することは、到底市では財政負担ができないではないかという考えが、研究結果として考えられてきました。これは当然高

※

高等学校の設立を困難とする考えであり、高等学校の代表であり、その設立に身命をかけていた、女学校の故一志校長先生や私共の苦悩は、極めて深刻なものでした。しかしながら、教育は百年の計であることに思いをいたし、それこそ全力をつくして、高等学校の必要性を、あらゆる角度から強調し力説しました。その熱意と必要性は、かなり他の委員を動かし、認められました。殊に委員長は、私どもに好意と熱意をもってくれました。最終会議に、委員長が勇頭に発言され、市が或程度の校舎を新築するならば、県立移管が可能である。県立移管になれば、その後の学校の経営は県の負担になるから、高等学校を設立して、県移管にする方針はどうかと提案された。市の負担が、校舎の建築費のみで、高等学校が設立されるものならば、どんなに苦勞しても設立すべきであると、大勢が好転して全員がこれに賛成されました。同時に場所を旧熊谷飛行学校跡（現千曲高等学校）に設置することも決定されました。この時の感激は私にとっては終生忘れられないことです。



この決定を見るや、昭和二十二年、おいたてられるように、まず、女学校が移転を開始しました。移転先には、兵舎と、大、中、小の格納庫が主なるものであり、移転した。商工学校のあとに一中が移つてくることになっていたのです。これも早く移転するように矢の催促でした。商工学校としては、移転

先の兵舎と格納庫では、授業ができないし、移転後に教室の新築を要求しても、容易に実施されそうにない状況下にあることを考えて教室と講堂を新築し、それが完成すれば、直ちに移転する意向を伝えました。市はこれを無理からぬ要求と考へ約一九〇〇平方メートルの大格納庫の改築に着手した。改築は中央を講堂とし、周囲を教室として、その完成を見たので、昭和二十三年に移転しました。改築した、講堂も教室も誠に御粗末極まるものでした。よくもあれで教育ができたものと、顧みて感慨無量です。当時は、生徒も先生も大いに喜びました。

昭和二十四年四月に県移管が決定しました。

昭和二十六年に四教室（三十番台）が新築され、やっとの思いで改築された格納庫が、この年に大雪のため、不幸にも崩壊寸前となり、これにかわる教室が、昭和二十七年に十教室（十番台、二十番台）と理科室が新築されて、ようやくして、千曲高等学校の今日の基礎ができ、安定してきました。その間の市、父兄、先生、生徒の苦勞は大変なもので、言葉にあらわれない程のものでした。

その後順次に体育館、図書館等が改築され、整備されました。この間の関係者の協力と殊に父兄、先生、生徒と学校が一丸となって、学校発展のため尽した苦勞の体験は貴重なものと思えます。

昭和二十八年に、国会で産業教育振興法が成立し、これによって国と県の財政をもって、家庭科、商業科、工業科の特別教室と工場が新築され整備され、今日のようになりました。おそろく近い将来には、校舎の全面改築が行なわれ雄大な近代的校舎が建てられることと思えます。校地は広く、その建物が完成すれば、それこそ果下に誇りうる学校となることでしょう。

学校の発展とともに、卒業生もまたこれに応えるように、各地で各分野に亘り活躍されており、重要な地位についた人、成功された人が多数おられます。この時にあたり、本年五月には同窓会名簿の発行、同窓会新聞も創刊されることをお聞きしました。同窓会も愈々充実しさらに一大飛躍されることか期待されます。私は心の底から喝采を叫び、喜んでいきます。どうぞ自軍自愛され、益々発展されることを祈っています。



登・下校

校門を入ると右側が家庭科の教室である。と思つたら聞くところによると家政科と商業科、それから家政科の研究室があることなるほど多勢の女生徒の間に教人の男子がいる。このクラスは商業科なのかも知れない。

ところで今日は久しぶりに用事があり、恩師を訪ねて見た。門から本館に至るまでの木の並木、しばし見とれる。せわしきでいっばいだった胸の中にさわやかな空間が快くひろがる。

本館の前を過ぎて駆馬池のところまで公仕のおじさんを発見した。うれしかった。変っていいない。やわらかな木々の芽から、桜の花の下から、辺りの教室の窓の中から若く健やかな雰囲気があふれ出てくる。薄暗い教室とは反対に、何と明るいことだろうか。



機械の実習風景（え・同校 建築科3年、森田茂良）

進路状況

職業指導主事

塩入 富雄

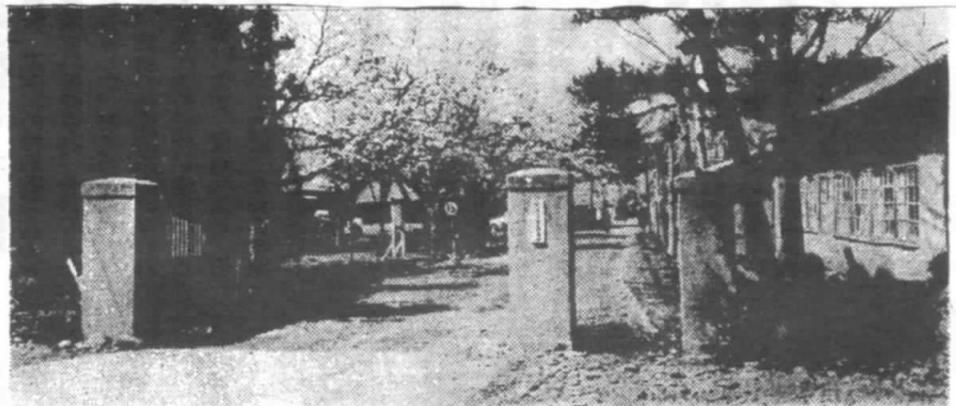
私が昭和二十八年四月にこの学校へ赴任してから丁度十七年になる。当時は各企業とも求人を手びかえていたので、就職することはなかなか難しいことだった。学校に照会のあるものはごくわずか。毎年先生方は、他府県へ出張して早朝から夜おそくまで就職口を探し歩いたものだ。ある会社では、居留守をつかってことわったり、二時間近く待たされたあげくことわられたり、本当に辛い思いをしたこともあった。大企業の中には、会社へ顔を出さない学校へ

は求人を探れないところもあった。一番困ったのは上田千曲高校とい名だ。どこへ行っても実業高校だという内容をいちいち説明しなければわかってもらえないのには閉口した。指定校の枠を取るのに三年かかったところもある。そんな状態だったので、大企業へ就職する生徒も少なく、就職戦線は峻烈を極めた。いまにして思えば、全く嘘のような話である。三十七、八年頃から求人件数も漸増、四十二年を契機として急激な上昇を示している。今年度(四十四年度)の求人申込み会社の総数は約二千件を数えるに至った。聞くところによれば、各企業の充員計画に達しているところはよいほうで、ほとんどの企業は深刻な労働力不足を訴えているのが現状であり、ここ当分の間は就職難の心配はなさそうである。

ちなみに、本年度卒業生(四十五年三月卒)の進路状況は一覧表の通りである。

区分 科	卒業数	進学	家業	就職	就職者の内訳											
					県内		県外									
					上小	他	東京	神奈川	埼玉	茨城	栃木	岐阜	愛知	大阪		
建築	39	10	1	28	4	4	19									1
機械	75	21	2	52	16	18	7	3	1		1				3	3
電気	67	11	1	55	12	18	17	3			1				1	3
商業(男)	7	2		5	1		4									
商業(女)	81	10	3	68	53	9	4	1							1	
家政	118	23	2	93	67	10	13			2				1		
計	387	77	9	301	153	59	64	7	3	1	1	1	1	5	7	

44年度 (全日制) 卒業生進路状況



登・下校

校門を入ると右側が家庭科の教室である。と思つたら聞くところによると家政科と商業科、それから家政科の研究室があるとのことなるほど多勢の女生徒の間に数人の男子がいる。このクラスは商業科なのかも知れない。

ところで今日は久しぶりに用事があり、恩師を訪ねて見た。門から本館に至るまでの桜の並木、しばし見とれる。せわしきでいっぱいだった胸の中にさわやかな空間が快くひろがる。

本館の前を過ぎて懸崖池のところで公仕のおじさんを発見した。うれしかった。変っていない。やわらかな木々の芽から、桜の花の下から、辺りの教室の窓の中から若く健やかな雰囲気があふれ出てくる。薄暗い教室とは反対に、何と明るいことだろう。

上田千曲
高校
同窓会報

発行所
長野県上田市中之条626
上田千曲高等学校同窓会
TEL 07070 平386
代表 中野隆雄
印刷所 秀信社

ス ポ ー ツ 柔道 県大会初V

◎長野県高校総合体育大会東信地区予選 (5月)

◆バレー◆
 (男子)▽準決勝
 丸子実 2-1 千曲
 ◆軟式庭球◆

男子、団体で準優勝
 ▽準決勝
 千曲 2-0 上田
 ▽決勝
 岩村田 2-1 千曲

◆陸上◆
 (男子) 総合準優勝

一〇〇m 滝沢 11秒1 1位
 二〇〇m 滝沢 23秒9 1位
 四〇〇mリレー 千曲 2位
 一六〇〇mリレー 千曲 3位
 三〇〇〇m 小林 2位
 三〇〇〇m強歩 小林 2位
 砲丸投げ 岩崎 12m79 1位
 ハンマー投げ 宮島 3位
 やり投げ 田中 3位

(女子) 総合第三位
 四〇〇m 長谷川 2位
 四〇〇mリレー 千曲 2位
 八〇〇m 長谷川 2位
 砲丸投げ 山崎 10m62 1位
 円盤投げ 山崎 35m2 1位
 足立 3位
 ◆サッカー◆
 ▽準決勝
 上田 5-1 千曲

◆柔道◆
 強し、千曲健児

(団体戦、東信大会優勝)
 ▽準決勝
 千曲 3-1 岩村田
 ▽決勝
 千曲 3-2 佐久

(個人戦) 重積級
 ▽準決勝
 深井 合わせわざ 佐藤
 (千曲) (佐久)

▽決勝
 岩下(北農) 優勢 深井

◆水泳◆

(男子)
 一〇〇m背泳 竹下 3位
 二〇〇m背泳 竹下 3位
 一〇〇m平泳 柳沢 3位
 二〇〇m平泳 柳沢 3位
 四〇〇m自由形 滝沢 2位
 四〇〇mリレー 千曲 3位
 四〇〇m個メドレー竹折 3位

(女子)
 一〇〇m平泳 森生川 3位
 ※以上、県大会出場。このほか県大会出場者多数あり。割愛。
 ◎第17回長野県高校総合体育大会(兼、全国・北信越大会予選)

◆陸上◆ (6月)

総合、男子五位
 女子六位

(男子)
 一〇〇m 滝沢 10秒9 1位
 ※3メートルの追い風ながら県高校記録に0秒1に迫る好記録

二〇〇m 滝沢 23秒5 2位
 砲丸投げ 岩崎 12m92 2位
 やり投げ 岩崎 47m50 3位

(女子)

円盤、山崎春美

全国大会進出

円盤投げ 山崎 37m90 1位
 砲丸投げ 山崎 10m95 2位

◆軟式庭球◆

(男子)団体第三位

▽準々決勝
 千曲 2-1 松本県ヶ丘

▽準決勝
 長野中央 2-1 千曲

(8月2-4日、山形県鶴岡市で行なわれる全国大会に出場)

(団体戦)

▽準決勝

千曲 3-1 岩村田

▽決勝

千曲 2-0 屋代

◆定通部柔道◆

定時制堂々

県大会を制覇

(団体、個人とも全国大会へ)

(団体戦)

▽準決勝
 千曲 4-0 上農

▽決勝

千曲 5-0 中実

竹内 ○けき固め 佐藤
 高見沢 ○背負投げ 池田
 金井 ○送り足払い小沢
 堀内 ○背負投げ 小林
 竹内 ○大腰 佐々木

(個人戦)

優勝—金井、準優勝—堀内

◎北信越高校体育大会 (金沢)

◆陸上◆ (6月24日)

百、県高校タイ記録を出し滝沢北信越高校で優勝全国大会へ

一〇〇m 滝沢由紀夫 1位

長野県高校タイ記録 10秒8

◎第25回長野県陸上競技選手権大会 (7月9日・松本)

(男子)

一〇〇m 滝沢 11秒2 1位

やり投げ 岩崎 56m52 2位

(女子)

円盤投げ 山崎 34m76 1位

◎第54回全国高校野球地区予選
 東部高校を破り
 県大会出場なる

代表決定戦 (7月16日)

千曲 000310000 4

東部 000001000 1

(千曲) 松崎—三浦

(東部) 丸山、小川—浅野

上田千曲29646912380

打安打振球犠盗失残併

小県東部30415321071

▽三塁打 八木沢(千曲)
 ▽二塁打 松崎(千曲)
 千曲は四回表、二塁に尾崎、一塁に松崎を置いて七番八木沢が殊勲の三塁打を打ち試合の主導権を握った。

春の北信越県大会で松商学園を苦しめ、前評判の高かった東部を一点に抑えたのは立派であった。また、手がたい選球とまとまったチームプレーが見られ県大会での活躍が期待される。

南極観測隊に参加して

(昭和28年機械科卒業)

日産自動車宇宙航空部実験課

竹内徳男

昭和二十八年春母校を卒業以来私は日産自動車で航空発動機のオートバトホールとロケットの開発業務に従事してきた。今まで多くのものを開発し、人口衛星が誕生するまでに至った。

「ご承知のとおり昭和基地でもロケットによるオーロラ観測が計画され、私も今回第十二次南極観測隊員としてこれに参加した。昭和四十五年十一月二十五日に晴海を出港して以来昭和四十七年四月二十二日帰国した次第である。

「ふじ」は昭和基地を目前にして密水群に阻まれ、三十九日間の立往生が続いたが、自力脱出の未やうと昭和基地に到着出来た。

ヘリコプターによる空輸作業を継続し、三月十七日越冬宣言をしたものの建設が遅れ、まもなく訪

ずれる冬に備えロケットの準備を行なった。

精密な観測器を積んだロケットは夜間のオーロラを待機したが、出方が悪く、幾日も待ってやうとの思いでロケットを打ち上げ、オーロラの観測に成功した。

昭和基地は十二月一日から一月二十二日まで夜のない夏で、気温は零度以上にも達する。これに反して、六月一日から七月十三日までには昼のない冬で零下四十度にもなる。

オーロラの本格的な観測は、夜ばかりの冬の期間で、冷たい夜空の輝きは神秘的で、色や型がいろいろに変わりその光景はすばらしいものであった。

昭和基地では三月から十一月にかけてブリザードという雪や氷を舍んだ強い風が、普通月に二、三回、多い時には五回も吹き続け、時には秒速五十メートルにも達する。これが三日も四日も続き、視界が悪くて室内でじっと静まるのを待つ。

こんな時、隊員が観測のため戸外へ出る際は、命綱を頼りに歩くのである。

越冬隊員は毎日特定な人と顔を合わせているので、互に気分を損なう言動を慎しむ様に努めている

十月頃になると昭和基地にも春が訪ずれ、雪解けが始まり、暖かかった北の海からペンギンが南にある昭和基地周辺の島にやってくる。ペンギンは巣作りをはじめ、十二月には雛をかえし、やがて北の海に去っていく。

ラジオやテレビ等のない基地は無線電報が唯一の情報手掛りで生活が単調になる。楽しみが少なから、いろいろなゲームに集中し特に映画が人気のあった。

すぎて見れば短かい一年間、しかし時には日本に帰りたい気持ちにもなった。隊員は互に励まし合い乍らじっと堪え、翌年になって次ぎの隊員がやって来るまでの忍耐だと思い、皆自分の仕事に励んでいた。

一月一日に次ぎの隊が昭和基地にやってきた。日本から楽しい郵便物を運んできてくれたので、それを受け取った隊員は日本を懐かしむ様に夢中で見る。

一月間第十三次隊員と共に基地建設を行ない、引き継ぎを終了して二月十一日帰艦した。

南極観測はますます発展の途にあり、越冬して観測している貴重なデータが我々の実生活に役立つ日も近い。

富山祥伸君 逝去

尊い人命救い 長官表彰

(昭和47年電気科卒)



上田文雄 校長
昭和46~51年

四月に会員になられたばかりの富山祥伸君が、人命救助で尊い命をおとされて県警本部長表彰をうけられ、最高の表彰である警察協力章が贈られました。富山君は五月七日午後友人と散策中、中学生が千曲川に転落したのを目撃、助けようとして飛び込んだが急流で思うに任せず、流されながらも近くの人に声をあげておぼれていることを知らせたため、中学生は助けられたが富山君はそのまゝ、行方不明となり、翌日水死体となって発見されました。

葬儀が五月十二日に町民センターで県警を始め町長、会社々長、中高校時代の同級生、野球部等多くの人が参列して、しめやかな中にも盛大にとり行われました。本会よりも花輪一基をおくって弔意を表わしました。たくさん弔辞が朗読されましたが、どれにも、富山君の実行力と勇気ある行為をたゞえる言葉が聞かれました。広い会場が狭いほどにはいったくさんの参列者と、さん然と輝いくつかの表彰状を始め、数多くの花輪と、祭壇いっぱい供物に見守られ、全員合唱の読経の声に守られて富山君の霊は極楽浄土へと旅立ちました。

今まで本校同窓会には会報なり会誌などというものはありませんでしたが、その代りに学校新聞を主として各事業所の同窓生にわずかながら配布しておりました。

このたび、同窓会名簿が発刊の運びとなり只今の新聞と同時に振替伝票(加入書負担)を御同封し、多数の申込を御待ちしているわけですが、とにかく同窓生全員を目標に新聞を御手もとに届けることが出来まことをうれしく思います。

同窓会誌に

寄せて

昭和二十三年三月機械科卒業

井 出 正 男

昭和二十四年三月に上田市立高
校の機械科を卒業以来早いもので
もう二十二年にもなります。当時
の母校は終戦と学制の変革期にあ
たり多難な時代でした。

私が入学した当時は戦時中でし
たので、高学年は工場に動員され
ていたし、私たち低学年は田植の
手伝いとか工場疎開の手伝いなど
をしていました。そうこうしてい
る間に終戦を迎えました。

八月十五日の終戦の詔勅は当時の
母校上田工業学校のラジオで聞き
生徒一同懇懐はよく解らないなが
ら戦争が終ったということを知り
ました。

その後動員されていた生徒も復
学し、勉学が始まりました。しか
し机や椅子なども不足していて、
最初は教室の床に座って勉強をす
るという時代もありました。

そのうちどうにか机と椅子で勉
強できるようになり、学校も昭和
二十一年四月に上田商工学校とな
りました。その頃上田市の財政上
の理由から機械科が廃止されると
いうことになりましたが、機械科

の生徒が一体となつての強力な反
対運動などが起つたりして、どう
にか廃止は取りやめになるとい
う事件などもありました。

昭和二十三年四月には上田実科
女学校と合併して上田市立高校と
なり、十月には東国民学校跡の校
舎から飛行場あとの現在の場所へ
移転しました。

その頃私は二年下の内藤利幸君
(昭和二十六年三月建築科卒)ら
と科学班を作り、主としてラジオ
やアンプの研究をしていました。

学園祭などで放送の担当をしたり
した思い出があります。

さて現在の私の専門について述
べますと、武蔵工業大学の電子通
信工学科の教授として無線関係の
の研究を行っています。

七千〜二万ヘルツ程で、これは半
合や個人差によっても大きく異な
るので、人間の耳を規準として考
えることは適当でないわけで、そ
れに音を物理的に考えてみても耳
に聞えるか聞えないかは本質的な
違いではないわけです。

このようなわけで、最近では超
音波の応用される周波数範囲が広
くなったこともあって、人の耳で
聞くことを目的としない音波の応
用のことを超音波の応用と呼ぶよ
うになってきました。

人間の耳を対象にしないとい
うことで、超音波の大きな特徴が
出できます。即ち人間は元来空気の
中に住んでおり、しかも常温常圧
でなければならぬわけですが、
人間の耳を対象としなければ温度
は高くても低くても良いし、圧力
も常圧でなくてよく、音を伝える
媒質も空気だけでなく、鉄とか固
体とか、あるいは人体とかいろい
ろのものが対象になり得ますので
それだけ応用の可能性が広くなり
ます。

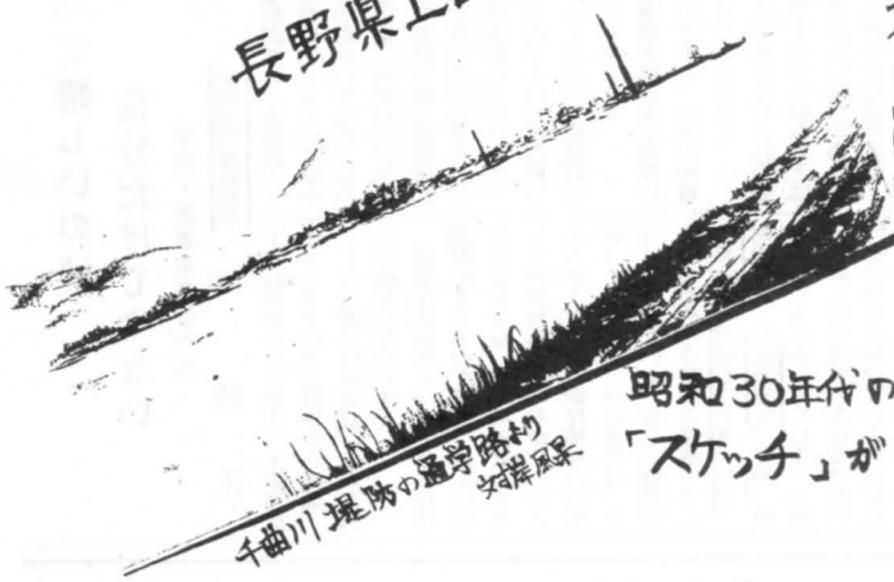
超音波は音響工学と電子工学と
が組み合わされた総合的な工学技
術ですが、その応用は非常に広範
囲に用いられています。われわれ
の周りを眺めても、日常使用して
いる時計類などの精密機械の部品
や牛乳ビンに至るまで超音波によ
って精密に洗浄されている他、ブ

また最近注目されている応用の
一つとして交通事故などの場合の
頭蓋内出血の診断や、乳ガンなど
の診断に広く利用されている超音
波診断装置の発達があります。こ
れは超音波診断装置は生体軟部組
織の診断に優れた能力を持ってい
ることと、現在超音波診断装置に
用いられている程度の微弱な超音
波ではX線における放射線傷害の
心配がないことなどによります。

武蔵工業大学
電子通信工学科教授

27・87頁にあります。
昔も今も大活躍とい
うわけです。

昭和三十八年三月
第十五回卒業
長野県上田千曲高等学校



昭和30年代のアルバムの扉には、
「スケッチ」が……。 (平成のものから写真)

千曲川堤防の通学路の
夕景風景

カリフォルニアで

永井 憲三

上田千曲高校のみならず、日本のみならずお元気ですか。ぼくは今アメリカに留学して、International Businessの勉強をしています。

期待と不安を胸に五色のテープとドラの音の中をみんなに見送られて横浜港を静かにすべり出したのは六月一日でした。

以前からアメリカ大陸を夢みていたぼくが、それだけの力と勇気に欠けていたのです。しかし今はここでいろいろなことを学んでいます。こうしてアメリカで生活していると、ぼくが今まで気づかずにいた日本のいろいろな点があるで透明なガラスでも通して見ているように見える。今までは日本人の感覚で日本で学んだ限られた知識で、日本という小さな国から見て考えたり、想像したりしていた。しかしこのような今までの考え方がすべてでないことに気がついた。とにかく吸収することの多さに驚いておりアメリカへ留学することができてほんとうによかったと思っています。

しかし、ぼく達日本人が日本で学問することさえ容易なことではない。ましてやぼく達にとって言葉や環境が全く異なった国で学問することが容易であるはずがありません。とくに時間と競争がすべてを支配しているアメリカにおいてはなおさらのことです。異った文

化や言語ばかりでなく、日常の生活様式さえも、ぼく達の前に障壁として立ちばたかたのです。

しかし、豊かな幅の広い国際的な教養と感覚を身につけその上、将来のかけがえのない喜びや報酬をも得るために、ぼくはこれらの困難を克服しなければならぬのです。ぼくは自分の将来の向上発展を望む。だから自国のみに自身を閉じ込めておいて安住しては行かれないのです。

現在、われわれ青年が一国のみ閉じ込められ、限られた範囲の知識に甘んじていることは許されないのではないだろうか。われわれ若者は、複雑な現在の世の中が要求していることを素早く感知し、これを身に付けなくてはならないのです。

おさえられないほどの興奮と希望を胸に日本とは対照的な広々とした、カルフォルニアの夕日を浴びながらアメリカの土を踏んだ。

一 中略 一

夜もふけてきました。地球の裏側の日本は今ごろ太陽の輝りつける屋でしょう。こうして机に向って筆を持っていると日本でのいや千曲高校の機械科で学んだことが、つきつきとぼくの脳裏を駆けめぐって絶えません。

(四十二年機械科卒)

日本の一流選手へ

陸上で大活躍する

東急・浪純江さん

第35回東京陸上競技選手権大会

(4月30日・国立競技場)

女子五種競技で長野県記録保持者の浪純江(東急)、362.4点をあげて優勝

▽五種競技 ①浪純江 362.4

点②東(東大) 343.4点③内

田(東女体大) 335.2点

第14回東日本実業団対抗陸上競技選手権大会(5月13日)

▽二〇〇m ①佐藤妙子(日立)

26秒2②浪純江26秒3③吉川

(東急) 26秒8

▽一〇〇m ①浪純江15秒4

②佐藤(リッカー) 15秒9③川

澄(日立) 18秒1

第56回日本陸上競技選手権混成

競技(5月28日・世田谷競技場)

選考会を兼ねたこの大会でも五種競技に出場し、大会新記録で2位に入賞

▽五種競技 ①清水鏡子(日体

大) 386.7②浪純江382.2

以上大会新③滝村(国士大) 368.0

第56回日本陸上競技選手権兼ミ

ュンハン・オリンピック代表選考

選考会(6月3日・国立競技場)

▽一〇〇m ①山田恵子(日体

大) 12秒3②土田(法大) 12秒4

③浪純江



浪純江さんの期待の選手

勝って嬉しいのは

自分だけじゃない

東急・流通事業管理部

昭和46年家政科卒

浪純江

波谷一横濱間を結ぶ東横線の丁度真中あたりに新丸子という駅がある。そこから歩いて三分、花の女子寮「東急第二清和寮」があります。ここで私たち陸上競技部員十三名とまかないの小母さんとの少数の寮生活をおくっています。新丸子から約二十分、終点波谷に着くと歩いて三分「東京急行電鉄株式会社」があります。

この流通事業管理部企画課に私の机がおりてあり、仕事の内容は庶務関係をやっています。前記の様に、私はこの会社の陸上競技部員ですので一般の方とは異なり優遇されている面があります。会社は九時半から三時まで、四時から新丸子のホームグラン

です。……私、幸せよ、家での人、指導して下さった方、周囲の人、学校の先生、後輩、皆がいっしょに喜んでくれる、「勝って嬉しいのは自分だけじゃない」ということ知っているからなんです。

1976 モントリオール・オリンピック 走り幅跳び出場記念

浪純江

長野県上田千曲高等学校 陸上部OB会



桐葉館

運動会に思う

科対抗を廃止・ブロック対抗形式に

「**輪ころがし**」もあつた。
S.61年

今回で十四回目を迎える運動会三年生は一回であるが、一・二年生には初めての体験である。今年も、色々検討された結果、ブロック対抗という新しい形式で行なわれる事になった。ブロック対抗でも多くの弊害があるが、ある意味では我々の体質改善(?)となるのではないだろうか。

一昨年、まだ何もわからないまま、先輩の指示に従って始められた運動会。後で振り返ってみると多くの問題があった。

ある人は、体育授業の発表の場だという。いったい運動会は何のためにやるのだろう。

「何のために? 目的は?」と聞くとき答えられる人は何人いるというのだろうか。目的がはっきりわからないまま計画され実行されていく。当然不満や問題点が出てくる。

— (中略) —

ところが評議委員会では決定されたブロック対抗がどうのこうのと進められないままきてしまった。こていねいに差し戻し審議を評議委員会にさせ結局ブロック対抗となったのである。

実行委員会は評議委員会の決定に基づき、それを実行するために苦



文化祭 最後のイベントは 男子仲よくフォークダンスで!

勞し実行するのが役目なのだ。実行委員会が活発に動き出したのは九月に入ってからである。それまでは黙りむっすり審議。

さて色々問題はあれど、やる以上は立派なものにしていく。

三年生の記憶の中にはまだ、二年前の行進の時のあの力強い足音が残っていることだろう。そして一、二年生はスライドで見た運動会をもう一度思い浮べてみよう。



田舎の頃

S.61年7月15-16日

菅平合宿(休)は雨の中。
キャンプファイヤー。



カット 片桐昭先生



学校祭(4曲祭)の看板(S.25年)



先輩の井出さんおもしろい。

放送設備完成(S.25年)電気班

ゴムヅクリに帽子をかぶっている。
「小林侑」さんはどれか?

● 本文 25~27頁を見よ……

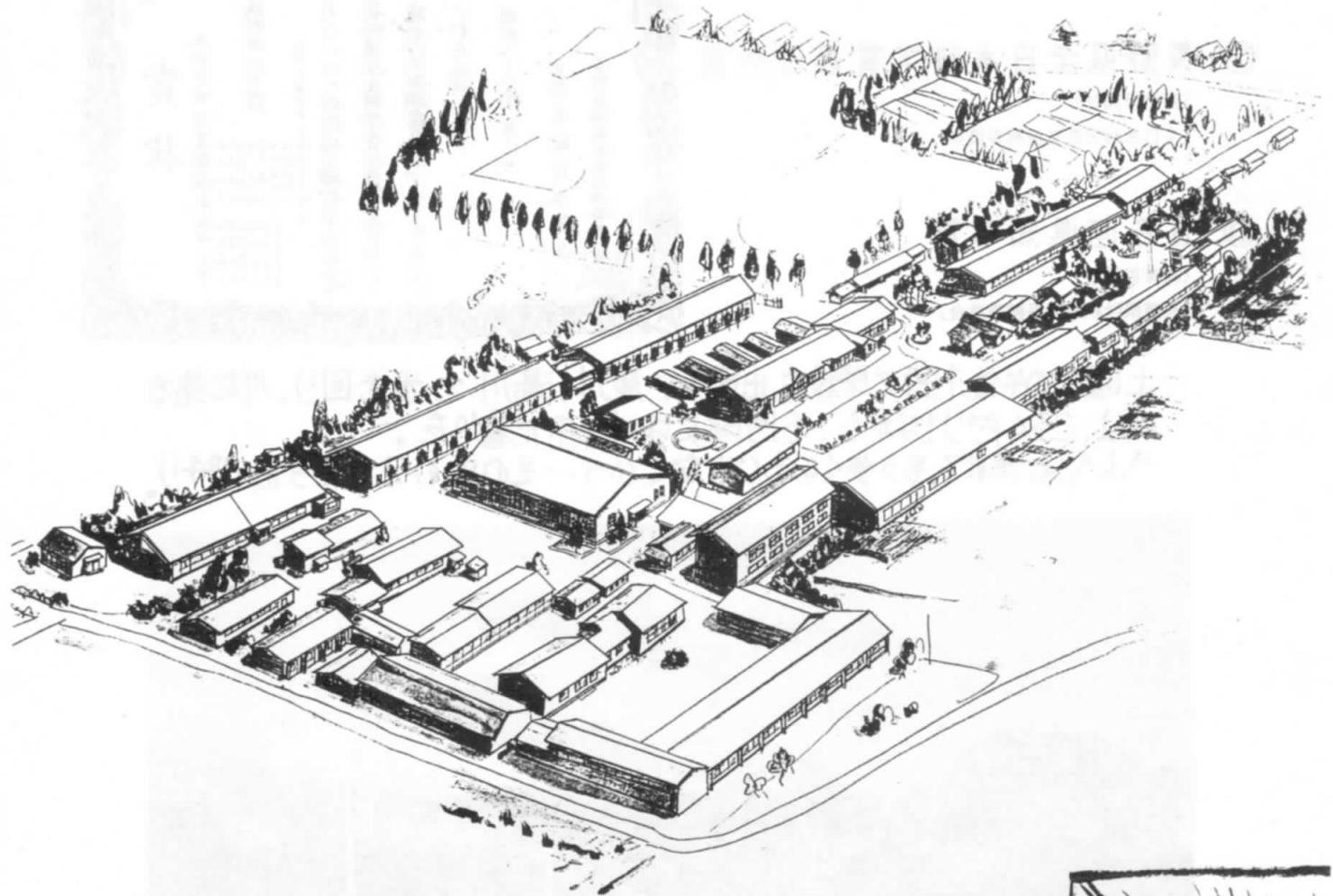


S60年まで、クリスマスO
服装は白シャツと決めていた。

(校舎スケッチ)

青春が、

全面改築前の旧校舎



当然、木製の机と椅子
〔教室〕



玄関 洒落たデザイン
であった。



木枠の窓も懐しい。
瓦屋根の校舎……

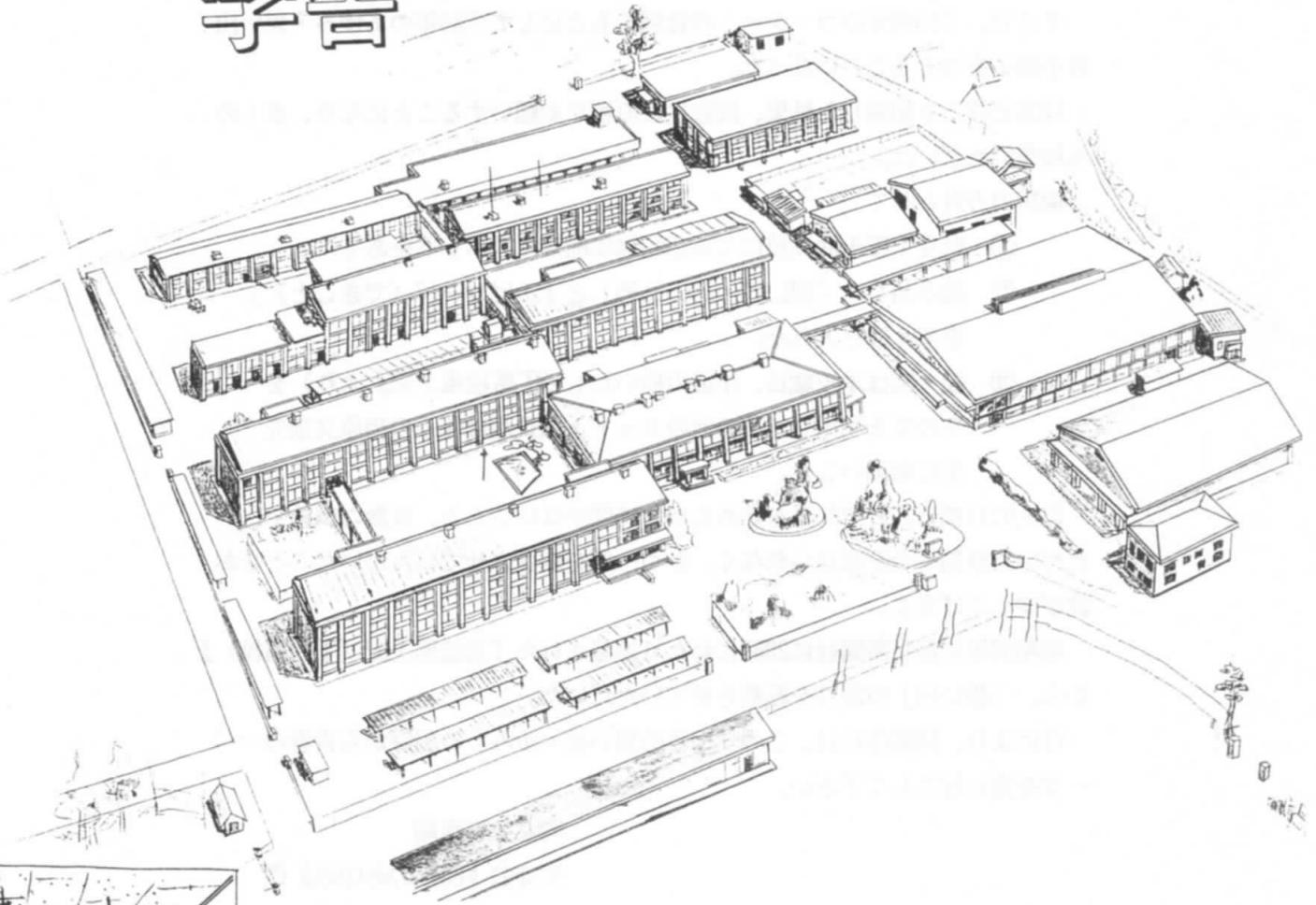


正門 左が杉並木、右がポアラと〇番教室

駆け抜けた

現在の校舎

学舎



床はフローリング

〔教室〕



左 昇降口とH.R棟, 右 玄関 管理棟



旧 正門

- ・手前 テニスコート
- ・向こう(西)側グラウンド
- ・夜間照明灯が見える。

新装なった 桐葉館(同窓会館)

(かつての電気棟)

周辺を、クラス毎で草刈りをした。

あ と が き

千曲祭が目前となった7月に、千曲祭の発表の一つとして『80年のあゆみ』に取り組むことになった。

そこで、「80周年のコーナー」の資料をもとにして「80年のあゆみ・思い出」の小冊子をつくることになった。

同窓会係とも相談した結果、同窓生に原稿をお願いすることになり、多くの玉稿をいただいた。

編集の方針として

- ① 県立上田千曲高校になる昭和24年前後にスポットをあてた。
- ② 読み易くと「思い出・あのこと」と「エピソード（できごと）」を多く取り入れた。
- ③ 絵・図は本校職員、生徒の描いたもの(『高校風土記』より)をそのまま利用し、その他のカットと風景画は係りの相原文哉先生にお願いした。

以上の目標と方針で作業を始めたが、時間がないことと、頁数の制約で、いただいた原稿を全部載せられなく、かつ一部を変更させていただいたことをお詫び申し上げます。

昭和50年に毎日新聞社に20回にわたり連載された『高校風土記（千曲高校）』から、「思い出」の語りを転載させていただいた。

なにより、同窓生には、この「母校の思い出・歩み」の記録から青春のページを思い起こして下さい。

同窓会事務局

生徒会『80年のあゆみ』係



1997年10月11日

上田千曲高等学校（上田市 中之条 626番地）

【編集とワープロ】

相原 文哉	内堀貴美子	上條加奈子	宮沢 絵美
井原 清	林 高志	長崎 寛子	長谷川悦子
清水 智子	倉島 夏美	宮原 知江	朝日奈千陽



桐の校章
商業科

定時制野球部

カンボジアの子供たちに笑顔を

上田千曲高生支援訴え

来月文化祭で展示発表へ

上田千曲高校(上田市)の生徒たちが「カンボジアの子供たちの笑顔を見た」との思いを胸に、九月六、七日に開く文化祭でカンボジアへの支援を訴える全校企画の準備に励んでいる。

生徒会顧問の相原文哉教諭が、カンボジアで井戸を掘るなどの活動をしている奈良・東大寺の僧りよ、内田弘慈さんを知ったのがきっかけ。内田さんを通じてカンボジアに絵本などを届けてはどうかと生徒会に提案、カンボジアの実情紹介と支援を全校企画にすることが決まった。

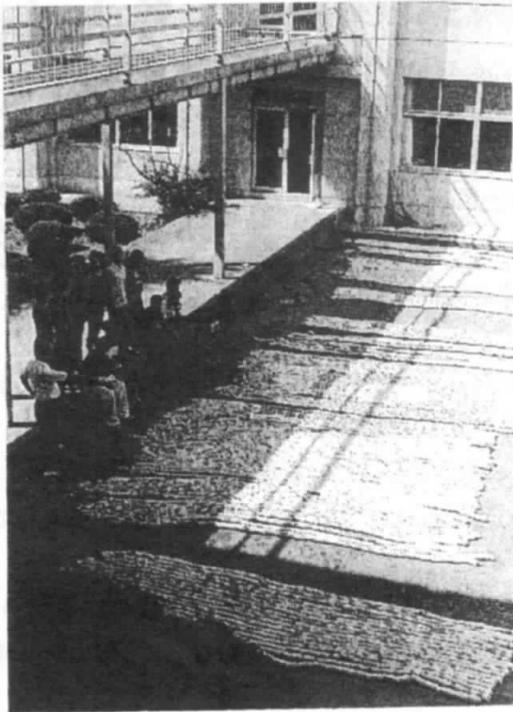
文化祭当日は、カンボジアの気候風土や地雷に悩む現状などをパネルや写真で紹介し、ジユースなどの空き缶で作った縦四角、横二

十五分の壁画で支援を訴え援できると実感している。絵本や衣類、タオルなどの支援物資受け付け窓口や募金箱を設けるほか、バザーなどの収益金を現地の学校建設資金に充てる。

担当の吉田千香さん「二年は「速い存在だったカンボジアを、高校生でも生徒会会で受け付ける。」と期待している。支援物資は

十五分の壁画で支援を訴え援できると実感している。絵本や衣類、タオルなどの支援物資受け付け窓口や募金箱を設けるほか、バザーなどの収益金を現地の学校建設資金に充てる。

担当の吉田千香さん「二年は「速い存在だったカンボジアを、高校生でも生徒会会で受け付ける。」と期待している。支援物資は



制作中のカンボジア支援を訴える空き缶による壁画

東信ジャーナル

(1) 1997年(平成9年)9月9日(火曜日)

カンボジア救済テーマに

上田千曲高生

上田市の上田千曲高校は、六日と七日に行なった文化祭「第三十八回千曲祭」で、全校生徒が「カンボジアの子供たちへの救済活動」をテーマに国際的な支

援に取り組んだ。

この結果、市民に呼び掛けて集まったタオルや衣類によるバザーと、ポップコーンやわたあめなど屋台の売上げ金、募金活動などで約十八万円の支援金を集めるなど大きな成果をあげた。

第二体育館前には支援活動を目に見える形にしようと、全校生徒が持ち寄った空き缶約一万一千個を色別に

展示発表では、パネルやカラー写真で同国の政治情勢や地雷の恐怖を訴え、訪れた人たちに絵本やえんぴつなどの寄付も呼び掛けた。

この取り組みは、今年八月から始まったもので、カンボジアで井戸を掘りながら子供たちへ教育資金の支援をボランティアでしている拓本美術家で奈良県の東大寺の僧侶、内田弘慈さんを知ったことがきっかけ。

内田さんの生き方に感銘して企画したという生徒会顧問の相原文哉教諭(51)は「大きなテーマを持ったことで生徒たちが生き生きと動いていたし、やり遂げたことで自信もつかんだようだ」と生徒の頑張りを目を細めていた。

空き缶で作ったカンボジア支援の絵文字



また、カンボジアコーナーの

「写真に「当日の様子」の記事」

週刊上田、上田ケーブルテレビにも放送

取りあげられ、反響が大きかった。

※カンボジア・コーナーは、二階中央廊下に、81ページに(当日9/6の様子加)

※空き缶の作業は中庭にて行った。